

教会学校教案誌

No.15

2004.10.11.12月号



日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

日曜学校 2004年度カリキュラム (2004年10～12月分)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
10月3日	神の怒り	間20	ウ小19、ウ大27-29、ハイデ10-11
		ローマ1:18-23	ローマ5:9
神は愛であり、義であられる。愛の故にこそお怒りになる義なる神を証しする			
10日	あがない主の必要性	間21	ウ小20、ウ大30、ハイデ54
		ヨハネ7:53-8:11	イザヤ1:18
罪と弱さを抱えながら救い主・あがない主の前に立つことの祝福を証ししよう			
17日	二性一人格 (一)	間22	ウ小21-22、ハイデ35-36
		ルカ1:26-38	ヘブライ4:15
神であり人である主イエス・キリスト。「どのようにして」という御業の側面から			
24日	二性一人格 (二)	間22	ウ小21-22、ハイデ16-18
		ヘブライ2:14-18	ヘブライ2:17-18
神であり人である主イエス・キリスト。「なぜ」という必要性の側面から			
31日 宗教改革記念	主は救い、イエス	間23	ハイデ29、34
		マタイ1:18-25	マタイ1:21
主イエスの御名について。主イエスの御名を呼ぶことの祝福を語る			
11月7日	神の御子、キリスト	間23	ウ大42、ハイデ31、33
		マタイ16:13-20	マタイ16:15-16 (新改訳)
キリストの職務について。神の御子が救い主キリストであられることの祝福を			
14日	謙卑のキリスト	間24	ウ小27、ウ大46-50、ハイデ43
		マタイ27:45-50	マタイ27:46
へりくだりのキリスト。すべてをささげて私たちの救いとなられた。感謝へ			
21日	高擧のキリスト	間24	ウ小28、ウ大51-57、ハイデ45
		使徒1:6-11	使徒1:9
高く挙げられたキリスト。勝利し今も私たちのために働いておられる。讚美へ			
28日 アドベント	待降節	—	—
		イザヤ11:1-5	エフェソ1:4
メシア預言。救い主イエス・キリストを待ち望むことへ			
12月5日 アドベント	待降節	—	—
		イザヤ11:6-10	イザヤ11:6
メシア預言の続き。再臨の主イエス・キリストを待ち望むことへ			
12日 アドベント	待降節	—	—
		イザヤ53:1-12	イザヤ53:12c
メシア預言。私たちのために苦しみを担われた救い主の姿を仰ぐ			
19日 クリスマス	降誕祭	—	—
		マタイ2:1-12	マタイ2:10-11
占星術の学者たちの物語。主イエスを拝み礼拝する喜びへ招く			
26日	一年の感謝	—	—
		詩編27:1-14	詩編27:1
一年の歩みを振り返って主に感謝をささげ、主をほめたたえる			

も く じ

2004年10・11・12月分カリキュラム		
まえがき	岩崎 謙 … 4	
巻頭説教「求める者に聖霊を」	三川栄二 … 5	
日曜学校・教会学校訪問		
松戸小金原教会「こひつじ日曜学校」の紹介	7	
講演録「日曜学校教師に求められること ～子どもへの牧会の視点から～」(二)		加藤常昭… 11
自由献金のお願い	28	
聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例		29
10月3日	30	
10月10日	38	
10月17日	46	
10月24日	54	
10月31日	62	
11月7日	70	
11月14日	78	
11月21日	86	
11月28日	94	
12月5日	101	
12月12日	108	
12月19日	115	
12月26日	122	
小学科上級教材	129	
成人科		
「創立20周年記念宣言と今日的意義」(二)	牧田吉和… 130	
2005年1・2・3月分カリキュラム		137
編集後記	138	

まえがき

岩崎 謙 (神港教会牧師)

神港教会では、7月24日(土)と25日(日)に聖書学校サマースクールを行いました。土曜日は教会に宿泊し、日曜日の朝の礼拝を「親子礼拝」として守りました。今回のテーマは「イエス様に来てくださったわけ」で、「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネによる福音書10章10～11節)が主題聖句でした。

以下、当日の説教を紹介しながら、「命を豊かに受ける」ということを考えてみたいと思います。「命が豊かになる」とは、健康で、毎日美味しいものをたくさん食べることではありません。どんなにお金があっても、或いは、どんなに勉強をしても、或いは、どんなに偉い人になっても、それだけでは、命が豊かになりません。今日は、羊と羊飼いは、お互いによく知り合っているということを学びました。命が豊かになるとは、羊と羊飼いがお互いに知り合うその交わりの豊かさにあります。自分の羊飼いは、本当に自分のことをいつも覚えて大切に扱ってくださる。自分もこの羊飼いに心からお世話したい。このように羊と羊飼いの心が一つに通じ合うところに、命の豊かさがあります。命の豊かさは、寿命の長さでも、物が沢山あるお金持ちの豊かさでもありません。そうではなく、イエス様を通して神様を知り、神様に知られていく、その交わりの豊かさにあります。」

ヨハネによる福音書は、羊飼いが羊を知り、羊は羊飼いの声を知る、双方の豊かな交わりを描いています。そして、これは、父なる神様がイエス様を知られ、イエス様が父なる神様を知っておられるその両者の交わり(14節)と同じものである、と説明されています。教会学校は、

教師と生徒との交わりにおいて、この命の豊かさを育むことを目標にたく思わされています。また、これは、イエス様と子どもたち一人一人の間に宿る命の豊かさです。

そして、ヨハネの福音書は、良い羊飼いと羊の関係を、「泥棒や強盗」や「自分の羊を飼っていない雇われ人」と羊の関係との対比において描いています。泥棒は、羊を盗み、屠り、売り飛ばし、羊によって自分が豊かになろうとします。泥棒が来るのは命を奪い取るためです。また、雇い人は、通常は良い仕事をしていても、狼がくると自分が怖くなって、羊を残して自分が逃げます。するとその後に狼が羊の群を引き裂くこととなります。これらとの対比において、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と語られています。羊飼いが、自分の命よりもより大切なものとして羊の命に配慮するとき、つまり、羊のために自分の命を捨てる時、「羊は命を豊かに受ける」こととなります。イエス様に来てくださったわけは、一方において、盗人や雇われ人によって命の危険に晒されている羊の命を守り、他方において、ご自分の命を与えることにより羊の命を豊かにするためでした。

「命が豊かになる」とは、私のために命を捨て与えてくださるイエス様によることを、改めて覚えました。教師と生徒がともどもに、イエス様によって、命を豊かにしていただくこと、ここに、聖書学校の使命があります。また、これは教会の使命でもあります。親子礼拝でこのお話しをしたとき、子どもたちは敏感に「泥棒」や「雇われ人」の恐さに反応しました。この世の恐さを子どもなりに知っています。だからこそ、イエス様という良い羊飼いに養われる必要があります。ここにこそ、羊の幸せがあります。

「求める者に聖霊を」

—ルカによる福音書11章9～13節による説教—

三川栄二（稲毛海岸教会牧師）

そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたの中に、魚を欲しがる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。また、卵を欲しがるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。

（ルカによる福音書11章9～13節）

ここでは、「誰でも求める者は受け」ることが約束されています。祈りは必ず聞き届けられる、そのような信頼の中で、神に祈ることが求められているのです。しかしそこでどうしても尋ねずにはおれないことがあります。それは本当に祈りは聞かれるのかということです。実際のところ、むしろ聞かれない祈りの方が多いのではないか、熱心に祈り求めたが、神は応えてくださらなかった。それが私たちの正直な気持ちではないでしょうか。特に人生の大切な節目、危機に陥ったとき、問題に直面したときに祈る。その祈りに対して、願ったこととは違うことがよくある、あるいは願った道とは違う道が開かれていくことがあります。そうした祈りの積み重ねの中で、祈りに対して不信感を抱き、祈っても無駄ではないかと祈りに躓ってしまうのです。

そんな私たちの祈りの不信の中に主はこの言葉を投げ込まれます。ここでいう魚とは海蛇のように細長い魚で、ウナギみたいなもの、またさそりは丸めると卵のようになることから、どちらも一見すると区別がつかない似たもの同士を組み合わせであり、しかも一方は有益なものに対して、他方は有害、危険なものという対比になっています。「あなたがたは子供がウナギを食

べたいというのに、形が似ているからといって毒蛇を与えるか。卵が食べたいというのに、似ているからといってさそりを与えるか」と主は問うておられるのです。そんなことはありえない。不完全な人間の父親でさえそうならば、まして完全な天の父は、そんなことをするはずがない、むしろもっと良いものをくださり、最上のことをしてくださるはずだと主は語っておられます。その前提には「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」（マタイ6章8節）という、父としての神への信頼があります。不完全な人間の父親でさえ、自分の子供の必要や好みといったことを不十分ながらも知っている。そして必要な物を、必要な時に、必要なだけ与えるからです。

しかし同時に、本当に必要な物を親として見極めて、たとえそれを子供が欲していなくても、子供の願いとは違っていたとしても、必要であれば与えるのです。子供が欲しがるという、むやみにその要求をかなえることはありません。本当にその子にとってふさわしい物がどうかを、吟味して与えます。また与えるのにふさわしい時があり、欲しい時すぐに与えれば良いわけではありません。ふさわしい与え方があります。

ですから親であれば、不完全ながらも子供の要求に対して、それをよく吟味し、時と方法を考えて与えます。親はちゃんと子供の要求も聞いて、しかも本当の必要を知った上で、必要な物を与えます。まして完全な父である神が、私たちにそうしてくださらないはずがあるでしょうか。私たちの父は私たち以上に私たち自身のことを良くご存じで、最もふさわしいものを私たちにしてくださる方なのです。

さてしかし、このように神が、私たちのすべてを私たち以上に知っておられるなら、なぜ神に祈り求める必要があるのでしょうか。主御自身、そのことを明言された後で、すぐにつづけて「だからこう祈れ」と主の祈りを教えてくださいました。ここで主は、私たちが自分の子供に良い物を与えることを知っていると言われた後、「まして天の父は求める者に」と言われました。天の父は、あくまでも「求める者」に必要なを満たしてくださるのです。人間の親でさえ、なんでもかんでもそれを子供が欲する前に与えることはしません。そうすれば子供の自主性が育たず、なんでも人にやってもらわなければならない人間となってしまうからです。自立した人間とならないのです。だから親は自分の必要や要求を、子供に自分の口で言わせ、自分から求めさせます。私たちの祈りも、神が私たちの必要をご存じないからではなく、私たちの訓練のため、成長のために与えられたものです。

私たちの願いの中には、気まぐれで、一時的、衝動的なものがあります。神がそれをすぐ与えず、あえて私たちに求めさせるのは、私たちが祈り求めていく中で、自分の要求を自分自身で良く知り、吟味するようになるためです。本当に欲しい物ならその要求は長続きするでしょうが、そうでなければいつの間にか願わなくなります。私たちの必要を知っておられる神に、あえて祈らせるのは、私たちが自分にとって何が本当に必要で、求めなければならないものであるかを、自分自身で吟味させるためです。祈り

は信仰の修練の場であり、訓練です。そしてこの祈りの中でこそ、私たちは自分の信じ頼る神が生きて働く方であることを一層良く知り、神への信頼を深めていくのです。祈りとは、生けるまことの神に出会い、神を知る場です。こうして私たちの信仰は、祈りによって成長し、深められていくのです。

この祈りにおいて、私たちが求めなければならないことは何であるか、そのことを主は次のように語られました。「求める者に聖霊を与えてくださる。」天の父が私たちに与えてくださる「良い物」とは、他でもない「聖霊」です。この問題、あの事柄ではなく、神御自身を求めることこそ、私たちの祈りの目標であり、信仰の目標なのです。恵みそのものであったもう神を求めて与えられることこそ、私たちの究極的な祈りなのです。そして聖霊とは、この私たちと神御自身とを結びつける「絆」です。そしてこの生ける神を求めさせ、祈らせ、至らせ、神との生ける交わりへと引き入れてくださるのが、聖霊に他なりません。ですから私たちが祈り求めるべき第一は、恵みの源である神へと私たちを向かわせ結びつける、聖霊御自身なのです。この聖霊を受けることで、私たちは本当に必要なことを神に祈り求める者となり、そして必要な物をいただきます。祈りは、私たちの必要のすべてを知っておられる神に、祈ることであり、その神は必要のすべてを与えてくださる方であることを信じつつ、与えられることを確信しつつ、求めることなのです。そして神は、信じて祈る私たちに、聖霊をくださるのです。

日曜学校教師として苦闘しつつ、悩みつつ奉仕している私たちです。明日のクラスを前にして、どのようにしたら良いのかと頭を抱え込んでしまう私たちです。であればこそ、私たちに豊かに聖霊が注がれ、豊かに満たしていただくことができるように、いよいよ祈り求めていきたいと思います。なぜなら聖霊こそ、私たちの力と知恵の源なのですから。

松戸小金原教会「こひつじ日曜学校」の紹介

松戸小金原教会・日曜学校教師会

1. はじめに

松戸小金原教会は、1980年にときわ平教会と小金原キリスト伝道所が合併して設立された教会です。日曜学校もその時再編されて現在に至っていますから、今年で24年になります。(前身のときわ平時代から数えれば39年です。)現在の「こひつじ日曜学校」のネーミングは、1999年度からで、教会の成人も含んだ広義の教会学校の中の日曜学校部門につけられた名前です。教会の場所は、千葉県松戸市、東京都から江戸川を渡った隣接地で、東京のベッドタウンともいべき小金原団地の中にあります。数年前までは地域の一般の子供たちも多く来ていましたが、漸減して、今は教会員の子供たちが主流です。「親子一緒に出席する日曜学校」ということが最近の一つの眼目となっています。生徒数は少なくなりましたが、行事などの活動はますます活発で、傍目には盛んな日曜学校という印象を与えているようです。

2. 組織など

牧師：関口康

校長：弦巻俊夫(執事) 4代目

奉仕者：04年度、教師10、協力者5

クラス：幼稚科、1・2年、3・4年、5・6年、中高科(5クラス)

生徒数：名簿上は42名ですが、平均的な出席数はこの半分以下です。

時程：8：50-9：00 教師打合せ会と祈り

9：00-9：25 礼拝

9：30-10：00 分級 10：00 さよなら

カリキュラム：全体の枠組は別記のとおり

教案・教材：教会独自作成のものを用いてい

ます。

広報：月報「こひつじ」発行。教会のホームページに日曜学校のページを開設。

URLは、<http://www2u.biglobe.ne.jp/atudo>

3. 教師会

毎月1回、第4主の日が定例日です。内容は、①現況報告、②協議打合せ、③研修、④活動の諸準備など。校務および行事は、年度初めに担当を決め、事前に企画を練り、役割分担や準備を進めます。研修は、教案・教材の研究や指導事例研究などですが、なかなかまとまった時間がとれず、十分とはいえない現状です。教師になるときの最低限の心得や学びは、「新任教師のための教師心得」が作られていて、これを一通りマスターした者を、小会で日曜学校教師に任命します。日曜学校活動の要(かなめ)は教師会の働きにかかっています。

問題点をあげましょう。一昔前には、教会員の子供が高校生ぐらいになると、信仰告白をして陪餐会員になり、SSの働きに加わり、教師になるというケースが少なくありませんでした。そして大学生ともなると、SSの働きの第一線を担ったものでした。この流れが最近では途絶えて、多忙な職業人や主婦がSSの働きを担うようになり、教師会出席がままならぬ状況も生じています。教師の養成ということが一つの課題です。

教師会は、子供たちを教えるための組織であるだけでなく、この教師会というグループに属して活動すること自体が一つの学びでもあり、子供たちの各クラスに加えてもう一つ「教師科」というクラスがあるといえればよいかもしれません。これが教師一人一人の信仰の成長に大きな

益となり、教会形成に役立っています。教師会活動の評価すべき積極面と言えましょう。

4. 生徒の状況

まず、日曜学校が塾や個人指導ではなく、学校という形をとるには、でき得れば20~30人以上の生徒数を常時確保したいところです。なぜ学校の形をとるかということ、一つの組織的な共同体を作って、その中で愛の交わりや規律を学ぶことが、子供の人間形成にとってきわめて大切だと思うからです。が、ご多分に漏れず、生徒数は漸減の一途をたどっています。最近では地域の子供が少なくなり、教会員の子供たちが

主力となりました。するとどうしても家族全体の協力が不可欠になります。なぜなら教会員は必ずしも教会近辺に住んでいるわけではなく、遠方から家族ぐるみ車で来る場合が多いからです。最近では「親子が参加する日曜学校」ということをモットーにしています。

5. カリキュラム・教案・教材など

まず、教会学校の目的は、礼拝指針28条「キリスト者の成長と完成」ですが、これを日曜学校教育の分野でどのように展開するかが問題です。私たちの教会では次のようにカリキュラムの枠組を決めています。

日曜学校教育の枠組み

区分	タイトル	主眼点	内容・教案教材・教え方など
礼拝	聖書のことば(聖句) 3年サイクル	聖句を中心に、使徒信条、主の祈り、十戒を簡潔に学ぶ。	教会暦に沿って配列し、聖句を読み、簡単な例話を添える。小冊子を用いる。
幼稚科	神さまの子ども	聖書のお話を通しての生活のしつけ	適当な絵本、掛図、絵、ペーパーサート、遊戯などによる。
1・2年	聖書物語	聖書にはどういってお話が書かれているか。 「旧新約聖書の」 「内容を教える」	1年で旧新約を一巡する教案を4セット(毎年、話の内容は重複しない)用意し、4年サイクルのローテーションを組む。
3・4年	聖書物語		
5・6年	聖書のおしえ 「A→」 「←B」 2年サイクル	A聖書の概観(歴史)とB教理のあらましを教える。	2セットの教案を用意し、書込みのできる印刷物を用い、生活に即して教える。
中高科	聖書の教え (1年毎完結の教材)	聖書の一つの書を詳しく学ぶ。年度により教理・教会史等も加える。	聖書を読みテキスト、プリント等を用いて学ぶ。(生徒の実態を見て適切な教材を選ぶ)
日曜学校行事(教会暦等による)行事に適した聖書箇所を取り上げる。		進級式、イースター、ピクニック、花の日、夏季学校、振起日(なかよし会)アドベント、クリスマス、新年会など。	

◆上記の枠組みに従って、1年間(52-53週)の暦日に沿って、カリキュラムを作成し、各クラスの教案・教材、行事を配列します。

◆教案・教材は、一応、教会自作のものを用いています。この教案・教材は、一つの日曜学校の長年に亘る現場の学びの中から生まれたものですが、多くの点でまだ、こなれていない未熟さが残っていますから、柔軟に手直ししながら、現場のニーズに合わせてより使

いやすいものを模索しています。

◆教案・教材の構成は、一人の生徒が幼稚科から中高科まで、継続していくことが出来るように配列すると同時に、途中から加わる子供や、短期間でやめてしまう子供も一緒に学べるように、1年間で完結するプログラムを多数用意し、それをループ状に積み上げて学習を積み重ねるという手法を考えています。こういう考え方の是非もお聞きしたいところです。

◆教える内容は、聖書とカテキズムを等分に教えるということです。改革派教会として教理の大切さは言うまでもないことですが、幼い時に「聖書物語」を教えることは日曜学校の特質ではなかろうかと思われるのです。SS教師は改革派教理を念頭におきながら、生き生きと聖書物語を語ることが要請されています。

6. 礼拝と分級

◆礼拝：9：00-9：25 ①奏楽・黙禱 ②賛美歌Ⅰ ③主の祈りの歌 ④主の祈り ⑤聖書朗読（聖句）⑥お話（礼拝テキスト〈いわゆる豆テキスト〉による）・祈り ⑦賛美歌Ⅱ ⑧献金の歌・献金・感謝の祈り ⑨頌栄 ⑩奏楽・黙禱 ⑪報告連絡の順。（その他第1主日に誕生者祝福、3ヶ月ごとに皆精勤者表彰）

◆分級：

○幼稚科：お母さんと一緒の出席です。特定の教案・教材は無く、担当教師の裁量に委かされています。

○1-2年と3-4年：クラスは分かれますが、聖書物語4年サイクルの同一教材を用います。可愛く素直で活発で、この時期の生活体験が生徒で一番心に残るものとなるのではないかと思います。

○5-6年：2年サイクルの教案・教材を用いますが、1～4年に較べて急に難しくなって「やりにくい」と教師はこぼします。特にウ小教理に基づく教理教案は、抽象的になりやすく、子供の生活体験とどう関連させるかが頭の痛いところ です。

○中高科（Juniorクラス）：カリキュラムの枠組みは決まっていますが、過去に作成した教材も何本かはありますが、何しろ毎年の生徒の顔ぶれがSS生え抜きの子と、教会は始めてという初心者が混在するので、年によりメンバー構成に合わせて教育内容を選ぶという難しさがあります。それと、この年頃の子供は教師の老若男女や個性によって左右される

面も多いので、教師の人選と力量が最も問われるところです。

7. 行事などの活動状況

写真数葉を添えますが、教会のホームページの中に、日曜学校関係のページを作成していますから、見ていただければ概要がわかると思います。

URLは、<http://www2u.biglobe.ne.jp/atudo> です。検索ページに「松戸小金原教会」と打ち込んで開くことが出来ます。

広報活動としては、毎月「こひつじ」を発行し、今年の6月で通算No.266号になります。

また、行事ごとに案内・申込書を作り、家庭に配布します。近年までは年1回近隣小学校の門前で案内を配布していましたが、いろいろ問題もあり、やりにくくなってきました。

日曜学校管理のためには、生徒名簿、出席簿と出席カード、教材ファイルなどを毎年作成しています。

8. 記録誌など

◆教会学校10年誌（1990年）

◆教会・日曜学校20年誌（2000年）

◆松戸小金原教会・日曜学校分級教案・教材・保存版（1997年）（※残部が無くなりました）

◆松戸小金原教会・日曜学校礼拝教案（いわゆる豆テキスト）保存版（2003年）

9. 教案誌と『子どもカテキズム』の活用について

中部中会の『教会学校教案誌』は、改革派教会の教案誌として今までになく周到に編集・執筆されていますので、カリキュラム編成と教材研究の上でたいへん益になるものがあります。松戸小金原教会では、礼拝は教理的な内容を心がけて現在のテキストを用いていますが、暫定的なものであり、「何とかしなければ」と言いながら何年も繰り返しているというのが現状です。

『子どもカテキズム』による教案がそのまま使えれば申し分ないのですが、次のような幾つかの事情で、まだ参考文献の段階に留めざるをえません。

◆当教会の教案内容が、「聖書」と「カテキズム」の2本建てになっており、教案誌のように、礼拝と分級をとおしての統一教案の形になっていないこと。

◆礼拝教案を（前述したような理由で）2年以上継続の形にしないで、1年で完結するものを何本か用意して、少なくとも3年以上のサイクルにしたいこと。（その考え方の是非はともかくとして）

◆分級の「聖書物語」教案も重視したいこと。
なぜなら、聖書物語を学ぶのは小学生頃が最もふさわしい年代だと思われるからです。この点、大人になってから急ぎ入信した人は、教理は知っていても、聖書のストーリーを案外知らないで終ることもあって、貴重な宝を血肉化する機会に乏しい悔みがありますから。
◆中高科（または5・6年以上）の分級では、『子どもカテキズム』を副読本として持たせ、常々読ませるようにするのは益があると思われます。教師会の検討課題となるでしょう。
(文責：岩崎 昭)



日曜学校の礼拝



5・6年の分級



工作の時間（夏季学校）



Junior クラス



ピクニック（野田市・清水公園）

「日曜学校教師に求められること ～子どもへの牧会への視点から～」(二)

加藤常昭(神学者)

〈レジュメ〉

日曜学校における牧会

加藤常昭

はじめに

- ①主題の理解 自己変革の柔軟性と現在の実践の再確認
- ②日曜学校独自の牧会論とはあり得るのか。基本的には一般牧会論と同じである。その上で、自分たちの実践的パースペクティブにおいて独自の姿と方法を取り得るであろう。

③参考文献

加藤常昭ほか、『福音主義神学における牧会』、いのちのことば社
加藤常昭、『こどものための説教入門』、聖恵授産所
エドゥアルト・トゥルンアイゼン、加藤常昭訳、『牧会学Ⅰ』、日本キリスト教団出版局
クリスティアン・メラー、加藤常昭訳、『慰めの共同体・教会』、教文館
クリスティアン・メラー編、加藤常昭訳、『魂への配慮の歴史』、日本キリスト教団出版局
加藤常昭、『愛の手紙・説教』、教文館

1. 基本的考察

1. パースペクティブ思考

- ①シューワード・ヒルトナー『牧会者の神学序説』 Seward Hiltner, Preface Pastoral Theology, Curits Brown, 1958. 西垣二一訳、『牧会の神学』、聖文舎。加藤常昭、『福音主義教会形成の課題』、新教出版社所収、「実践神学の

パースペクティブ」その他による。

パースペクティブとは、何らかの実践をしようとするとき、まず、その実践行為の目標を見定めることから確定される見通し、展望である。時間的、空間的次元を持つ。何を目標とするいかなる行為であるかが明確でなければならない。

- ②パースペクティブは複合的構造を持つ。牧会という行為においても、宣教のパースペクティブ(説教のパースペクティブ)、こどもの教会を形成しようとするパースペクティブ、教理教育のパースペクティブも共に働いている。
- ③こうしたパースペクティブを明確にすることが、教会の実践行為のいずれの行為をも確かなものとする。ものの見方、展望、行為目標を見定めること、それによって実践行為を整えることが不可避である。一般的な神学的提言に聴きつつ、それぞれの日曜学校の独自の具体的パースペクティブが確立されるべきであろう。

2. 牧会のパースペクティブとは何か

①共同体を世話するパースペクティブ

日本の教会の独自のもの。しかし、伝統的教会において改めて見直されているもの

どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なされたのです。使徒言行録第20章28節

②告解（罪のゆるしの秘跡）、教会戒規（教会訓練、教会規律）の伝統に生きる牧会のパースペクティヴ→魂への配慮（die Seelsorge, the care of soul）のパースペクティヴ

わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。

マタイによる福音書第16章19節

そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい。はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐがれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなぐと求めらるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。

マタイによる福音書第18章14-20節

③慰めの共同体のパースペクティヴ

神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。キリストの苦しみと満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれている

からです。わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができるのです。

④弟子の共同体のパースペクティヴ

わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

マタイによる福音書第28章18-20節

⑤教会の権威に支えられた

教会のパースペクティヴ

そう言うてから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せばその罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」。

ヨハネによる福音書第20章22-23節

II. インテルメッツォ……最近の読書から

1. あるカトリック司祭の話

『魂への配慮の歴史』第12巻所収予定、パウロ・デゼラエールス「ヨハネス・ブルス」。

ブルス（1913-1988）は、ミュンスター司教区の神学校で霊性指導司祭として、1952年から1984年まで働いた。

学生たちの同伴者として過ごした30年に及ぶ働きを通じて、若者たちと経験を分かち合い、さまざまな変革、繁栄、危機、騒乱を、目覚めた思いで受け止め、それにあずかってきた。どの若い世代と接しても、時代感覚がどんどん変わることを知らざるを得なかった。そのおかげで、自分がいつもすばやく、直接に対応しなければならぬ現実を見据えるようになった。そ

こで常にしていたことは、新しいことをよく検証し、また自分になじんでいるものをも改めて検証し、それらのものが与える刺激、要求、またそれらに欠けているものをも検出した。そうすることによって、本質的な人生を生きるのに資するものを取り出し、それを説き明かすようにしたのである。従って、創世記第28章12節を引用して、どのような人間にも、天に昇るはしご〔新共同訳では「階段」と訳されている〕を用意することが大切であることと示唆したのも驚くことではない。具体的な出来事、経験をするとき、そのはしごを用意すべきだと言ったのである。そうすればどんなことが起こっても、そこで、われわれがしっかりと歩むことができることには変わりはないとしたのである。これは、理想と現実の間にある緊張関係に直面するところで、直接の結果を生んだ。明るい目をした理想主義と諦めを抱いて人生を嘲笑せざるを得なくなる思いとの間にあって、大切なことは、「しっかりと道を歩むこと」なのである。あるいはまた、どのような問題をも無視してしまうような態度と、どのような問題をも、いつも何としてでも道徳的問題として論じたる姿勢との間にあって、大切なことは、「しっかりと道を歩むこと」なのである。ヤコブのはしごのおかげで可能となるのは、全体の意味をよくわきまえながらも、いつも理想の高みにいる必要はないということである。

2. ヤコブの手紙第5章13節についての シュタイガーの黙想

- ①嘆く者と共に、われわれも連帯し、泣く者と共に泣くべきである。しかし、その嘆きを生むもとになっているものを取り除いてしまっ
てはならない。嘆く者が、自分でそれを神のみ前に語り出さなければならないのである！
一緒にいてあげるといふことは、この神に
対立する態度を排除するものではない。むしろ、それを義務とすることを教える。苦しむ

者が、あとになって、時に遅すぎる時に、自分が本当の自分の平安に達することもしないで、われわれの慰めの言葉に聞き入っていた
ただだと気付いたらどうしたらよいであろうか!? (間違った方角からの賛意を得ることなどは、私にとっては、どうでもよいことである)。それ故に嘆くことが学ばなければならない。ヨブや預言者たちという偉大なこころの持ち主たちの助けを借りて、この癒しの道を学ぶのである。それによって病む者は、自らを癒す。仲間の群れの中で、教会の日曜日の群れの中で、自らを癒す。それ故にカコパ
ティー(苦しみ)に悩む者は、日曜日の礼拝に行くべきである。それは、他の人びとと共に、自分の嘆きを歌う歌に声を合わせるため
である！心からの賛美〔告白〕は、救いをもたらすのである(ローマの信徒への手紙第10章9節以下)。

- ②ルターが、『ガラテヤの信徒への手紙大講解』において)神学、すなわち信仰は、われわれの外にわれわれを置くものである、という注を付けているのは、注目すべきことである。現実において、つまりこの時間の中にあって、私が自分の外にあるものとして保たれるのは、私の兄弟・隣人によるのである。このことが、私に最後の審判に至るまでつきまとうのである。かくして、私は、兄弟の道を正すことによって、自分の魂を死から救うのである。

III. 牧会者である日曜学校教師たちの パースペクティブをめぐって

また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう
に、収穫の主に願いなさい。」

マタイによる福音書第9章

- ①対象によって規定されるパースペクティブ

- i. 受洗した子どもたちを視野にいれたパースペクティブ
- ii. 未受洗の子どもたちを視野に入れたパースペクティブ
- iii. 教会の外に生きる子どもたちを視野に入れたパースペクティブ

- ②訪ねる牧会者のパースペクティブ
- ③開かれた教会堂のパースペクティブ
- ④対話のパースペクティブ

〈講演録・午後の部〉

午前が続いてお話を続けます。

⑤教会の権威に支えられた 牧会のパースペクティブ

まずヨハネによる福音書第20章22節、23節が伝えるみ言葉を読みます。

「そう言うってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。』」

カトリックの告解に対してプロテスタント教会は批判的でした。それで、カトリック的な告解の制度については、プロテスタント教会では用いられなくなりました。しかし、改革者ルターは、自分たちの教会の理解に従って、罪の告白とその赦しが起こる場所を備えました。一種の教会制度として、緩やかな形ですが、残したのです。そこまで既にお話をいたしました。

問題は、それが改革・長老教会においてはどうなったかということです。日本の改革・長老教会はどうしてきたかということです。この伝統はジュネーヴ教会に始まりましたが、必ずしもジュネーヴ教会が長老制度を確立していたわけではありませんでした。カルヴァンは、『キリスト教綱要』第3篇第3章、第4章、つまり、キリスト者の倫理について語ったところで、このことを詳細に論じております。はっきり教会の制度として告解を受け継ぐことには反対をい

たしました。改革派教会では、ルター派のようにカトリックの告解の制度を批判的に継承することもしませんでした。しかし、悔い改めそのものが消えるわけではありません。むしろ、それは信仰の急所に属することです。しかも具体的なことです。どのように悔い改めるのか、はっきり教えなければなりません。カルヴァンの場合には、ふたつのことが示されています。ひとつは礼拝における悔い改めの祈りです。カルヴァンは、〈礼拝順序〉をルターのように書き残してはいません。これも大切なことです。いわゆるリタジーを統一して整える必要はないと思ったのでしょうか。しかし、礼拝における「祈りの順序」という文章は書きまして、自分がおりました教会、ジュネーヴの教会、ストラスプールの教会、それぞれの事情を考慮しながら、何度か書き直しております。礼拝は、み言葉を中核とした〈教会の祈り〉であると理解しました。その中で礼拝の最初で悔い改めの祈り、そのための祈りをするを重んじております。それがひとつです。このカルヴァンの祈りは翻訳で読めます。日曜学校教師会で学習してもよいでしょう。ついでなのですが、聖霊を求める祈り、とりなしの祈り、など礼拝を造る祈りをさらに豊かに学ぶことができます。日曜学校の礼拝もまた教会の祈りによって形作られるべきでしょう。そこでまず悔い改めの祈りを、集まる子どもたちのころを悔い改へと整えつつ祈ることをしてみたらどうでしょうか。この礼拝における悔い改めを「一般的な悔い改め」と呼びます。皆でする悔い改め、という意味です。

一般的な悔い改めに対応するのは、特別な「個別的な悔い改め」です。特別な場合、つまり誰かが特に大きな過ちを犯してしまった場合、ひとりのひとが自分が犯した罪に悩んでいるとき、それを言葉で言い表し、悔い改め、慰めを受ける必要が生じます。教会はまさにそれに応える責任があります。その時には、カルヴァンは牧師を訪ねてそこでその罪の告白をするように促

しています。牧師にだけ限定すべきかは、後に問題になったことなのですが、カルヴァンは牧師のところに行くのがよいと言いました。なぜかという牧師は神の言葉に仕える者だからだと言いました。これも、しかし、重要な指摘です。牧師というよりも説教者としての務めが重んじられています。神の言葉に仕え、神の言葉を語る者として教会に生きる牧師が、真実に罪の悔い改めの言葉を受け止めることができるということです。言うまでもなく、罪の現実と向かい合い、それに勝つのも、結局は神の言葉であり、牧師の人格、霊的権威、祈りの力でもないからです。ここでも日曜学校の牧会の課題が問われます。日曜学校の校長がまず、牧師と同じ位置にあるかもしれません。しかし、説教者であるならば、あるいは分級で聖書を神の言葉として聴くことを教えている教師であるならば、子どもたちと罪をめぐる対話ができるはずで、日曜学校で罪を真剣に考えたり、子どもが罪に悩み、告白するなどということは、あまりにも現実から遠いとお考えでしょうか。もし、そうならば、日曜学校は何をもって福音として語っているかが問われます。子どももまた罪のとりことになっており、そこから解放されるべき存在なのです。

カルヴァンは『キリスト教綱要』第4篇で改めて罪の悔い改めと罪の処置について論じます。それは、個人の生活の問題としてではなく、教会の罪との戦いの課題として論じるところです。つまり、ふたつの異なったパースペクティブで、同じ問題を論じております。そこで生まれたのが戒規の制度です。これは先にお話ししました。第3篇と第4篇の叙述の間にどれほど密接な関連を見出せばよいのか、これはその後の教会の歴史においても必ずしも明確になりませんでした。戒規は長老会が主体になります。カルヴァンの教会では必ずしも長老会ではなくて牧師会というのがそこで力を持っていましたけれども、のちの長老教会では長老会が主体となって戒規

を行うということをするようになりました。戒規は、日曜学校の直接の主題にはならないかもしれません。戒規の中心にあるのは、陪餐停止ですから、陪餐資格を持たない子どもたちを相手にしているところでは、戒規を論じることはできません。しかし、戒規と訳される英語は discipline です。そのもとになっているのは disciple つまり〈弟子〉という言葉です。使徒言行録はキリスト者のことを何よりも〈弟子〉の名で呼びました。イエスはご自身を、「主であり師である」と呼ばれました（ヨハネによる福音書第13章14節）。従って、このディシプリンという英語を、「弟子の訓練」と訳すことがあります。そのような意味で教会戒規というよりも、教会訓練と読んだほうがよいとする人びともおります。私はこのようなときに、エフェソの信徒への手紙第6章4節をよく思い起します。「父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ諭されるように、育てなさい」。父親の代わりに日曜学校教師という言葉を当てはめてもよいでしょう。日曜学校もまた〈しつけ教育〉をします。ただしそれは、世間の道徳によるのではなく、主イエス・キリストが子どもたちをしつけられるとすれば、どうなさるかを問い続けるしつけです。いや、私どもの〈しつけ〉が〈主のしつけ諭し〉そのものとなるのです。このようなしつけ、主の弟子として子どもを訓練するところで、罪の認識、悔い改めも真剣な問題となるであろうと思います。

ところで、エードゥアルト・トゥルンアイゼン先生は改革派の神学者ですが、その主著『牧教会学』において、改革派教会が長い間重んじてきたこと、しかも、現代の教会が十分に受け止めていないこと、つまり、「悔い改め」と「教会戒規」のふたつの伝統的な教会の行為が切り結ぶところとして、〈牧会〉、〈魂への配慮〉を取り上げて丁寧に論じました。そこでは、魂への配慮の対話、つまり、悔い改めの対話は、教会員であるならば、誰にもできるし、誰もがしなけ

ればならないことだと主張しております。メラー先生の『慰めの共同体・教会』もまた、これを受け、教会員が皆で慰めの言葉を語る共同体の形成こそ、今日の教会の使命であるとしております。そのようにしてこそ、改革者ルターが夢見た万人祭司、すべてのキリスト者がキリストの恵みを取り次ぐ者となるということが現実となるのです。これは今日、欧米いずれにおいても原理的には受け入れられるようになってきていることです。ただ実際にはなかなかその原理が現実になりません。信徒がその方向に向かって生きようになるのには時間がかかります。その意味では、日曜学校教師こそ、この課題を受け止めて生きる信徒の模範となるべきところに置かれているのではないのでしょうか。相手が子どもであっても、真剣に取り組むべき魂への配慮に生きる者の使命です。

そこで、きちんとわきまえるべきひとつの問題点は、カルヴァンは牧師が神の言葉に仕える者、神の言葉の語り手だから、悔い改めをきちんと聴くことができるといったことです。ヨハネによる福音書の第20章のみ言葉との関連で、こう捉えることもできると思います。お甦りになられた主イエスが、甦られた日の夕刻、戸を閉ざしている弟子たちをお訪ねになって、「あなたがたに平安があるように」、「シャローム」と挨拶をなされた。その最初のイースターの夜の対話において「聖霊を受けなさい」と言って、ご自身の息を吹きかけられた。つまりキリストご自身の霊を与えられて、この聖霊を受けた者は、誰の罪でも赦すことができると約束された。この赦しはとても大きな権威のあるものであり、あなたがたが罪を赦すと天でも赦される、赦さなければ天でも赦されないと言われました。これは先に引用したマタイによる福音書16章19節の言葉で言うと天国の鍵、天の国の鍵の権威と呼ばれるものです。マタイによる福音書では、「天の国の鍵」はペトロに渡された。ヨハネの福音書においては、そこに集まっている弟子たち

すべてに与えられた。この弟子たちは使徒と呼ばれるようになりました。ペトロだけでなく、弟子たちの集団自体が赦しの権威を主イエスキリストからいただいた。使徒とは、この赦しの権威に生きたひとびとであり、だからキリストの教会の基礎を作ることができました。赦しの権威の無いところにキリスト教会は生まれませんでした。

ところで、この鍵の権威は、その後どうなったのでしょうか。カトリック教会ですと、天の国の鍵はペトロだけに与えられたことが前提になります。そしてこのペトロは後にローマの教会の主任牧師、司祭になった、そしてローマの地域の教会全体を監督する司教ともなったと伝えられる。このペトロの与えられた鍵は、その後ローマの司教だけが受け継ぐものとなった。これが教皇制度です。しかし、ヨハネによる福音書第20章では、もともとそれは使徒すべてに与えられた権威であった。そこですぐに問題になるのは、それが使徒だけに限定されたのか、ということになる。そうであれば使徒の時代にしか罪の赦しを実現しなかったということになります。そんなことはない。そこでいろいろな議論はとばしまして、たとえばニカヤ・コンスタンチノポリス信条では、私たちが信じる教会を「使徒よりの、唯一の、聖なる、公同の教会」と告白します。教会というのは、聖なるもので、公同、つまりカトリック的なものであり、ひとつであり、何よりも、使徒よりのものです。使徒以来の伝統に生きている。それは何よりも、使徒の権威を受け継ぎ、それに生きているということです。このことは大事なことです。われわれプロテスタント教会も「天の国の鍵」を持っているのです。カトリックからプロテスタントに変革した時に、天の国の鍵を捨てたわけではありません。むしろ、その間違った用い方を正しくしたのです。改革後の諸信条、諸信仰告白が、「鍵の権威」とは何かと問い、答えています。

ハイデルベルク信仰問答は問83で、天の国の

鍵についてははっきり述べています。聖餐について語り、聖餐にあずかる者は、真実の悔い改めをなし、赦しに生きるといったあとで、「信仰告白と生活において」そのような信仰に生きていない者は聖餐に近づけるかと改めて問いました。そこで、そのような者たちを悔い改めに導くために「鍵の役目」があると答えます。そこでこう記されます。

「その鍵の役目とは何ですか」。

「聖なる福音の説教と、キリスト教会としての戒規であります。このふたつにより、天国は、信ずる者らに開かれ、信ぜぬ者らには、閉ざされるのであります」。

聖餐が問題にならない日曜学校には当てはまらないことでしょうか。既に語りましたように、悔い改めを真剣にすること、主の教しの言葉を聴き続けること、それは日曜学校でも同じことです。おそらく〈主のしつけ、主の諭し〉は、何よりもそこでこそ具体化するでしょう。悔い改めも赦しも礼拝と日常生活において具体化するでしょう。そこでハイデルベルク問答が、何よりも「聖なる福音の説教」を挙げていることをここに留めたいと思います。すべての牧会のわざの基本は説教です。トゥルンアイゼンもまた、牧会の対話、魂への配慮のための対話は、説教から始まり、説教が語る福音を、ひとりひとりの生活、その罪と赦しとの関わりで語り直すことだと言いました。日曜学校でも「聖なる福音の説教」がなされるのです。

先ほどもある方とお話をしまして、その方は一ヶ月に一回礼拝で語るそうですけれども、それを奨励と呼ぶと聞きました。私は「説教なさっているのですね」と言いました。「いいえ、説教でなくて奨励だ」と言われました。これは教会の伝統に関わることですからやむを得ないかもしれませんが、その時に考えていただきたいことがあるのです。どうして信徒が礼拝で語り、長老が語るのを奨励と呼んで、牧師が語るのを説教と呼ぶのか、これは旧日本基督

教会でも広く見られた慣習です。けれどもその長老が日曜学校で話をすると説教と呼ぶのではないのでしょうか。どうして子どもに対して話をする時には説教をすることができるのに、大人に話をする時は説教と呼んではいけないのか。子どもと大人とで違いがあるのか。これはよく考えなければいけないことです。いずれも礼拝で語られる。礼拝に違いはありません。いずれも公の礼拝です。教会の公の言葉である説教が語られます。礼拝を礼拝たらしめる言葉は、誰が語ろうと説教です。私はヨーロッパで過ごしましたが、神学校で礼拝があります。その神学校の礼拝では学生が語ることがあります。必ず終わりに祝福をします。日本ではよく「祝福」というものです。これは神学生がします。日本では考えられないでしょう。多くの教会で、按手を受けた牧師がするものとしております。しかし、これを定めた教会の規則はないようです。単なる慣習ですが、なぜそのような慣習が生まれたのでしょうか。

もうなくなりましたが東ドイツの教会をよく訪ねました。東ドイツの教会は厳しい状況にありました。たくさん村があります。その村で、教会堂に集まる信徒の数は、ひとつの村で10人か15人しかいない。そこで牧師を迎えることはできません。牧師がいなければ礼拝ができないかということそんなことはないのです。その教会員の中で志のある人が牧師の代わりの務めを果たします。その人が日曜日になるとガウンを着まして、牧師が着るのよりすこし粗末ですけれども、黒いガウンを着て説教します。祝福もします。聖餐も行うのです。びっくりしました。しかしびっくりする方がおかしいと思います。ここに按手を受けた牧師がいなかったらと言って、この村ではずっと説教も聞けない、聖餐もできないと言ったら、この村の人の救いはどうなるのですか。神の言葉を聴くことができなければどうなるのですか。もちろんドイツの教会はとても丁寧なことをします。志を立てた人を

集めて研修会をします。私もその信徒の研修会に出ました。研修会と言いますが、ほとんど祈祷会のようなもので、実に信仰深いすばらしい集会でした。泊まりがけでやるのですが、私は圧倒されました。「下手な牧師の研修会よりもよほど信仰がよくわかる」と、私はほめました。けれどもそういう信徒でありましても、自分で説教の言葉を書くことは許されません。教会の本部から、今度の日曜日にはこういう説教をなさいと原稿が送られてくる。それを一字一句変えてはいけません。しかも信徒たちはどうするかというと、全部覚えるのです。私もそのような礼拝に出ましたけれど、まるで自分の説教みたいに説教する。聖餐執行も全部教会の監督の下に置かれています。いつ、どこで、聖餐をするようにと命令を受けて、そしてそれが済むと報告書を書いて、小さい教会ですと聖餐を受けた人たちの氏名も全部書く。そうでなくてもきちんと人数を書いて報告をする。決して欠いてはならないのは、神の言葉を聴くことです。聖餐を祝うことです。そうでないと教会のわがが成り立たない。もちろんその教会のわがをきちんと行うために神学の教育を受けて、つまり信仰告白や信条の言葉でいうと、神のお召しを受けて、教会の正常な手続きを経て、神の言葉に仕える者として定められた教師、教会の牧師が、神のみわがの担い手の中核になりますけれども、たまたまその牧師が欠けているときにはそれに代わる者を立てて、しかし厳格な教会の監督の下でそれをさせます。

こういうことは日本の教会がまだよく学んでいないことだと思います。私もかつては牧師でありました。今は牧師ではありません。私のことを加藤牧師という人がいると訂正します。加藤教師はよろしい。しかし教会における牧師職からは引退してしまっている、かつて牧師であった者にすぎない。やめてしまっても牧師の肩書がついてくるというのは、いわば牧師の資格試験を受けるのと、まるで自動車の免許証を得る

ための試験を受けるのと同じような扱いをすることがある。それは大きな間違いです。牧師になったらいちいち教会の承認を得なくても、どこでも結婚式ができている人もいます。それも大きな間違いです。私は結婚式の司式をする時は、必ず教会の長老会（小会）にきちんと議事として出して、長老会の承認を得ます。牧師は教会のわがをする職務を委ねられているだけです。

日曜学校の教師というのも教会の職務にあずかっています。だから私は、教会学校の教師は特に説教をやりますから、日曜学校の教師の任職というのは、きちんとした手続きを教会として整えるべきであろうと思っております。しかしそのように牧師の指導を受け、長老たちの監督を受けながら日曜学校教師として語る時には、やはり天の国の鍵の担い手のひとりです。説教をするのです。権威ある説教をするのです。牧師のように十分な意味においてはなないかもしれないけれども、その牧師の指導を受け、またその牧師の責任において、自分が支えられて説教をします。そしてまた牧会的な対話においても教会に委ねられた天の国の鍵の職務を担っている者として、子どもたちの罪と向かい合う。そうでないと、罪と戦えません。主イエスが使徒たちにお与えになったのは、まさに罪と戦う力です。主は教師たちにも、ご自身の息である霊を与えてくださっています。任職において、既にその霊をいただいています。権威というのはそういう力です。日曜学校の教師も権威を与えられているのです。ですから心の中では子どもたちに説教する時にいつもこう語りかけているのです。「私が語っているのは神の言葉です。神があなたがた語っておられる言葉です。だからあなたがたもきちんと聞かなければいけません」。しかも自分が「主であり師である」イエスに倣い、子どもたちの足を洗う僕であることもはっきり覚えておかなければいけないのです。

II. インテルメッツォ……最近の読書から

1. あるカトリック司祭の話

間奏曲に似て本論の間に聴いていただきたいことをここで語ります。私が最近読んだ書物の中にありました、皆さんに伝えたいなあと思うところの抜き書きです。『魂への配慮の歴史』第12巻にヨハネス・ブルスという20世紀に生きたカトリック司祭が紹介されております。ドイツで長く霊性指導神父という仕事をしました。神学を勉強する学生たちや、その卒業生たちのために、霊性の指導、信仰指導に当たっておりました。ブルスは青春期にヒトラーの圧制に耐え、第二次世界大戦、敗戦、戦後の繁栄、それから学生紛争も経験したひとです。しかし、一貫して若者の相手を続けてきました。そこでブルスは何をしたのか。このひとのポートレートを描いたひとは、こう言いました。「そのおかげで、自分が、いつもすばやく、直接に対応しなければならぬ現実を見据えるようになった。そこで常にしていたことは、新しいことをよく検証し、また自分になじんでいるものをも改めて検証し、それらのものが与える刺激、要求、またそれらに欠けているものを検出した。そうすることによって、本質的な人生を生きるのに資するものを取り出し、それを説き明かすようにしたのである」。これはさりげなく書いていますけれども、私はこれに心を打たれます。日本のキリスト教会も戦争中お戦後も、何とぐらうしてきたことでしょうか、いつも中途半端で、無責任で、自分だけは傷つかないようにしてきました。教会がなすべきこと、それは、神に造られた人間のいのちの本質を捕らえて、それを生き抜くことを教えることです。先の文章は、こう続くのです。「従って、創世記第28章12節を引用して、どのような人間にも、天に昇るはしご（残念ながら、新共同訳では「階段」と訳されている、と注を付けましたが）を用意することが大切であることを示唆したのも驚くことで

はない。」いい言葉です。ヤコブのはしごが誰にでも必要だと言うのです。鎌倉雪ノ下教会にもスチールでできた「ヤコブのはしご」と呼ばれる塔があり、そのはしごの中から十字架がさらに空に向かって伸びています。どの人間にも天と地をつなぐはしごが必要です。そのことを教え、そのことに気づかせ続ける。子どものための教会はまさにそのためにあります。

「具体的な出来事、経験をする時に、そのはしごを用意すべきだといったのである。そうすれば、どんなことが起こっても、そこで、われわれがしっかりと歩むことができることには変わりはないとしたのである。これは、理想と現実の間にある緊張関係に直面するところで、直接の結果を生んだ。明るい目をした理想主義とあきらめを抱いて人生を嘲笑せざるを得なくなる思いとの間にあって、大切なことは、“しっかりと道を歩むこと”なのである」。これも記憶すべき言葉です。若い人びとは明るい目で将来を見て理想に燃える。しかし、それはしばしば若いときだけのことになる。人生を経験すると、やがて、「諦めを抱いて人生を嘲笑せざるを得なくなる思いのとりこになる」。ただし、今は、多くの子どもたちが、既にどこかで、この「諦め」を知っているかもしれません。とにかくここに日曜学校の教育の目標があります。子どもたちに、小さい時から、自分の本質に属する天に通ずるはしごを、ヤコブのように生きることを教えるのです。

もうひとつ付け加えると、ブルスが教えたこと、それは、「あるいはまた、どのような問題をも無視してしまうような態度と、どのような問題をもいつも何としてでも、道徳的問題として論じたがる姿勢との間にあって、大切なことは“しっかりと道を歩むこと”なのである」とあります。現代日本の子どもたちの緊急の課題は、人間が共に生きるということはどういうことかをよく知ることです。電車に乗っても、ごく自然に障害者や高齢者に席を譲る自然な姿勢

が身に付くことです。ブルスは、しかし、それは道徳問題ではないと言います。天に通じるはしごを生きているかどうか、そこでも問われます。そこで、こんなことも言われます。「ヤコブのはしごのおかげで可能となるのは、全体の意味をよくわきまえながらも、いつも理想の高みにいる必要はないということである。」これも深い言葉です。人間についての理想を失ってはだめなのだと思死になるのではなく、理想の高みに立たず、現実生きる。ヤコブは理想に生きたのではない。天に通ずるはしごは理想などではない。私どもの信仰教育は、しばしば、高みに立つ理想主義教育に墮しているのではないかと問うべきでしょう。

2. ヤコブの手紙第5章13節についての シュタイガーの黙想

ハイデルベルグ大学の実践神学の教授であったローター・シュタイガー先生が、ヤコブの手紙第5章の13節から16節について書かれた文章を読みました。第5章13節は、こう語ります。「あなたがたの中に苦しんでいるものがあれば祈るがよい。喜んでいるものがあれば歌うがよい」という言葉があります。シュタイガー先生は言います。「嘆く者と共に、われわれも連帯し、泣く者と共に泣くべきである」。一見、ヤコブが語っていることではありません。しかし、ただ苦しい人に祈れと教えるだけではなく、苦しむと向かい合っている教師、説教者も、苦しみを共にし、喜びを共にすることがないと、祈りを教えることができないというのです。「しかし、その嘆きを生むものになっているものを取り除いてしまってはならない。嘆く者が、自分でそれを神のみ前に語り出さなければならないからである！」。ヤコブの手紙が「苦しんでいるものがあれば祈るがよい」と言うのは苦しむ者が自分で神に苦しみを訴えるようにと教えていることです。そこに教師が介入して、苦しみを取り去ることは必要のないことです。いつでも苦

しむ生徒の傍らにあり、自分の喜びや苦しみを抱えて神のみ前で祈れるようにしてあげればよいのです。

「一緒にいてあげるということは、この神に対立する態度を排除するものではない」。ヨブのように神に向かい合い、時に神と争うほどになることを信仰者らしくないとしてはならないのです。「むしろそれを義務とすることを教える。苦しむ者が後になって、時に遅すぎる時に、自分が本当に自分の平安に達することもしないで、われわれの慰めの言葉に聞き入っていただけだと気づいたらどうしたらよいであろうか」。下手な慰めの言葉を語ると、真実の意味で神と向かい合う経験をさせないままにしてしまうのです。「慰めも神から来るのだから、その人が神の前に立てるようにしなければいけない」。「嘆くことが学ばなければならない」。

ついでに言いますと、『魂への配慮の歴史』の第1巻[聖書の牧会者たち]において、バルダーマンというひとが詩編について書いています。ドイツの公立学校の宗教科教師を育てる専門大学の先生です。このひとは、こう言います。聖書を子どもに教える時に、聖書は子どもにとって難解であり、だから、教師がいつも説明してあげなければならないという考えが前提となっているが、それはおかしい。聖書は子どもが読んでもわかる。しかもそこで、聖書の教師は、「聖書について」説いているが、「聖書」説いてはいない。聖書そのものを生徒に教えてはいない。教えているのは、聖書についての知識でしかない。これは学校の話ですが、日曜学校ではどうでしょうか。聖書を一緒に読むとよい。一緒に聖書の言葉を聴くとよい。子どもは聖書をとてもよく理解する、特に詩編をむさぼるように読む。そして聖書の言葉で自分のこころを語るようになる。嘆きの詩編に重ねて自分の悲しみを語り出す。初めて神の前で涙を流すことを学ぶ。シュタイガー先生が願っていたことがそこで起こります。私は、ここに子どもの教会

の本来の姿があると思います。分級の課題が浮かび上がってきます。このために大切なのは、教師自身が聖書の言葉を祈ることを学ぶことです。ヤコブの手紙は、そこでヨブ、そして預言者たちに、それを学ぶように言います。「ヨブや預言者たちという偉大な心の持ち主たちの助けを借りて、この癒しの道を学ぶのである。それによって病む者は、自らを癒す。仲間の群の中で、教会の日曜日の群の中で、自らを癒す。それゆえにカコパティー（これはヤコブの手紙の苦しむ者というところに出てくる苦しみという意味ですが）、苦しみに悩むものは日曜日の礼拝に行くべきである。それは、他の人びとと共に、自分の嘆きを歌う歌に声を合わせるためである！心からの賛美（告白）は、救いをもたらすのである」。すばらしい言葉です。真実の嘆きを教えながら、それは礼拝においてこそ可能になると言います。苦しいから礼拝にはいかないという生徒ではなくて、悲しいから、つらいから礼拝に出るといふところを教えます。礼拝に出て一緒に祈りをしている時に自分の嘆きや苦しみが消えてしまうのでは。自分自身の嘆きが礼拝の群の中においてこそ際立ってくる。司式者が悔い改めの祈りをするとき、その祈りを共にしつつ、それぞれの悔い改めが鋭くなる。カルヴァンが求めたのはそういうことであつたと思うのです。

ところで、シュタイガーが同じ文章でこんなことを書いておられます。「ルターが（『ガラテヤの信徒への手紙大講解』において）、神学、すなわち信仰は、われわれの外にわれわれを置くものである、という注を付けているのは注目すべきことである」。これもこころを打つ文章です。自分自身を外に置く。これは改革者たちがよく語ったことです。たとえばカルヴァンの『キリスト教綱要』第3篇第20章の祈りについての叙述、これは、このように始まります。「われわれは、人間というものがどれほど、いっさいの義に欠け、またむなしいか——そのため、己が救

いのいっさいの手段を、どんなに持たないか、はっきり見抜くのである。そこで、人は窮迫のうちにあつて、支えを求めるならば、自分の外に出て、他のところにこれをとらえなければならない。祈りとは、自分の外に出ることである。肝に銘じるべき信仰の教師の言葉です。祈りは、間違えると自分の中に閉じこもることになる。だからかえって祈りができなくなる。密室に入ってじっと自分の中に入り込む。うつむいてしまう。ルターは、神学、つまり神の言葉を語ることを、それをすぐに言い換えて信仰と言いますが、それは、われわれの外にわれわれを置くことだと言います。これは日曜学校教師が、よく心に留めるべきことだと思っています。日曜学校の牧会という主題において問うべきことのひとつは、牧会者とは何かということです。牧会者としての自分がどのようにして作られるかということは大きなテーマです。その根幹にあるもの、それもまた自分の外に出ることです。それをさらにシュタイガー先生は、こう言いました。「現実において、つまりこの時間の中にあつて、私が自分の外にあるものとして保たれるのは、私の兄弟、隣人によるのである。このことが、私に最後の裁きに至るまでつきまとうのである。かくして、私は、兄弟の道を正すことによって、自分の魂を死から救うのである」。牧会、魂への配慮の課題は、兄弟の罪をたたくことです。しかも、兄弟の、生徒の魂の救いのために一所懸命になっているとき、牧会者は自分の魂を救うというのです。自分の魂を救うということになること、それは単純に考えると、自分のことにかまけてしまい、自分の中に閉じこもることになりそうですが、自分の中に閉じこもっていたら自分を救うことができない、自分の外に出ないと自分を救えません。我を忘れて兄弟の罪のためにこころを砕く。祈りが神のほうへと向かつて、自分の外に出ることであるとすると、ここでは、隣人に向かつて、自分の外に出ることになります兄弟姉妹の、自分の隣

人のためにこころを注ぐことによって自分の外に出ることになる。そのとき、自分の魂をも救う。シュタイガー先生は、そう言うのです。

神学生たちと語り合うことがありました。私は学生たちに、あなたがたが伝道者になる時にもとても大事なことは、自分の外に出ること、そうでないと牧師になれないと言いました。どういうことですかと学生たちは問いました。たとえばこうです。神学生がやはり一番気になるのは説教です。説教する時に説教者にとって邪魔になるのは、こういう説教をしたら自分は何と言われるか、自分が何と見られ、自分が何と言われるかということばかり気にすることです。説教者はとても他人の評価に敏感です。教会員に、「いいよ、ぼくの説教について何でも言いたいことを言いなさい」と言って、教会員が言いたい事を言っているとだんだん顔がこわばってきます。それだけ自由になれないのです。教会の批判を聞きながら、顔がこわばってくるのは、教会員が兄弟姉妹でなくなってくるからです。他人になる。裁き手になる。兄弟姉妹という関係で言葉を聞いていなくなるのです。説教の聴き手が他人になっている間は、本当の説教はできない。聴き手が兄弟姉妹にならないといけない。これは、自分の外に出て、自分の束縛から自由になっていないと不可能なことです。カルヴァンの言うように、祈りにおいて外に出ていないとできないことです。

私がある教会で説教をしました時、長老が司式をしてくれました。司式をする長老は説教の間、私の後ろに座っている。これは大事なことです。教会によっては、司式をしている長老が、私が説教を始めると下へ降りてこちらを向いて座る。そんなのは困ります。あなたは説教の間も礼拝を司る責任があるのだから、説教者の背後にいなければなりません。礼拝後、その長老はこう言われました。「やっとわかりました、先生の説教集を読むと、説教の終わりに祈りがありますが、その祈りは神への呼びかけをしない

ことがあります。祈りは、神への呼びかけから始まるべきなのに、それが無い、それはなぜかわかりました、説教そのものが初めから終わりまで祈りですね、先生は神の方を向いて語っている、だからそのまま祈りの言葉が続くのですね」。その通りです。説教において、既に私どもは外に出ます。神に向かって外に出るから、聴き手に対しても、囚われなく兄弟姉妹として語りかけることができるようになるのです。そのとき、自分についての思い煩い、そういうものからいっさい解き放たれて自分の外に出るのです。そのとき、もうひとつ大切なこととして念を押しておきますと、外に出るという時に、どこに立つかと言えば、それは神の言葉の中に立つのです。ルターは、私どもが語る言葉が、力を持つのは、私どもの言葉に「先立つ、外からの言葉」があるからであると言いました。この外からの神の言葉が、説教においても、牧会においても、力を持つのです。

III. 牧会者である日曜学校教師たちの

パースペクティヴをめぐって

①対象によって規定されるパースペクティヴ

特に私どもが日曜学校教師として魂への配慮、牧会に生きる時、そこにおけるパースペクティヴを、どういうものが規定するかということを考えたいと思います。まずマタイによる福音書第9章最後の言葉を聴きます。「また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、うちひしがれているのをみて、深くあわれまれました。そこで、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。』」

教会学校の教勢が落ちて嘆かれるようになって、もう十年二十年を経ています。そこでいろいろな説明がなされます。日曜日の朝、塾に行く子どもが多いとか、子どもたちの家庭が教会に関心を持たなくなったとか、そういう説明はいくらでもできます。なぜ教会に子どもが来な

いか、日曜学校不振の理由を挙げることは簡単だと思います。しかし、いくら不振の理由を挙げて、問題の解決にならなければどうしようもないと思います。他方われわれが知らなければならないのは、飼う者のない羊のように、群衆が弱り果てている姿は、日本の現実そのものだということです。子どもも疲れ果てています。親も疲れ果てています。あるいは親が疲れ果てる前に、親であることが分からなくなってしまって途方に暮れているということです。今朝も新幹線の中で新聞を読んでいてやりきれない思いをしましたけれども、生まれて間もない子どもが泣き叫ぶのでその子どもを叩いているうちに死んでしまったというニュースが載っていました。泣いている子どもをひっぱたいて子どもが泣きやむと思うということ自体が本当にどうかしています。それが決して珍しくなくなっています。そういう状況を見ながら私どもが切実に考えなければいけないのは、われわれのキリスト教会から子どもがいなくなったらどうなるか、などということではなくて、今、主イエスがどんなに嘆いておられるかということです。主のあわれみの心がどんなに激しく動いているかということです。日本の子どもたちのために、親のために、日本の魂のためにです。私どもはそのキリストのあわれみの戦いに仕えているのです、それだけです。そうしたら何としてでもやるべきことはあるはずです。刈り入れ人が少ないのです。一所懸命に神に祈れとおっしゃっています。このすぐ後の第10章に弟子たちの派遣のことばが続くように、あなたがたも働き人になりなさいという促しにほかならないと思います。ですから、教会学校不振ということは、主に対するわれわれの責任を果たしていないのだというところに立ち返るべきだと思います。

これを原点として、いくつかの論点を挙げます。対象によって規定されるパースペクティブというのがあるのではないかと、という視点から

の考察です。

- i. 受洗した子どもたちを視野に入れたパースペクティブ
- ii. 未受洗の子どもたちを視野に入れたパースペクティブ
- iii. 教会の外に生きる子どもたちを視野に入れたパースペクティブ

なぜ三番目が出てくるかという、二番目は未受洗だけれども、教会に来ている、教会堂に集まることを知っている子どもたちです。しかし同時にわれわれが視野に入れなければならないのは、教会の営みを知らない子どもたち、あるいは教会堂の前を通っても、教会の営みには知らん顔をしている子どもたちも大勢いるということです。その子どもたちをも視野に入れていえないといけないのです。われわれの教会は他の教会よりも子どもたちがたくさん集まっている、などと落ち着いてはいられません。そういう恵まれた教会であればあるほど、まだ教会に来ない子どもたちが教会の周りにいることに気づき、その子どもたちに対する責任をどうしたらよいか考えていただきたい。子どもたちを全部まとめて面倒みる見方もあると思います。しかし同時にそれぞれの対象に応じた牧会の仕方があるのではないかと。洗礼を受けた子どもたちのための集会とそうでない子どもたちのための集会、しかも土曜学校に来るようになっている子どもたちのための集会、それから来たことのない子どもたちを誘い入れるための集会、などを明確に意識して行うことができないか。たとえていうとiiiが伝道集会で、iiが求道者会で、iは信仰告白に備えての教会員としての訓練とも言える。もちろんまとめてやることはできますけれども、対象別の指導もできる。特に牧会になりますと、このことは重要です。それはひとりの子どもの魂に集中する魂への配慮の働きにおいてこそ、重要なパースペクティブの確立が求め

られているということです。

私がドイツにおりました時に、こんな授業をしたことがあります。私の先生のポーレン教授が実践神学概論という講義をなさった。割合にレベルが高い内容でした。新入生、下級生には難解でした。そこで私が担当する演習が用意されました。難解な講義をわかりやすく要点を話してあげて、学生の質問に答えるのが私の務めでした。討論にもなりました。これは私にとっては相当厳しい仕事でした。学生に語り直してあげられるほどに講義を理解していなければなりません。先生に代わって説明しなければなりません。相手のレベルにふさわしい言葉を用いなければなりません。一部は、ほとんど個別指導に近いものとなりました。それに似て日曜学校で、相手によってきめの細かい信仰指導をすることができるのではないか。それが私の問題提起です。

②訪ねる牧会者のパースペクティブ

牧会者というよりも伝道者のパースペクティブと言ってもいいと思います。伝道の側面も考えるし、牧会の側面も考えるのですが、ここで言っていることは、丁寧に考えるときりのないことかもしれませんが、事柄は簡単なことです。私は戦争中に洗礼を受けて、戦争が終わって旧制の第一高等学校というのに入りました時に、すぐ日曜学校の教師を頼まれました。17歳です。17歳というと、当時まだ旧制でしたが、旧制の中学校は5年までありました。しかし私は高校入試に受かったので4年で卒業し、高校生になったばかりです。しかも私は中学科の指導を頼まれた。生徒とはほとんど年齢的な差がなかった。その後、小学科を担当したり、幼稚科までやりました。その日曜学校でほぼ原則的に皆がやっていたのは、担任の分級が替わるとすぐに子どもたちの家庭を全部訪ねることです。クラスによっては20人近い場合もありましたけれども、それを全部、たいていは日曜日午後を訪ねまし

た。当時は、教会員でない家庭の子が多かったのです。ですから教会に関係のない親を訪ねるわけですが、しかし日曜学校に子どもをよこすくらいですから、無関心ということはないし、むしろよく話をしました。夏期学校をするようになるのと、また子どもたちの家を訪ねて、趣旨を説明し、安心して子どもを出してもらうようにしました。私が訪ねて夏期学校の説明をするのと、断る親はほとんどいない。こうして学んだのは、訪ねるということの大切さです。『魂への配慮の歴史』を読んでみますと、改革派教会の牧会の特色は、訪問にあったということ、編集者のメラー先生は何度か書いています。特に長老たちの貴務として、信徒の家の訪問というのはとても重要な使命とされました。教会の歴史は訪問の歴史と言ってよいくらいです。新約聖書を読みますと、福音書が語る主イエスと弟子たちの伝道は、常に旅の連続であり、それは町や村を訪ねて歩く伝道の旅でした。癒しを与え、慰めを与えつつ、神の国を宣べ伝える旅でした。神の国は、このような訪問によって現実化していきました。私は訪問とは何かを明確にわきまえ、実践することが日曜学校でも大切だと思います。教師たちが、訪問の意味を訪ね直し、訪問の仕方を学び直して、子どもたちとその家庭を訪ねることをぜひ、していただきたいと思っています。それはその家族にまで福音を届ける教会のわざなので、教会もまたこれを助けるべきでしょう。東ドイツがまだ存在していたとき、東の教会のいくつものが信徒の訪問グループを組織し、牧師が先頭に立って多くの家を訪ねていました。そのとき、どのような言葉遣いで尋ねるかまで学習しておりました。言い方を間違えると、宗教宣伝の罪で逮捕される危険があったからです。

③開かれた教会堂のパースペクティブ

座り込んでいないということは、三番目のことに結びついています。開かれた教会堂のパース

スペクティヴです。教会堂が閉じられていることが問題です。メラー先生の『慰めの共同体・教会』におもしろい具体的な問題が出ています。ドイツだけでなく、ヨーロッパに行くと、カトリックの教会堂はほとんど四六時中開いています。いつでも入って祈ることができます。旅行中の者も含めて歩き疲れたひとが一休みすることができます。肉体の疲れだけではありません。ひんやりとして物音のしない静けさの中に座り、教会堂の美しさに見入り、ときにはオルガンの奏楽を聴くことさえできれば、こころもまた休まります。もちろん、教会の司祭に会いたければ会うことができます。礼拝堂のどこかに、罪を悔い改める言葉を聴いてもらい、赦しの言葉を与えてもらえる告解室があります。こころの重荷を降ろすこともできます。町の雑踏のなかに静かに建ち、いつでも出入りできる教会堂の存在は多くのことを語っています。しかし、プロテスタント教会の多くは、日曜日朝の礼拝の時以外は扉を閉ざしています。ハイデルベルグの大学教会というのがあります。中世以来のすてきな教会堂ですけれども、ウィークデイは閉まっています。日曜日の午前中の礼拝に出ない限り、すばらしい教会堂内部のたたずまいを見ることはできません。メラー先生は、教会堂が閉じていることに、教会のこの世に対する姿勢が表れていると言って批判しています。日曜日の朝だけいらっしゃい。そう言って、それ以外の時には知らん顔をしている。牧師館はどこか、教会堂のどこにも書いていない。牧師がどこに住んでいるかわからない。おかしいのです。ある町の大学の先生をしておられた時に、親しい町の教会の長老会に提案したそうです。いつも礼拝堂を開けておいたらどうですか。さんざん議論したけれども結局通らなかった。長老たちは、礼拝堂の床が汚れる、どうするか、若い者たちが中に入って何をするかわからない、と言い、疑心暗鬼でどうどう扉を開けることができなかつた、残念至極という文章を

書いておられます。

鎌倉雪ノ下教会の扉は、日中はいつも開いています。信徒の方たちが、わずかな謝礼を差し上げておりますが、主事という務めについてくださり、その方たちが事務室におられ、仕事をし、来客の応対をされます。実にいろいろな人が入ってきます。教会員が絶えず出入りし、自分の奉仕の仕事をしておられます。静かに礼拝堂に入って祈りをして出ていく方もあります。また助けを求めて来る方たちもおります。図書館で受験勉強をしていた浪人中の高校卒業生が疲れると教会堂に来て牧師とおしゃべりをして帰っていったりします。教会堂の中で過ごしておりますと、教会が生きているという感じがします。本当に生き生きと町の中で呼吸しているという思いがします。

あるコンピューターの会社に勤めていた方が、心を病みまして、教会堂のすぐ近くの病院に通うようになりました。ある時から教会堂の傍らの道を通ることが好きになりました。時には、大きなガラスの窓の向こうで、テーブルを囲んで教会の方たちがみんなで食事をしているのを見る。ほんとに楽しそうに一緒に食事をしている。心病んで苦しんでいた時に、あんなふうに明るく生きる世界があるのかとふしぎに思い、どうどう心惹かれて教会堂に飛び込んできて求道を始め、洗礼を受けてしまったということがあります。私は、「にこにこしながら食べていてよかったね、仏頂面して食べていなくてよかったね」と笑ったものです。これは一つの生きた証しです。そして開かれているということは、誰でもいらっしゃいということと同時に、そこから出ていくことということでもあるのです。訪ねに出る羊飼いたちは、この扉から出て行くのです。

こういう教会堂の姿が教会学校であってもいいのではないか。これは西部中会の講演会でもお話ししました。日曜日の朝、一時間かそこら時間を決めて日曜学校をやっている、その時間

に來れないような子どもたち、自分の方から來ないような子どもたちは救ってやれないというのは日曜学校らしくないのではないか。教会堂が子どもたちにもっと広く開かれる道はないのか。土曜日にも開けたらどうか。私のこの提案を、『子どものための説教入門』のなかで発見してすぐ実行した教会があります。改革派の教会でないある別の教派の教会ですが、長老会で読んだらしい。もう二年くらいやっているようですが、一カ月に二回、土曜学校をしている。よく子どもが集まるそうです。今まで教会堂に來たこともない子どもたちが集まってくる。また、これはいわゆる福音派の教会ですが、私の問題提起の言葉を読んで、併設している幼稚園が土曜日に閉園なるので、そこを利用して土曜学校を始めたそうです。そしたら親と一緒にいて來る。幼稚園にも教会にも関係のない子どもたちも親と一緒に來るようになった。そして親たちが子育てにどんなに悩んでいるかということを知った。ここから先がさらに積極的です。牧師夫人がほぼ子育てが終わっているのに、牧師夫人の方から言い出したらしいのですけれども、親の相談相手は常人ではだめだと思い、大学に通い始めた。子どもの教育について大学で勉強し、専門家として親たちの一種の教育カウンセラーになったそうです。もうその親の中から洗礼に導かれた人が出てきていると聞きました。これも地域に即したとてもいい考え方だと思います。そのようにいろいろなことができるのです。子どもたちの犯罪のニュースを聞くにつらい思いがします。教会、日曜学校の扉が、子どもたちのころに向かって開かれていることを何とか知ってほしいし、またそれに応える日曜学校でありたいと思います。

④対話のパースペクティブ

最後に、対話のパースペクティブと書きました。これは今までお話をしてきたことですから、長く語る必要はありません。しかし、よほど考

え方を新しくしないと身に付かないことです。今は、日曜学校の生徒数が少ないので、この点ではかえって好条件かもしれません。教師会で、生徒ひとりひとりについて語り合うことができるでしょう。家を訪ね、また家に招くこともできるでしょう。教会学校に新しい子を迎えるためにも、ひとりひとりの魂と向き合うことが大切でしょう。そして、念を押しますが、子どもと正しく、真剣な対話ができるためには、そのための学び、修練が必要です。専門家の話を聴き、書物を読み、牧師の指導を受けることが必要です。

私の恩師トゥルンアイゼン先生は、対話というが、ほんとうはふたりが向かい合ってはならない。並んで座ったほうがよいとよく言われました。並んで座って神と向き合うのです。いつでも一緒に祈れる姿勢で語り合うのです。いやいつでも祈りのところが対話のころとなるのです。

予定をしまいりましたことはここまでです。ちょうどいい時間になりましたので、私の講演はここまでいたします。祈りをいたします。

主イエス・キリストの父なる御神。あなたが私どもに委ねてくださった子どもたちの魂の救いのために、私どもがどれだけひたすらな祈りをつぎ、愛を注いでいるかを深く恥じ、悔い改めます。新たな志を与えてください。あなたに召された者として、この世にある子どもたちの魂の呻きに、耳を傾け、主のあわれみを映し出す働きをするために、何をしたらよいか。互いに批判し合うのではなくて、互いに助け合って、道を開いて行くことができますように。私どもの教会の先頭に立ち、また一番深いところに立って、指導しまた仕えている牧師たちを励まし、そのみ言葉をいよいよ確かなものとしてくださるとともに、日曜学校教師に召されている者たちが、自分もまた神の言葉に仕えている者とし

ての研鑽を惜しまず、また献身の歩みを惜しまず、全うすることができますように。私どもの教会が置かれている町の子どもたちの救いのために、教会全体がなお祈りを熱くする事ができますように。日本の国を救ってください。今も親の愛の真実の手を味わう事ができないままに厳しい状況に生きている子どもたちがあるならば、あなたがこれを守ってください。どうぞ子どものために労苦する学校の教師たちを、家族

たちを、あなたのみ言葉をもって導くことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。

※本講演録は、2003年11月24日に開催された中部中会教育委員会主催日曜学校教師研修会(於名古屋教会)で行われた講演をもとに、書き改めたものです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由献金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。教案誌はすでに第15号を数え、中部中会においては三分の二を超える教会がこの『教案誌』を採用してくださっています。また、他中会、他教会においても採用してくださる教会が与えられています。皆様のご支援に心から感謝を申し上げます。

この『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています。この献金は、『教案誌』の編集・出版のための費用として用いられます。子どもたちの信仰教育のための『教案誌』の発行のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。『教案誌』を購入くださることも、発行のための支援となります。信仰の養いの益ともなりますので、ぜひ『教案誌』をご購入いただき、ご支援いただきたいと願っています。よろしく願い申し上げます。

目標金額	30万円
期 間	2004年4月～2005年3月
送 金 先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※『教案誌』自由献金である旨、振込用紙にご記入ください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

テキスト ローマの信徒への手紙1章18～23節

1. 長い暗闇を過るときも

ローマの信徒への手紙は第1章17節において、「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」と語って、神の義の光が輝いている様を明らかにしている。ところが第1章18節から第3章20節までは、光から闇へと入れられてしまう。ある神学者がこの箇所を「夜」と名づけた。第3章21節になってようやく、神の義がイエス・キリストを信じる者すべてに示されたことが語られる。私たちの人生行路を考えると、どうしてこのような暗い所を私たちが通らなければならないのかと思う。

教会に私たちは、何を求めて来ているのだろうか。明るい光の中を歩む望みをもって生きたいから来ているのではないだろうか。暗闇の深さを私たちは、それぞれの歩みの中で垣間見て生きている。そうだとすれば、この暗闇について学ぶことの意味は何であろうか。

確かに、私たちの歩みは順境の時ばかりではなくて、逆境のときもあるので、この暗闇について私たちが学ぶことは意味があると言えるかもしれない。パウロは、私たちにそのような人生の知恵を教えるためにこのことを書いたのであろうか。もう少し言えば、私たちに「神の怒り」は真実に理解できるのか。神の救いを際立たせるために、神がいったいどのようなどころから救い出してくださったかを、明らかにしているだけなのだろうか。この「神の怒り」はまだ神を信じない人々に向けられているものなのだろうか。

2. 神の義と人間の不義

17節の「神の義が啓示されています」に続いて、18節では、「神は天から怒りを現されます」と書かれています。「啓示される」と「現される」とは、同じ言葉で「覆いを取り除く」あるいは「カバーを取り外す」という意味です。つまり、福音

の中に現われてくる神の義は、天から地上に射し込んできて、今まで見えなかったものをあらわにするのである。それは見栄えのいいものだけではなくて、醜いものも姿をあらわすことになる。18節に、「人間のあらゆる不信心と不義」と言われているとおりである。そのことがここで語られている。しかも、それは夢の事柄ではなくて、私たちの現実である。

人間の不信心と不義に神の怒りはあらわにされたのである。神の怒りは私たちにくださったのではなくて、主イエス・キリストが十字架につけられ殺されることで明らかに怒りがくださったのである。主の十字架において、裁かれるべき不信心と不義が現われてくる。「不信心」とは、神を畏れる心を失うことであり、神を否定することである。

私たちは、神の怒りを招いている不信心と不義だけをここで知らされるのではなくて、言葉を換えれば、「不義によって真理の働きを妨げる」と述べている。不義とは、正義の反対の言葉である。正義は、神との正しい関係のことを意味する。神との関係がうまくいっていない状態です。神よりも自分の思いを第一とする間違いです。

3. 神の怒りからキリストによって救われ

ここで言われている「真理」とは、神が与えてくださる真理です。主イエス・キリストそのものと言っていいのです。その真理なる主イエスを私たちは邪魔になって、妨げているのです。使徒パウロは、復活の主イエスに出会うまで、神の真理を妨げることに躍起になっていた人です。神の怒りと言った時に、パウロは自分にその怒りは注がれて当然であり、滅びても当然であると思ったに違いない。しかし、神の怒りを受けたのは、わたしではなく、主イエス・キリストであったことを福音の光の中で確信しているのである。

(安田恵嗣)

カテキズム 子どもカテキズム問20

子どもカテキズム

問20 あなたも神さまの怒りを受けなければなりませんか。

答 はい。私も神さまの怒りを受けなければなりません。

証聖句 詩7:12、76:8、ローマ1:18、2:5、5:9、エフェソ2:3、黙示6:17。

参考教理問答 『ハイデルベルク』10-11、『ウ告白』6:6、『ウ大教理』27-29、『ウ小教理』19

本問は、前問同様、問18で教えられた人間一般に対する神の怒りが「私」にもあてはまるかを問う問いです。

1. 神の怒りの根拠

人間に対して天から現される神の怒り（ローマ1:18）とは、何か具体的な現象を指しているわけでは必ずしもありません。創造者なる神の御性質を知っている者が、この墮落した世界を見た時に「神の怒りが満ちている」と言わざるをえない、いわば信仰の告白です。聖であり義である神を知る者にとって、あらゆる悪と不道徳が満ちているこの世の中は、いつ天から火が降ってきても洪水がすべてを飲み尽したとしてもおかしくはない、そういう状態なのだと言うのです。

この神の怒りの根拠は、人が「神を知りながら、神としてあがめることも感謝することも」していないという事実にあります（ローマ1:21）。人間がもともと無知で何もわからないのなら仕方ありませんが、人は神のかたちに責任能力ある者として造られました。墮落してもなお、被造物や理性によって神の存在を感じる力が残されています。従って、私たちに弁解の余地はありません。

2. 神の怒りの日

創り主なるお方を見失うということは、創られた自分自身とこの世界の存在意味を見失うことに他なりません。実際、神という絶対的な基準を失った社会は、もう“何でもあり”です。自殺が

なぜいけないのか、不倫がなぜいけないのか、盗みがなぜいけないのか、絶対的な答えなどはありません。このように創造主なる神に背を向け身勝手に歩み始めた人間社会は、坂を下り落ちるように暴走し、自滅するまで墮ちていく他ありません。それが聖書の描く私たちの現実です。

悲劇的なのは、人はそのような行いが自分や家庭や社会に崩壊をもたらすと知っていながら止めることができない。自分自身をコントロールできないばかりか、いや、できないからこそ他人を戒めることもできない、という事実です。そうかと思えば全く逆に、自分が悪いと少しも思わない、いつでも自分は正しいと考える人たちもいます。この世はいつまでも今のまま、何をしても続いて行くと信じているのです。

残念ながらそうではない、と聖書は言います。そのような人々は愚かにも、神の怒りを自分のために蓄えているにすぎないからです（ローマ2:5）。神は公平な方です。神の怒りの裁きは、私たちが貯めた分だけ、多くも少なくもなく、恐ろしいほど正確に神の「怒りの日（ディエス・イラエ）」に下るのです。

3. 誰が救ってくれるのか！

この神の裁きに身をさらす自分の姿を思わずにはおれません。今にもこの身に振り下ろされんとする神の怒りの鉄槌に、凍りつく他ありません。私は何と惨めな人間なのでしょう。誰が私を救ってくれるのでしょうか！（ローマ7:24）（吉田 隆）

テキスト ローマの信徒への手紙1章18～23節
 カテキズム 子どもカテキズム問20

(単元のねらい)

罪についての学びの締めくくりとなる。キリストの十字架に神の怒りがあらわれていることを中心にして、その十字架に神の怒りと同時に神の愛があることを示したい。神の怒りにおびえることから解き放ち、そこにこそ神の愛があることを示して、神に感謝することへと導きたい。

「十字架にあらわされた神の怒り」

皆さんは、おこられたこと、叱られたことがありますか。ありますよね。お父さんに叱られ、お母さんに叱られ、学校で先生に叱られたこともあるかもしれません。わたしも、たくさん叱られました。子どもの頃、いたずらをしては叱られ、兄弟ゲンカをしては叱られました。

あるとき、叱られて押し入れに入れられたことがありました。押し入れに入れられて、そこは真っ暗です。真っ暗な中で、わたしは泣きました。いったいどうして叱られるのか、いったいなぜ叱られなければならないのか。そう思って泣いたのです。ところが、だんだん涙が出なくなり、気持ちも落ち着いてきますと、今度は、やっぱり自分が悪かったと、自分がいけないことをしたと、そう思えてくるのです。真っ暗な中で、自分が悪いことをしたから、ここに入れられているのだと、そのことが分かってくる。そんな経験をしたことがあります。

叱られるということ。それは、何かいけないこと、悪いことをしたからです。ぼくたち、わたしたちが何か悪いことをしたときには、お父さんやお母さんは、それを叱ります。叱って罰を与えるのです。そして、大切なことは、そのように叱られてこそ、おこられてこそ、わたしたちは、自分が何をしたのか、よいことをしたのか、悪いことをしたのか、そのことが分かるのです。わたしたちは、何がよいことで、何が悪いことなのか、十分に分かっているわけではありません。叱られてはじめて、自分が何と悪いことをしてしまった

のかと気付かせられる。また、その罰の大きさによってこそ、自分のしたことの大きさを知ることができる。叱られること、またその罰には、そのような大切な役割があります。

今日のカテキズムにはこうあります。「あなたも神さまの怒りを受けなければなりませんか」。「はい、私も神さまの怒りを受けなければなりません」。これは、前回の問19の続きです。問19はこうでした。「あなたは罪人ですか」。「はい、私も神さまの御前に罪人です」。わたしたちは、神さまの御前に罪を犯したのであり、神さまの怒りを受けなければならない。神さまの怒りから逃れることはできないと、そう教えています。今日の聖書の御言葉にも、「神は天から怒りを現されます」とありました。

そうです。神さまが、私たちに対しておいかりになり、わたしたちを叱っておられるのです。しかし、皆さんは、自分が神さまに叱られなければならない、神さまからおこられて、罰を受けなければならないということ。そのことを、本当だ、そのとおりだと思えますか。なかなか分からないでしょう。神さまに対して罪を犯しているということは、なかなか分からない。なかなか分からないことであるからこそ、神さまは、目に見えるかたちで、わたしたちに御自身のおいかりをお示しく下さいました。

それは、主イエスさまです。主イエスさまを見

れば、神さまがどれほどおいきりになっておられるのか、そのことが分かるのです。主イエスさまは、十字架にかけられて、死んでくださいました。十字架にかけられるというのは、神さまに見捨てられて、神さまの祝福をすべて失って死ぬということでした。それは、たいへんおそろしいことなのです。天地を造り、いのちを与えてすべてのものを養う、その創造主なるお方の祝福を失うのです。そこには、光も希望もありません。主イエスさまの十字架は、神さまの祝福を失ったこと、神さまのおいきりのあらわれなのです。

この主イエスさまの十字架は、私たちの身代わりであったと、そう聖書は言っています。本当は、わたしたち一人一人が受けなければならない神のおいきりです。それを私たちに代わって主イエスさまが引き受けてくださったのです。わたしたちの罪のすべてを背負って、主イエスさまはわたしたちの代わりに死んでくださいました。ですから、主イエスさまを見ると、わたしたちに対する神さまのおいきりがどれほどであったのか、そのことが分かります。御自身の愛しておられる主イエスさまを死の力に引き渡し、御自身の祝福をすべて奪い取らなければならない、それほど大きなおいきりが、十字架にあらわれています。

そして、この十字架にあらわされた神さまのおいきりを知ると、この世界の有り様を神さまが嘆いておられること、おいきりになっておられることが分かります。

神さまは、わたしたちを、神さまを礼拝して、神さまを信じて生きる者として造ってくださったのです。ところが、わたしたちの周りに、神さまを信じて、神さまを礼拝している人がどれほどいるのでしょうか。学校のお友だちの間でも、神さまを信じて教会に行っている人が、果たしてどれほどなのでしょう。たいへん少ないではありませんか。そして、神さまなど知らない、神さまなど必要ないと考える。神さまのことなどまったく

考えもしないで生きている。それが、当たり前になっています。自分たちが楽しく生きることに一生懸命であり、信じること、愛すること、希望を持つこと、それら本当に大切にすべきことは、見失われています。神さまのことはもちろん、人のこともあまり考えずに、自分のよいように生きていく、その意味で個性を重んじることがよいとされるほどなのです。

このようなわたしたち人間の姿に、神さまは悲しんでおられます。神さまのおいきりは、神さまの悲しみでもあります。そうです。神さまは、私たちに對しておいきりになるだけではありません。悲しんでおられます。この世界は、神さまのおいきりにあたいするのですから、神さまがさばいて滅ぼしなされて、それでよいのかもしれませんが。滅ぼしてしまったほうがすっきりするかもしれませんが。しかし、滅ぼすのではなく、神さまは悲しんでおられる。それは、わたしたちを愛するからです。神さまのおいきりは、愛のないおいきりではありません。わたしたちを愛して、おいきりになっておられる。そして、そのおいきりは、神の御子イエス・キリストがすべて引き受けてくださったのです。

神さまがおいきりになる。それは、わたしたちを愛するからこそです。主イエス・キリストがそのおいきりを引き受けてくださり、いまや、わたしたちから、神のおいきりは取り除かれました。わたしたちに残されたのは、神さまの愛のみです。しかし、わたしたちは、神のおいきりをしっかり知らなければなりません。わたしたちを愛するからこそのおいきりなのです。そして、そこにあふれんばかりに示されている、神さまの愛を知りたいのです。この神のおいきりと愛を知るときこそ、わたしたちは神さまに感謝する者へと変えられます。滅ぶべきわたしたちをも愛してくださる神さまです。この神さまに愛と感謝をあらわして生きていきたいと願うのです。 (望月 信)

[今日の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙5章9節

それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、
キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

〈主題〉

ほんとうの神さまの愛。

〈ねらい〉

神さまの怒りを引き受けられたイエスさまの苦しみを伝える。

〈展開例〉

みなさんは、お父さんやお母さんに叱られたとき、「それはちがう」と思ったことはありませんか。そういうときは、とてもつらいですね。叱られているわけがわからず、また、それがこころの中では「ちがう」と思っているのに、ことばに出してわかってもらうことができないほどつらいことはないですね。わたしたちのこころをいちばん知っておられるのは、ほんとうの神さまです。神さまだけが、人にわかってもらえない、わたしたちのかなしい気持ちや、ことばに出していえない気持ちを

をよくごぞんじです。

神さまの怒りは、わたしたちにとって正当なものです。決して間違えたり、何倍にもふくらませることがありません。そしてその怒りはだれも受けとめられないほど、重いものです。それをただ、イエスさまが十字架上で受けとめてくださいました。ここに神さまの愛があります。神さまの怒りを受けとめられた、イエスさまの愛を知って、人のつみをゆるす人になりましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。神さまのお怒りになっていることに心をとめることができますように。イエスさまの十字架の上にそそがれた、わたしたちへの愛と神さまのただしさをすこしずつ教えてください。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～タコ足をとろう～

- ①適当な長さに切った紙テープを八本、用意する。
- ②腰の周りに八本の紙テープを取り付ける。ベルトなどに挟み込む。
- ③二人が向かい合い、お互いに手を伸ばして、紙テープを取り合って遊ぶ。
- ④最後まで紙テープが残っていた人が勝ち。

〈ねらい〉

わたしたちが神の怒りを受けるべき罪人であることを覚える。またその私たちを救ってくださる神様の恵みの大きさを覚える。

〈分級教師へのアドバイス〉

前回9月26日分のアドバイスにも記しましたが、罪についての教えは子どもに対してであっても繰返ししっかり教え、自覚に導くべき事柄です。完全な理解ができるから教えるのではなく、繰返し教えることで理解に導くのです。ただし、罪の深さの教えは、同時に必ず十字架の救いを指し示すものでなければなりません。

〈展開例〉

①今日のお話で、先生が子どもの頃にお父さんから怒られた話をしましたね。聞いてた？

②みんなもお父さんやお母さんに怒られたことがありますか？

(回答例)

- ・ある
- ・ない

③先生も昔はお父さんやお母さんに怒られたことがありますよ。でも、なんで怒られるのかな？

- ・理由がない
- ・何となく
- ・けんかをするから
- ・悪いことをするから

④みんな悪いことするからお父さんや学校の先生に怒られるんですね。どんな悪いことをした

ら怒られる？

- ・兄弟げんか
- ・いたずら
- ・物を壊した
- ・黙ってつまみ食いした

⑤あれあれ、それは本当にいけないですね。

⑥でも、みんなが悪いことをすると、お父さんや先生たちに叱られるだけでなく、本当は神様に叱られてしまうんですよ。

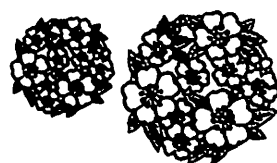
⑦神様は悪いことがお嫌いだから、みんなが悪いことすると悲しいんです。でも神様はそれをずっとずっと我慢してくださるんですよ。

⑧それだけではなくて、イエス様が十字架についてくださったのは、わたしたちの代わりにイエス様が叱られてくださったんですよ。

⑨イエス様が代わりに叱られてくださったから、わたしたちもきちんと神様に謝って、もう悪いことをしなくなるようにお願いしたいといけませんね。

〈祈り〉

天のお父様、わたしたちが、悪いことをして叱られなければならないのに、イエス様がわたしたちの代わりに十字架についてくださったことを感謝します。どうか、これからはわたしたちが悪いことをしなくなるように、神様が助けてください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。



〈暗証聖句〉 ローマ5章9節

それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

〈ねらい〉

私たちの罪がいかに大きいか、神の怒りがいかに大きいか、さらに神の愛がいかに大きいかをキリストの十字架によって知る。

〈展開例〉

イエス様は弟子に裏切られました。ペトロは「イエス様と一緒に、牢屋に入っても、死んでも良いと思っています」と言っていたのに、イエス様のことを「知らない」と三度も言っていました。そのほかの弟子は逃げてしまいました。イエス様は裁判にかけられるようなことは何もなくさらなかったのに裁判にかけられ、骨が見えるほどむち打たれ、十字架刑というみじめで残酷で苦しい死刑に処せられたのです。それだけではなく、父なる神様に見捨てられたのです。

私たちは友達に嘘をつかれたりすると涙が出ます。指を少し切っただけでも痛くてたまりません。

お父さんに叱られて、「出て行け！」と怒鳴られたら悲しくて泣いてしまいます。イエス様は、私たちの代わりに、父なる神様の怒りを一人で受けてくださったのです。十字架の中に、神さまの思いがあらわれていて、そこにこそ神さまの愛もゆたかに示されているのです。

〈祈りましょう〉

神さまの怒りを考えると、わたしはおそれます。でもイエスさまが十字架の苦しみを受けて、神さまの怒りをすべてとり除いてくださいました。イエスさま、かんしゃします。アーメン。

〈答えてみよう〉

① どうして神は、私たちに対して怒りを持たれたのでしょうか？

ローマ1:18 を開いてみましょう。

人間の〇〇〇と〇〇

② 神御自身の怒りを誰に下されましたか？

〇〇〇・〇〇〇〇

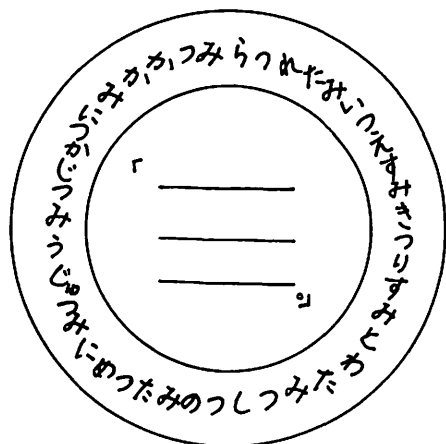
③ あなたは、どんな罪をおかしましたか？

今までおかした罪を書いてみよう。

〈やってみよう〉

～㊦ ㊷を消してね～

どんな文がでてくるかなあ？



答え

「わたしのためにじゅうじにかかられたいえすきりすと」

〈聖書をさらに深く〉

1. 神さまをあがめることのない人類に対する神の怒りを、私たちは聖書全体から知ることができます。神の怒りについて知っている聖書の箇所があるでしょうか。アダム、カイン、ノアの時代の人々……。旧約聖書の初めから、人類の罪と神さまの怒りが現れています。
2. 人類の罪について語るパウロですが、彼は自分の罪もよく知っていました。使徒9章、ガラテヤ1章などから、パウロ自身の罪（教会に対する迫害）について確認してみましょう。そして、私たち自身の罪についても考えてみましょう。特に、「神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず」ということがないか、話し合ってみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 神さまは正しいお方であり、罪に対しては怒りをもって裁きを行うお方です。しかし、心のどこかで、本当に裁きなどあるのだろうかと思っていないでしょうか。世の中には悪いことをしながら幸せに生きている人もいるのではないのでしょうか。神の正義、神の怒りについて実感があるか、率直に話し合ってみましょう。
2. 神の怒りを知るための鍵は、世の終わりにおける裁きと、キリストの十字架です。今は見過ごされているように思える悪事も、終わりのときにはすべて裁かれます。そして、十字架は、その終わりにおける裁きの先取りであり、私たち自身がもたらされるべきものでした。十字架においてこそ、神の怒りの大きさを知ります。映画などで、十字架の悲惨さをリアルに感じたことはないでしょうか。心を十字架の悲惨と神の怒りへと向けましょう。そのことが、同時に救いへとつながっていくのです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

4日（月曜日）

コリントの信徒への手紙一11章2～16節

Q. すべての男の頭は？

5日（火曜日）

コリントの信徒への手紙一11章17～26節

Q. パンを食べ、杯を飲むとき、何を告げ知らせている？

6日（水曜日）

コリントの信徒への手紙一11章27～34節

Q. ふさわしくないままで主のパンを食べ、杯を飲むと、何をすることになる？

7日（木曜日）

コリントの信徒への手紙一12章1～11節

Q. 「イエスは主である」とは、何によらなければ言えない？

8日（金曜日）

コリントの信徒への手紙一12章12～31節

Q. あなたがた教会はキリストの何？

9日（土曜日）

コリントの信徒への手紙一13章1～13節

Q. いつまでも残る三つのものとは？ またその中で最も大いなるものとは？

○心に残った言葉を書き出してみよう。



テキスト ヨハネによる福音書7章53節～8章11節

1. テキストの取り扱いについて

ヨハネによる福音書第7章53節から第8章11節の箇所は、大部分の異本には欠いているということで括弧にくくられている。古い写本ほど、この記事が記載されていない。だから、後の教会が付け加えたものといわれる。しかし、主イエスの言葉であることについては疑義がない。それでは、なぜ福音書に初めから記録されていなかったのであろうか。

教会は歴史の初めから信徒訓練をする中で、教会から破門される「赦されない罪」を定めて、その中に姦淫を含めていた。姦淫は、主イエスが厳格に教えられた結婚の秩序を乱すものと考えられたからである。その意味で、赦されない罪の一つと考えられた姦淫が、主イエスによって裁かれないというこの記録は教会にとってはとまどいを生んだ。それでは、この御言葉は何を意味しているのだろうか。

2. 姦淫の罪をどう考えるか

仮庵祭の終わりの日に主イエスは、「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」(37節)と大声で招かれたが、その招きに応じる者はだれもいなかった。むしろ、主イエスに対する反感が増幅されていった。そのような事柄を受けて、「律法学者たちやファリサイ派の人々が姦淫の現場で捕らえた女を連れて真ん中に立たせ」(3節)、イエスを裁こうとしたのである。

申命記第22章22節に、姦淫の罪を犯した女は、石で打ち殺せとモーセが律法の中で命じている規定が記されている。その規定があるが、イエスよ、あなたはどうするのか、というのである。主イエスが規定に同意するならば、これまでの主の説教は何であったのかということになり、赦すと言えば、神の掟に背くことになる。そのように主を律法学者とファリサイ派の人は裁こうとした。それ

に対して主イエスはどのように答えられたのか。

3. 罪を赦す主イエス

6節に「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた」とあり、8節には「そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた」とある。主イエスは何も答えられなかった。主イエスの沈黙の姿に律法学者たちの罪の姿があらわになる。人を裁くことにおいて明らかになる自らの罪の正体。何を主が書いておられたのか、それははっきりとしない。神の言葉を思い起こしておられたのかも知れない。この箇所の前に、主は「生きた水」について語られた。渴いている者は、主イエスのところに来て、〈生きたいのちの水〉を飲むように招かれ、飲んだ者はいのちの水がその人の内だけにとどまることなく、その人から溢れ出るようになることを約束してくださった。人々が主を裁くことは、そのいのちの主を捨てることである。

何も答えない主イエス。その姿から律法学者たちは自分たちの言葉に詰まるイエスに勝利した思いを抱いたことであろう。しかし、「イエスは身を起こして」、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」と言われた。そして、年長者から一人また一人と立ち去っていくと、女と主イエスだけが残った。すると「イエスは、身を起こして」、「だれもあなたを罪に定めなかったのか」と言われた。

カルヴァンは、主の「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」という言葉について次のように言っている。「これによって私たちは、イエス・キリストの恵みの目的は何か、結論することができる。すなわち、罪人が神と和解させられ、その救いを授けた者に崇敬の思いをささげて、正しく清く生きながら、彼に仕えるようになるためである」。赦しがへりくだりを生むのである。(安田恵嗣)

子どもカテキズム

問20²¹ 神さまは、あなたもほかの人も、
罪人を滅びるままにお見捨てになりましたか。

答 いいえ、ちがいます。
神さまは、神の民となるように
最初から私たちを選んでくださいました。
罪から救い出してくださるあがない主を
与えてくださったのです。

証契聖句 エレミヤ18:4-5、ヨハネ1:4-5、エフェソ1:4、ペトロ1:18-19
参考教理問答 『ハイデルベルク』54、『ウ告白』7:3、『ウ大教理』30、『ウ小教理』20

1. ただ捨てられるだけ？

罪と悲惨の状態で落ちた人間は、自力でそこから這い上がることはできません。脱出する道があるとすれば、それはただ上からのみ与えられるものです。しかし、創造された状態から自らの意志で落ちた人間を救う義務など、神にはありませんでした。役に立たなくなったものは、ただ捨てられるだけです（エレミヤ18:4-5）。

2. 驚くばかりの恵み

ところが聖書は、ここに全く思いもよらぬ神の御計画を告げるのです（エフェソ1:4）。

天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、
御自分の前で聖なる者、
汚れのない者にしようと、
キリストにおいてお選びになりました。

天地創造の前に！何ということでしょう。もう天地を造られるよりも遥かに前に、神は私たちを愛しておられた。罪と悲惨に落ちることを御承知で愛してくださっていたというのです。何という驚き、何という恵みでしょう！

神様は、ずっとこのことを隠しておられました。それはただ、神の御心のうちに秘められていた、神の一方面的憐れみによる御計画です。それで主は、私たちが墮落しても、お見捨てにならなかつ

たのですね。

この滅びからの救いは、ですから、私たち罪人が再び墮落前の状態に戻ることはありません。そうではなく、ちょうど暗雲立ち込める天からのひと筋の光が地上を照らすように、深い闇に閉ざされたこの世界に神の救いの場所ができたのです。罪と悲惨の状態にありつつ、救いの光の中に逃げ込めるようにしてくださったのです。

3. あがない主

しかし、罪に対する神の刑罰はどうなったのでしょうか。神の怒りはどこへ行ってしまったのでしょうか。きれいさっぱり忘れようなどと、そんな旨い話があっというものでしょうか。

神は正しいお方です。この神の一方面的救いは、人間との妥協の産物でも無節操な救いの安売りでもなく、ただ私たちの罪と悲惨を肩代わりしてくださる「あがない主」が現れたために可能となった道なのでした。

「あがなう」とは、牢獄に閉じ込められている者を解放するためにお金を払うことです。しかし、この「あがない主」はそのことをお金ではなく、御自分の命をもって成し遂げられたのです（ペトロ1:18-19）。

（吉田 隆）

テキスト ヨハネによる福音書7章53節～8章11節

カテキズム 子どもカテキズム問21

〔単元のねらい〕

罪ゆえに救いにおいて無力となっている私たちのために、神が仲保者キリストを遣わして下さった恵みを覚えたい。

「わたしもあなたを罪に定めない」

ある日の朝、エルサレムの神殿におられたイエスさまのところに、いくにんかの人々がやってきました。この人たちはひとりの女の人を連れてきていました。その女の方は、石打ちの死刑にあたいするような重い罪をおかしていた人でした。

この人たちは、引いてきた女の人を立てて、イエスさまに尋ねました—神さまのおきてでは、こういう重い罪をおかした人は石で打って死刑にせよと定められています。イエスさま、あなたはどうかお考えになりますか。

確かに、女の方の罪は重かったです。けれども、この人をイエスさまのもとに連れてきた人々は、おおきな間違いをおかしていました。それは、この人は罪人だけれども、自分たちは罪のない、正しい者だと思いこんでいたということです。

ひとつのことを覚えなければなりません。それは、この人たち—ファリサイ人や律法学者といった人々ですが—のほんとうのねらいは、イエスさまにあったということです。この人たちは、ふだんからイエスさまの正しさをねたんでいました。そして、いつかイエスさまを殺してしまおうと機会をねらっていました。このときも、この人たちはイエスさまをわなにかけようとしたのです。この女の方はそのための道具でしかなくて、この人の命のことはほんとうはいつでもよかったのです。

ファリサイ人や律法学者たちに、この女をどうしたらよいと思われませんか、と聞かれて、イエスさまはしばらくの間、ただ黙っておられました。そして、とてもふしぎなふるまいをなさいました。

その場にかがみこんで、指で地面に何か書き続けておられたのです。いったい何を書いておられたのかと気になりますね。けれども、そのことはそれほど大事なことではないと思います。それよりも、イエスさまの心の中はこのときにどうであったかを考えてみてください。ファリサイ人や律法学者たちは、ひそかにイエスさまを殺そうとしています。これ以上に重い罪はありません。けれどもこの人たちは、その自分たちの罪に気づかないのです。ほかの人の罪は責めているけれども、自分の罪には気づかず、自分は正しい人間だと信じていたのです。この心の間の深さをイエスさまは見抜いておられて、黙ったまま嘆き悲しんでおられたのではないのでしょうか。

イエスさまが黙っておられるので、彼らはなおもイエスさまに問い続けます。するとイエスさまは身を起こして、ただひとことこうおっしゃいました—あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。

すると、不思議なことがおこりました。あれほどしつこく、連れてきた女の方の罪を責めていた人達が、年長の人から始めてひとりまたひとりと、その場を立ち去っていったのです。イエスさまのこのひとことが、彼らの心を深く深く刺したのです。そしてとうとう、その場にはあの女の人と、イエスさまだけが残ったのです。

イエスさまは女の方に、あの人たちはどこに行ってしまったのか、だれもあなたに石を投げようとはしなかったのかとお問いになりました。女の方が、だれもありませんでしたと答えると、イ

イエスは、おおせになりました—わたしもあなたを罪に定めぬ。安心して行きなさい。これからはもう罪をおかしてはならない。

こうして、女の人はイエスさまによって罪をゆるしていただきました。けれども、よく覚えてください。それは、この女の人の罪がどこかに消えてしまったということではないのです。あいまいに、うやむやにされてしまったということではないのです。ほんとうはこの人は自分のおかした重い罪を、死刑にされることによって償わなければならなかったのです。神さまのおきてのとおり、石で打たれなければならなかったのです。でも、この人は石うちにされずにすみしました。なぜだと思いますか。

それは、この人の罪をイエスさまがかわりに背負ってくださったからです。福音書はこの後に、イエスさまが十字架にかかって死なれたことを記します。イエスさまはこの女の人の罪のためにも、そして私たちの罪のためにも、身代わりに十字架

に死なれたのです。ご自分の命とひきかえにして、この人と私たちの命を救ってくださったのです。

私たちはみな神さまの前に罪人です。私たちは自分の力では、この罪をどうすることもできません。

しかし、罪のない、正しいお方であるイエスさまが、十字架に死んでくださいました。ただここにだけ、私たちの罪がほんとうにゆるされる道があります。そして、十字架のイエスさまが私たちとともに歩いてくださるからこそ、私たちは平安のうちに生きていくことができるのです。

自分の罪がわかるということと、その罪をゆるしてくださるお方のもとにとどまるということの間には、天と地ほどのちがひがあります。ファリサイ人や律法学者たちは、イエスさまのもとを立ち去ってしまいました。けれども、この重い罪をおかした女の人は、イエスさまのもとにとどまりました。それゆえに罪のゆるしの恵みにあずかることができました。イエスさまのもとにとどまる人はさいわいです。 (木下裕也)

[今日の暗唱聖句]

イザヤ書 1 章 18 節

論じ合おうではないか、と主は言われる。

たとえ、お前たちの罪が緋のようでも

雪のように白くなることできる。

たとえ、紅のようであっても

羊の毛のようになることできる。

〈主題〉

イエスさまのあがない。

〈ねらい〉

イエスさまの「あがない」によって救われることの喜びを伝える。

〈展開例〉

みなさん、「あがない」という言葉を聞いたことがありますか。この「あがない」とは、失ったものを代価を払って買い戻すことです。わたしたちは罪のために、神さまとの交わりを失った者ですが、イエスさまはその十字架にいのちをなげうってくださって、わたしたちを買い戻してくださいました。

今、イエス・キリストは、何も知らないわたしたちに、いつも「みことば」を教えてください。ことによって、神さまのみこころを知ることができ

るように働いておられます。また、神さまといつも交わりが持てるように、いつも、わたしたちのためにご自身をささげてとりなしてくださいています。また、みことばと聖霊によって、いつもわたしたちが救いの中を歩んでいけるように、わたしたちのこころと思いを守ってくださいています。ですから、わたしたちは、いつも、神さまのみこころを教えられて、神さまとの交わりの中を、よろこんであゆんでいけますね。イエスさまのあがないのはたらきを覚えましょう。

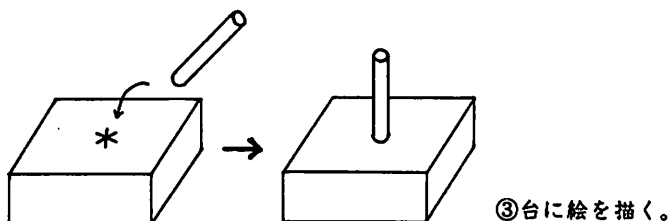
〈お祈り〉

天の父なる神さま。イエスさまが、今も、生きてあがないのお働きをしてくださっていることをかんしゃします。みことばを学び、祈りつつ、神さまとの交わりの中に生かされますように。とうといイエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

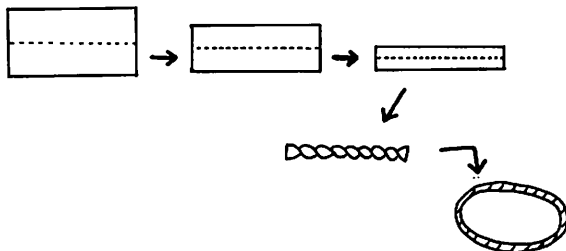
〈やってみよう〉

～輪投げで遊ぼう～

- ①空箱をカレンダーの裏紙などで包む。
- ②カッターで切り込みを入れて、ラップの芯などの棒状のものを差し込む。
芯の先にボンドをぬっておいて、固定する。



- ④新聞紙やチラシを三回折って、端からねじって、輪にする。



- ⑤輪投げをして遊ぼう。距離を工夫してみるとよい。

〈ねらい〉

神様の罪の赦しが、限り無い恵みであることを覚える。

〈分級教師へのアドバイス〉

赦しの大きさを自覚するためには、罪の重さを自覚しなくてはなりません。罪の重さを指摘するためには、具体的な状況を例示することが近道かもしれません。ただし、それが他人や特定の人を攻撃する結果にならないように注意しましょう。

〈展開例〉

①イエス様の前に連れてこられたのは、悪い女の人でしたね。この人はイエス様の時代だったら、死刑になってもしかたがないような悪い女の人でした。みんなは、こんな悪い悪い人がいたらどうする？

(回答例)

- ・死刑にする
- ・かわいそう

②イエス様は神様だから、悪いことはお嫌いでした。神様がしてはいけないとおっしゃった決まりを破って悪いことをするのは本当にいけない

ことですよ。

③でもイエス様はその女の人に「わたしもあなたを罪に定めない」とおっしゃって、死刑にしないで赦してあげたんですよ。イエス様は優しいですね。

④みんなも色々とお父さんや先生やイエス様に叱られるような悪いことをしたことあるでしょ？

⑤イエス様はそんなわたしたちのことも、罰しないで赦してください。

⑥でも気を付けてください。イエス様は、この女の人を赦してあげた時もこうおっしゃってます。「これからは、もう罪を犯してはならない」。イエス様は、本当に罪はお嫌いなんです。

〈祈り〉

イエス様、わたしたちの罪を罰しないで赦してください。わたしたちが、イエス様に叱られることのないように、罪を犯さない力をください。主イエス様の御名によってお祈りします。



〈暗証聖句〉 イザヤ1章18節

論じ合おうではないか、と主は言われる。たとえ、お前たちの罪が緋のようでも雪のように白くなることができる。たとえ、紅のようであっても羊の毛のようになることができる。

〈ねらい〉

人は自分で自分をすくうことはできない。罪のほろびから救い出せるのは、イエスさまだけである。

〈展開例〉

なぜイエス様が私たちの代わりに十字架にかけられたのでしょうか……。それは、罪深い私たちを、神様は愛してくださっているからです。神様の民となるように、最初から私たちを選んでくださり、罪から救い出してくださるために、イエス様が身代わりになってくださったので、神様は「わかった、いいよ」と、罪を犯した女の人にも、私たちにも言ってくださっているのです。それで、私たちは、「神様、ありがとうございます。」と言うこ

とが出来るのです。神様を愛し、人を愛することが出来るのです。神様に心から感謝しましょう。

〈折りましょう〉

罪をゆるしてくださるイエスさま。わたしの罪のためにイエスさまが身代りになってくださったことを、心から信じたいのです。わたしを罪からすくい出してください。アーメン。

〈答えてみよう〉

- ①イエスのところに連れてこられた女の人とはどんな人でしたか？
○〇い〇をおかした人
- ②女の人を連れてきた人々はだれ？
○〇〇〇〇人や○〇〇〇〇〇〇〇
- ③②の人たちの間違いは？
自分たちは○〇のない○〇しい者だと思いこんでいた。
- ④自分の罪がわかることと、その罪をゆるしてくださるお方のもとにどどまることのちがいを考えてみましょう。

〈やってみよう〉

～ひつじがたくさんがくれています。何ひきいるかな？～

ルール

- たて（うえから・したから）
- よこ（みぎから・ひだりから）
- ななめ（うえから・したから）
- ぜんぶOKだよ。

ヒ	ツ	ジ	ツ	ヒ	ジ
ツ	ジ	ヒ	ジ	ツ	ヒ
ジ	ツ	ツ	ツ	ジ	ツ
ジ	ヒ	シ	ジ	ヒ	ジ
ツ	ジ	ヒ	ツ	ツ	ツ
ヒ	ツ	ジ	ヒ	ツ	ヒ

〈聖書をさらに深く〉

1. 神さまの裁きと愛とは矛盾することでしょうか。律法学者は、「訴える口実」を得るために質問したとあります。イエスさまが裁きか愛のどちらかを選ぶと思ったからです。裁きを選べば民衆は落胆し、愛を選べば律法を無視することになるのです。しかしイエスさまは、誰もが罪人であることを示して罪の現実をあらわにされ、同時に、その罪は赦されることを告げられました。このようなイエスさまの言葉を聞いた人々の心について考えてみましょう。なぜ律法学者は「年長者から」去っていったのでしょうか。「もう罪を犯してはならない」との言葉を、女性はどのように受け止めたのでしょうか。

〈教理を響かせるために〉

1. 私たちは、自分のものを大切にしているでしょうか。粗末に扱い、いらなくなれば簡単にゴミ箱に捨てるということがないでしょうか。神さまは、ご自分が造られた私たちのことを大切にしてください。罪に墮落し、まったく役に立たないものになっても捨て去ることをされません。むしろ、自らゴミ箱に落ちていったような私たちを、そこに手を突っ込んでまで救い出してくださいのが神さまの愛です。あがない主を与えてくださったとは、そういう愛を意味しています。
2. 「選んでくださいました」という言葉が出てきます。私たちは、自分で選んで教会に来て、自分でイエスさまを選んで信じていると思っているかもしれませんが、しかし本当は、神さまが私たちを選んでくれたのです。私たちの選択はしばしば変わりますが、神さまの選びは変わらないということを覚えましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

11日（月曜日）

コリントの信徒への手紙一14章1～5節

Q. 預言する者は教会をどのようにする？

12日（火曜日）

コリントの信徒への手紙一14章6～19節

Q. 霊と何で祈り、賛美するべき？

13日（水曜日）

コリントの信徒への手紙一14章20～25節

Q. 物の判断については何になるべき？

14日（木曜日）

コリントの信徒への手紙一14章26～40節

Q. 神は無秩序の神ではなく、何の神？

15日（金曜日）

コリントの信徒への手紙一15章1～11節

Q. キリストは最後に誰の前にも現れた？

16日（土曜日）

コリントの信徒への手紙一15章12～19節

Q. もしキリストが復活しなかったのなら、わたしたちは何と見なされてしまう？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書1章26～38節

わたしたちの救い主、神の御子イエス・キリストは、真の神であると同時に、真の人間であるお方です。それなら、真の神であるお方が一体どのようなにして、わたしたちと同じ人間になられたのでしょうか。聖書は神の御子イエス・キリストが人間となられたのは、ナザレの町のマリアという処女に聖霊の神の力が臨み、このマリアからお生まれになることによってであると教えています。

〈マリアへの告知〉

神は預言者たちを通して、旧約の時代から神の御子の誕生を約束なさってこられました。その約束の時が到来したため、27節にあるように、神はそれを知らせるために天使ガブリエルをナザレの町のマリアという一人の処女の所に遣わしました。というのも、旧約の預言ではダビデの家系から救い主が生まれる（イザヤ7:14、9:5-6、ミカ5:1）とされていたのですが、まさにマリアはそのダビデの家系の者であるヨセフの婚約者であったからです。それで天使はマリアに対して、彼女が身ごもって男の子を産むこと、その名をイエスと名づけること、そして、その子がダビデの王座を継ぎ、永遠にイスラエルを治める者となることを告げたのでした（31-33節）。

〈神の恵みの中にあつたマリア〉

しかし、マリアが神の子を宿すという出来事は、ただ彼女がたまたまヨセフの婚約者であったからそうなつたということではありません。28節で天使は、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と語りました。ここからわたしたちは、神の子をお与えになるという約束を実現するために、実は神の方からマリアを選び、マリアに恵みを与え、そしてマリアと共にいてくださった、ということをお教えられるのです。

もちろん、マリア自身、神を信じる敬虔な人であったということは、天使の告知に対してのマリ

アの応答から分ります（38節）。しかし、マリアがこの世界の救い主である神の子を宿し、神の子の母となるという素晴らしい恵みを与えられた最大の原因は、彼女の信仰の強さや努力ではなく、まさに神の選びと恵みそのものであったのです。このことは同時に、わたしたち人間の救いもまた神の自由な選びであり、恵みであることを教えています。

〈なぜ処女マリアなのか〉

しかし、なぜ神はマリアがヨセフと結婚した後ではなく、処女マリアに神の子を宿させたのでしょうか。マリア自身、最初天使からそのことを聞いた時、「どうして、そのようなことがありえますでしょうか。わたしは男の人を知りませんのに」（34節）と、言ったように、処女が子を宿すということは常識ではあり得ないことです。神は既婚者より処女であることの方が価値が高いとお考えになって処女マリアに神の子を身ごもらせたいのでしょうか。決してそうではありません。

天使はマリアの疑問に対して35節で「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子も聖なる者、神の子と呼ばれる。」と、答えました。つまりマリアが処女であるにも関わらず聖霊の神の力に包まれてイエスを身ごもるのは、マリアから生まれるイエスというお方が、決して人間の意志によって生まれるお方ではなく、まさに神の自由な意思によって生まれるお方、すなわち真の神の子である、ということをはっきりと教えるためであったのです。

処女マリアからの主イエスの誕生の物語は、主イエスというお方が人間であると同時に、神の自由な意思によってこの世界にお生まれになった神の子であるということをはっきりと、わたしたちに教えているのです。（弓矢健児）

カテキズム 子どもカテキズム問22

子どもカテキズム

問22 私たち、神の民のあがない主はどなたですか。

答 私たちの唯一の主、イエス・キリストです。

イエスさまは、永遠の初めから御父より生まれた真の神さまです。

私たちの救いのために聖霊によっておとめマリアより肉体を取り、真の人となってくださいました。

イエスさまは、真の神であり真の人であり続けてくださる二性一人格の神さまです。

ウェストミンスター小教理問答

問22 キリストは、どのようにして神の子でありながら、人となられたか。

答 神の子キリストは、聖霊の力によって処女マリアの胎に宿り、真実の身体と、理性的靈魂をとって人となり、しかも、罪なくして彼女から生れられた。

今週と次週の二回にわたって、イエス・キリストの二性一人格について学びます。イエス・キリストがまことの神であられ、かつまことの人であるとの教理は、私たちの救いを理解する上できわめて大切なものであることを覚えましょう。

キリストの二性一人格は、ふたつの点から理解されなければなりません。ひとつは、神であるキリストはどのようにして人となられたのかという点です。これについては、いわゆる処女降誕について見る必要があります。もうひとつは、なぜキリストがまことの神であられ、かつまことの人でなければならなかったのかという点です。今回は前者について学び、後者については次週見ることにします。

神はイエス・キリストをまことの神、そしてまことの人として世にお遣わしになるにさいして、超自然的なみわざをふるわれました。それがキリストを「聖霊の力によって処女マリアの胎に宿」らせるというみわざです。

まず、キリストは永遠よりいましたもうた神のひとり子であられ、父なる神とその本質を同じくし、その栄光とみかたを等しくしておられるまことの神であられます。

その永遠の神が処女マリアの胎から生まれたもうたとは、このお方がまたまことの人ともなりたもうたということを意味しています。イエス・キ

リストが救い主、神と人とのまことの仲保者となりたもうためには、そのことが必要であったのです。

このときに覚えなければならないことは、神であるお方が神であることをおやめになることなく、まことの魂と肉体とをそなえた人間性をまどわれたということです。つまり「神が人へ変わったのでも、人が神へ変わったのでも、神が半神—半人へ変わったのでも、人が半人—半神になったというのでもない。神でありつつ人となった。神—人となった」（春名寿章『ウェストミンスター小教理問答講解（上）』）のです。

ただし、キリストのご降誕は「普通の出生」（問16）によるものではありませんでした。つまり私たちのように、アダムにある原罪を背負っての出生ではなかったのです。キリストはまことの人としてお生まれになりながら、罪なき方であられたのです。

マリアは私たちと同じ、アダムにある罪人でした。その胎をかりながらキリストには罪がなかったのは、聖霊のみ力のゆえでした。聖霊のみ力によって超自然的に処女マリアの胎内にはらまれたもうたゆえに、罪の汚染から守られたのです。

このように、キリストがまことの神にしてまことの人、しかも罪なき人となりたもうことが、私たちの救いのために必要なことであったのです。

（木下裕也）

テキスト ルカによる福音書1章26～38節

カテキズム 子どもカテキズム問22

（単元のねらい）

主イエスがマリアからお生まれになられたとは、まことの神である方が、まことの人間として、つまりわたしたちとまったく同じ人間としてお生まれくださったということを、意味しています。マリアが、自分の内に起こされた不思議な出来事を信仰をもって受け入れたように、わたしたちもまことの神がまことの人間となってくださった不思議を見つめながら、わたしたちと同じ弱さをもって、お生まれくださった神の子、主イエスに心からの感謝を捧げていきたいと思えます。

「わたしたちと同じ人間となられたイエスさま」

イエスさまは、お母さんのマリアから生まれました。そのときの様子を考えていきましょう。イエスさまが生まれる前、天使ガブリエルがマリアに現れて、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と言いました。ここでマリアは、「恵まれた人」、つまり神さまの祝福をたくさんいただいている人と言われました。どうしてマリアは、そのように言われたのでしょうか。神さまの恵みとは、どのようなものだと思いますか。お金持ちになることでしょうか。自分のやりたいことが何でもできるようになることでしょうか。おいしいごちそうをたくさん食べられることでしょうか。いいえ、神さまが共にいてくださることなのです。神さまと一緒になら、恐いものはありません。困った時にも助けてもらえます。悲しい時もなぐさめてもらえます。神さまが共にいてくださることが、本当の恵みなのです。マリアには、神さまが共にいてくださるのです。だから、これからどんなに恐ろしいことが起きるとしても、何も心配したり、恐れたりすることはありません。そこで続けてガブリエルが語ったことは、「恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」ということでした。ところが、そこで「神からの恵み」としていただくこととは、「身ごもって男の子を産み」ということなのでした。

子供が生まれることは、たしかに神さまからの恵みです。けれどもマリアはまだ結婚をしてい

ませんでした。いいなずけとしてヨセフという人がいましたが、二人はまだ結婚していなかったのです。そしてもし、結婚をする前に、子供が生まれてしまうようなことがあれば、それは大変なことになりました。石で打ち殺されるか、火で焼き殺されることになっていたからでした。このときマリアは、おそらく一二歳くらいの少女です。そのマリアに、ガブリエルが告げた「神からの恵み」とは、もしかすると自分が殺されてしまうかもしれないような、恐ろしい知らせだったのです。けれどもそのことを承知しながら、マリアは、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますよう」と答えたのでした。

まだ結婚していない女の人からは、子どもは生まれません。なのにマリアは子供を産むと約束されました。それはとても不思議なことでしたが、マリアは天使ガブリエルの言葉を信じたのです。「どうしてそんなことがありえましょうか」とは、そんなことはありえないとか、信じられないということではなくて、どのようにしてそうなるのか不思議だということでした。ザカリアは神さまの約束を、ありえないこととして信じませんでした（18、20節）、マリアはそれがどのようにして起こるのか、そのことを聞いたのです。それは疑ったからでも、信じられなかったからでもありませんでした。マリアは、自分からダビデの位をつぐ王が生まれることを信じたのでした。そして、

「神にできないことは何一つない」という天使の約束を信じたのです。それは聖霊がマリアをつつみ、その力ときよさによって罪のない神の子が、マリアから生まれるということでした。それはとても不思議なことで、ありえないことのように思いましたが、この不思議な約束を、マリアは心から受け入れ、信じたのです。そして神さまのお言葉どおりになりますようにと、それにすなおに従ったのです。

この約束は、マリアにとってはとても危険なことになるかもしれないことでしたが、マリアはそのことも含めて、神さまを信じて、心配を神さまにゆだね、従ったのです。マリアは、「主がおっしゃったことはかならず実現すると信じ」る、素直な信仰の人でした。わたしたちも、神さまを信頼して、心から従うことができるようになりたいですね。この後で、エリサベトがマリアと会います。エリサベトはマリアよりずっと年上の人でしたが、マリアに会うと、マリアがどんな人かわかりました。マリアは年は若かったのですが、主が約束なさったことはかならずそうなると思える、信仰の深い人でした。マリアは、「お言葉どおりこの身になりますように」と祈り、自分を神さまにささげました。だからマリアは、神さまからとても祝福された人だとわかったのです。わたしたちも、「主のおっしゃったことはかならず実現すると信じ」、神さまを信頼して、祝福される、本

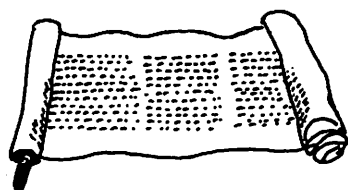
当に幸いな人になりたいですね。

こうしてイエスさまは、マリアから、聖霊、つまり神さまの霊によってお生まれになりました。それは、人間には理解できない不思議なことでしたが、マリアを通してお生まれになることにより、わたしたちとまったく同じ人間としてお生まれくださったのです。イエスさまのお誕生について、ヨセフも約束を与えられていて、このように約束されていました。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」イエスさまは、インマヌエル、つまり「わたしたちと共にいてくださる神」でした。イエスさまは神さまですが、ただの神さまだったら、人間であるわたしたちの弱さや悲しみを理解することはできなかったことでしょう。神さまが、わたしたちと同じ人間となってくださり、この地上で苦しむわたしたち人間の弱さを味わってくださったから、わたしたちの悲しみや悩みをよく理解して、そこから救ってくださる方となることができました。イエスさまは、あなたの今日の悩みや悲しみをよく知る方としてお生まれくださいました。そしてその方が、今日もあなたと共にいてくださり、今日ぶつかる問題をよく理解する方として、あなたを助けてくださるのです。

(三川栄二)

[今日の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙4章15節

この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、
罪を犯されなかったが、あらゆる点において、
わたしたちと同様に試練に遭われたのです。



〈主題〉

人となられたまことの神。

〈ねらい〉

イエスさまが聖霊によってマリアの胎にやどられた恵みの事実を伝える。

〈展開例〉

みなさんは、自分が生まれた日のことは覚えていないでしょう。でも、お父さんやお母さんはその日のことを覚えていますね。イエスさまが生まれたときも、ヨセフさんとマリアさんはしっかりとその時のことを覚えていました。そして、どうして、マリアさんに、結婚する前に赤ちゃんがやどったのかも知っていたのです。それは、神さまからのみ告げによることでした。天使のみ告げによって、マリアさんは、お腹に宿った赤ちゃんが、

神さまからのものだってわかったんです。同じことはヨセフさんにも告げられて、ヨセフさんとマリアさんは、神さまに祈りつつ、イエスさまを育てました。イエスさまは聖霊によってこの世にお生まれになった御方です。しかも、生まれる前から、父なる神さまのご計画にしたがって、人間になれる、お生まれるになることをそのおこころに知っておられた神さまでもあります。それは、ただイエスさまお一人だけのものです。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。イエスさまがあなたのひとり子であることを信じることができますように。そして、生まれてから今日まで、イエスさまといっしょにいることを感謝することができますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～マラカスをならそう～

- ①小さなペットボトルのラベルをとり、ストローを短く切ったものやドングリを入れる。
- ②ペットボトルに絵を描こう。
- ③シャカシャカとふって遊ぼう。

〈ねらい〉

イエス様が、神様であるということと、人間であるということ、それぞれ受け止めていく。

〈分級教師へのアドバイス〉

二性一人格については幾つかのポイントがあります。しかしそれらを完全な理解することは不可能です。理屈ではなく、救いとの結びつきで確信していかなくはなりません。今回は、神と人の二性が完全なものとして存在することを、キリストへの礼拝と、キリストの受肉から受け止めていきます。

〈展開例〉

①今日はちょっと難しい話です。いいですか？

②みんな、イエス様は、神様だって知ってるよね？

（回答例）

- ・知ってる
- ・知らない

③みんなは毎週教会でイエス様のことを礼拝していますよね。っていうことは、礼拝は神様を礼拝するんだから、イエス様は神様なんです。

④けれども、今日のお話を聞くと、イエス様はマ

リアから赤ちゃんとして生まれましたね。マリアは人間ですから、人間から生まれるのは人間ですよ？

⑤ということは、イエス様は、神様だけ人間なんです。これを難しい言葉で「二性一人格」って言うんです。わかった？

「二」と「一」という字はみんな習ってるよね。神様と人間の二つの性質が、イエス様という一人のお方の中で一つになっているということなんです。

⑥不思議でしょ、神様が一人、人間が一人、それを合わせるとイエス様が一人。1 + 1 が 2 にならないで 1 になっちゃう。こんなの算数で書いたらバツにされてしまうね。

⑦でもそこが神様の不思議なところです。その秘密はまた来週。

〈折り〉

天のお父様、あなたが、イエス様を神であるのと同時に人としてくださる不思議なことをおできる力あるお方であることを賛美します。どうかこの不思議な業を私たちにも信じさせてください。主イエス様の御名によって祈ります。

〈やってみよう〉

～暗算ゲーム～

子どもたちの実力に応じて、計算をしてみましょう。一桁の足し算、引き算、繰り上がりのあるもの、かけ算等々。ここではもちろん、1足す1は、1ではなくて2です。

〈暗証聖句〉 ヘブライ4章15節

この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。

〈ねらい〉

神であるキリストはどのようにして人となられたのか。

〈展開例〉

神様であるイエスさまは、私たち罪人を救うために、聖霊なる神様によって、おとめマリアのおなかに宿って、お生まれになりました。神様であり、同時に、人となられたのです。聖霊によって生まれるということは、人間のお父さんとお母さんから生まれることではないのです。聖霊によって、お母さんだけから生まれたのです。人間のお父さんとお母さんから生まれたら、生まれつき罪を持って生まれてくるのですが、イエス様は聖霊によって、お母さんのマリアから生まれたので、罪はありませんでした。おとめマリアは、12歳くらいの少女でしたが、神様が約束なさったことは必ずそうなると信じる信仰の深い人でした。ヨセ

フは、言ってみれば育ての親（父親）でしたが、やはりとても信仰の深い人でした。この二人のもとで幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていました。少年イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛されました。そして、大人になりました。イエス様は罪は犯されませんでした。あらゆる点において、私たちと同様に試練にあわれたのです。それで、人の弱さに同情することがおできになるのです。

〈祈りましょう〉

わたしたちを愛し、ほんとうに人となって、生まれてくださったイエスさま。ただしく、つよく生きたイエスさまを信じて、わたしも神さまの子どもになりたいです。アーメン。

〈答えてみよう〉

- ①天使ガブリエルはマリアに何と言いましたか。
ルカ1：28～
- ②マリアはなんと行って受入れましたか。ルカ1：38～
- ③どんな時、私たちのそばに神さまが共にいてくださるか考えてみましょう。

〈やってみよう〉

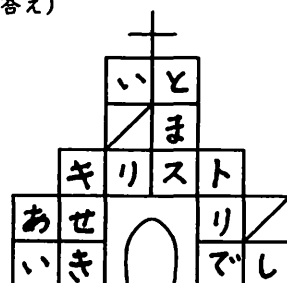
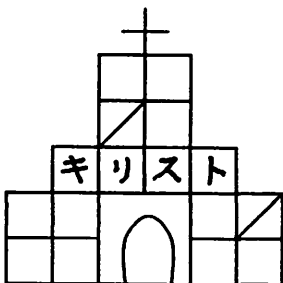
～クロスワード・パズル～

下に聖書に出てくる言葉があります。この八つの言葉をぜんぶ使って、教会をたてあげよう！
ぜんぶ使ってうめてね！

とます	とりで	きせき
あせ	あい	でし
いき	いと	

※タテとヨコに入れてね。
ナナメはありません。

(答え)



〈聖書をさらに深く〉

1. 自分が生まれたときの話を、お父さんお母さんから聞いたことがあるでしょうか。命が誕生するとき、そこにはたくさんの喜びがあり、また生命の神秘への驚きがあるものです。イエスさまが誕生したときにも、同じように喜びと驚きがありましたが、それは同時に、私たちの命の誕生とはまったく異なった出来事でもありました。
2. 同じ点と異なる点を確認しましょう。私たちと同じ点は、マリアという一人の女性から生まれたということです。このことは、イエスさまが真の人であったことを意味しています。まったく異なる点は、マリアが聖霊によって身ごもったということです。このことは、イエスさまが真の神さまであったことを意味しています。

〈教理を響かせるために〉

1. 前に学んだ三位一体の教理と共に、二性一人格はキリスト教の中心的な教理です。三位一体について復習しながら理解しておきましょう。父・子・聖霊のうちの子なる神が、肉体を摂り、真の人となって来られたのが、クリスマスのお出来事であり、そのお方がイエス・キリストです。私たちの理解をはるかに越えたことですが、「神にできないことは何一つない」という御言葉への信頼から理解していきましょう。
2. 「真の人」ということについて、私たちと同じ点と違う点があります。同じ点は、「真実の身体と、理性的靈魂」を持っておられたことであり（痛みや悲しみを知っておられる）、異なる点は、罪はなかったということです。イエスさまの人間性を身近に感じる聖書の場面、逆に、自分との違いを示される聖書の場面があれば、話し合ってみましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

18日（月曜日）

コリントの信徒への手紙一15章20～28節

Q. 最後の敵として、何が滅ぼされる？

19日（火曜日）

コリントの信徒への手紙一15章29～34節

Q. 悪いつきあいは、何をどうしてしまう？

20日（水曜日）

コリントの信徒への手紙一15章35～49節

Q. 最後のアダムは何となった？

21日（木曜日）

コリントの信徒への手紙一15章50～58節

Q. 死は何にのみ込まれた？

22日（金曜日）

コリントの信徒への手紙一16章1～12節

Q. 贈り物を届けにどこに行く？

23日（土曜日）

コリントの信徒への手紙一16章13～24節

Q. 何事も何をもって行うべき？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヘブライ人への手紙2章14～18節

わたしたちの救い主、神の御子イエス・キリストは、真の神であると同時に、真の人間であるお方です。しかし、それならなぜ、そのような真の神がわざわざ人間とならなければならなかったのでしょうか。聖書はその根本原因がわたしたち人間の罪にあることを教えています。つまり、主イエスは人間をその罪の支配から解放してくださるために、わたしたちと同じ全き人間性をお取りになったのです。

〈血と肉を備えたイエス〉

わたしたち人間は当然ですが血と肉を持った存在です。というより、血と肉を持つということは人間であることそのものをあらわしています。その意味で血と肉は人間存在の全体を象徴する言葉です。しかし、14節で「イエスもまた同様に、これらのものを備えられました」と、言われているように、主イエスもまたわたしたちと同じ血と肉を持ったお方です。ここから、わたしたちは、主イエスは神の子でありながら、同時に、わたしたちと同じ全き人間性を持っておられるお方だということを教えられます。

しかし、神の子であるお方がなぜ、わたしたち人間と同じ血と肉をお取りになったのでしょうか。それは、わたしたち人間の血と肉が罪の支配の中にあるからです。パウロがローマ3章9節以下で語っているように、すべての人間が罪の支配の中にあります。だからこそ主イエスは、この罪の支配の中にあるわたしたちの血と肉、すなわち「死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった」（15節）わたしたち人間を、罪の支配、死の支配から解放するために全き人間性をお取りになったのです。

〈罪の償いのためのイエスの苦難〉

それなら主イエスはどのようにして、わたした

ち人間を罪と死の支配から解放なさったのでしょうか。17節では「それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。」とされています。ここから教えられることは、わたしたちが罪と死の支配から解放されるためには、その罪の償いがなされなければならないということです。

旧約において、大祭司は神の御前に犠牲の動物を献げることによって、イスラエルの民の罪を償うという役割が与えられていました（レビ4章参照）。しかし、17節から分ることは、今や主イエス御自身が大祭司として、神とわたしたち人間との間を執り成してくださるということです。そして、18節にあるように、主イエスは動物の犠牲ではなく、罪なき御自身が神からの刑罰として「試練を受けて苦しまれた」ことによって、わたしたち人間の罪の償いをしてくださったのです。

ヘブライ9章12節では、もっとはっきりと「雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」と教えています。

パウロがローマ6章23節で「罪が支払う報酬は死です」と語っているように、人間は罪がある以上、その罰である死から逃れることはできません。ただ一つの救いの道は、罪の償いが完全になされることです。そのために罪の無いお方である主イエスは罪の罰を受け、十字架で死んでくださったのです。それによって、主イエスは罪と死の支配の中にあつて、「試練を受けている」（19節）わたしたち人間を助け、救ってくださったのです。

真の神であるお方が、真の人間となってくださった理由は、わたしたちの身代りとなって罪を償い、わたしたちを救うためであったのです。

（弓矢健児）

カテキズム 子どもカテキズム問22

子どもカテキズム

問22 私たち、神の民のあがない主はどなたですか。

答 私たちの唯一の主、イエス・キリストです。

イエスさまは、永遠の初めから御父より生まれた真の神さまです。

私たちの救いのために聖霊によっておとめマリアより肉体を取り、
真の人となってくださいました。

イエスさまは、真の神であり真の人であり続けてくださる

二性一人格の神さまです。

参考教理問答 『ウ小教理』22

今回は、私たちの救いのために、なぜイエス・キリストがまことの神にしてまことの人でありたまわねばならなかったのかについて考えましょう。

まず、イエス・キリストはまことの人でなければなりません。なぜなら、罪の問題はまさしく私たちの問題であって、それゆえ罪の贖いは私たちのこの人間性を舞台としてなされなければならなかったからです。

そのためにキリストはまことの人となりたまいました。そして、私たちのかわりに十字架に死なれ、罪の報酬を支払われたのです。

しかしキリストは、同時にまことの神でなければなりません。なぜなら、もしキリストが私たちと同じ「普通の出生による」、アダムの原罪を背負って生まれた人間にすぎなかったとしたら、キリストの十字架の死は何の意味もなかったからです。その死は、罪人がみずからの罪の報酬を正当に支払って死んだ、ひとりの人間の死以上のものではなく、人類に救いをもたらすものにはならなかったでしょう。

けれどもキリストはまことの人にしてまことの人であられ、このお方には罪がありませんでした。従って罪の報酬を支払う必要がなかったのです。

にもかかわらず罪の報酬としての死を死なれた

ことによって、アダム以来人類を支配し続けてきた罪と死の法則が破綻することとなったのです。罪と死の法則は、キリストの命のみ霊の法則にとってかわったのです。三日目の復活により、キリストが死に勝利された生ける神であり、私たちが礼拝すべき救い主でありたもうことを証明なさったのです。

紀元後4世紀のはじめにアタナシウスとアリウスというふたりの人の間に、キリストがどのようなお方をめぐる論争がかわされました。アリウスはキリストを半神半人のような存在と考えました。彼は合理主義者で、キリストが100パーセント神で、同時に100パーセント人であるということは計算に合わないとしたのです。一方アタナシウスは、キリストがまことの神にしてまことの人であられると主張しました。彼は人間理性からではなく、罪からの救いという角度からキリストのご人格を考えたのです。教会は会議を開き、アタナシウスの説を正しいと認め、アリウスの説をしりぞけました。こうして「ニケア信条」(325年)が生み出されたのです(二性の関係がどのようなかについては、451年の「カルケドン信条」が規定しました)。(木下裕也)

テキスト ヘブライ人への手紙2章14～18節
カテキズム 子どもカテキズム問22

〔単元のねらい〕

主イエスがマリアから「まことの人間」としてお生まれくださったのは、人間として生きるわたしたちの弱さを知り、苦しみと悩みをよく理解する方として、生きてくださるためでした。だから主イエスは、自分の悲しみや悩みを、とても良く理解し、受け止めてくださる方であることを、子供たちが理解できるようにしていただきたいと思います。しかしそれはなにより、わたしたちの罪を贖うためでした。罪の贖いについては、後で学ぶことになりますが、神の子が罪を犯したわたしたち人間の身代わりとなるために、人間となってくださった点を、お話しください。

「わたしたちと同じ人間となられたイエスさま」

神さまはヨセフに、「マリアは男の子を産み。その子をイエスと名づけなさい」と命じられました。わたしたちのためにお生まれになったイエスさまの名は、わたしたちの救い主となってくださるために名づけられたものでした。「その子をイエスと名づけなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」と約束されたからです。こうして「聖霊によりて宿り、処女マリアより生まれ」たイエスさまは、わたしたちの「罪からの救い主」としておいでくださった方でした。ここでイエスさまが、確かにまことの人間であり、わたしたちと同じ肉体をもたれたことの意味を考えましょう。わたしたちを罪から救い出すために、この方はごくありふれた、誰一人気にとめることのない平凡な名をもって、この地上に生まれて来られました。イエスさまがお生まれになったのは、豪華な王宮ではなく、家畜小屋で、そこでひそかにお生まれになり、しかもその名によってマリア・ヨセフと共に住民登録をされ、税金を課せられ、人間の支配者に支配されて苦しめられる者の一人となってくださったのです。父ヨセフの死後は、母マリアと兄弟たちを育てなければならず、生計を維持することに苦勞され、重い税金にあえぎ、飢えと渴きに悩まされ、疲労困憊し、心萎え、悲しみ、こうしてわたしたちがたどる地上の勞苦を一つ一つぶさに味わってくださったのでした。

そして何一つ神々しさも、神秘さも感じられないごく普通の人として、つまりわたしたちと全く同じ人間となってくださったのです。こうしてこの世の中に生き、しいたげられつつ歩む者と同じになってくださることで、その人々の罪を贖う救い主となられたのでした。「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できないのではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」。「それでイエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです」(ヘブライ4章15節、2章17、18節)。こうして聖なる神の子が、わたしたちと同じ肉体を取ってくださいました。それにより、この方はわたしたちの死すべき肉体を身に引き受け、肉体をもつ苦しみと悩み、その弱さも危うさもみな知りつくしたお方として、わたしたちの傍らに共に立ってくださるのです。この肉体をもって犯すわたしたちの罪の諸々の悩みを知るものとして、わたしたちの兄弟となってくださったのです。それは、わたしたちの良き理解者として良き兄弟となられたということなのでした。

こうしてイエスさまが、わたしたちと同じ人間となってくださったのは、あらゆる点でわたしたちと等しくなるためであり、そのためにイエスさまは母マリアの胎に宿るところからわたしたちと同じになってくださり、それによって罪をもって生まれてくるわたしたちの罪の人生を、その初めから「やり直して」下さり、それによって肉をもって辿る人生のあらゆる苦しみと試練とを身をもって味わい尽くしてくださったのでした。イエスさまもわたしたちと同じ苦しみを受けられたということは、わたしたちにとって大きな慰めです。わたしたちが辿る人生の道行きでのあらゆる苦しみ、この方は既に知っておられるのであり、その方を人生の同伴者として歩いていくのですから、なんと心強いことでしょうか。そしてわたしたちは自分の人生の確かな道案内であり、深い同情者、理解者を持つのです。イエスさまは、その地上の全生涯、つまりこの世のご生涯の全てにおいて苦しみを受けられ、およそわたしたちが人間として経験し、味わうところのあらゆる苦難を通してくださったのであり、こうしてイエスさまが「あらゆる点で」わたしたちと等しくなられた、だからわたしたちは、今自分が抱えている苦しみや悩みの本当の理解者であり解決者である方を持っているのです。

しかしイエスさまがわたしたちと同じ人間となってくださったのは、なによりもわたしたち人間の罪をご自分が引き受け、背負うことで、わた

したちを罪からあがない、救ってくださるためでした。「あがなう」とは、たとえば奴隷にされてしまった人が、代金を支払われることで自由にされ、テロリストに捕まえられてしまった人質が、身代金を払うことで釈放されるということです。あるいは、罪を犯して牢獄に入れられている人が、罰金を支払うことで、牢から出してもらうことです。神さまの前に罪を犯したのはわたしたち人間です。だからわたしたち人間が、自分の罪を償わなければなりません。その罪のための代金、身代金、罰金は、自分の命でした。しかし自分の命を差し出してしまったら、死ぬしかありません。そこで人間の罪を償うために、神の子が人間となり、その罪の一切をご自身が引き受ける、つまり身代わりとなって死ぬことによってわたしたちを罪から救い出してくださったのです。こうして「罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです」(ローマ書8章3節)。わたしたちは、イエスさまの命と引き換えに、罪を赦され、罪の罰を免れて、永遠の命をいただくものとなったのでした。「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです」(1ペトロ2章24節)。わたしたちの罪を引き受けて、身代わりとなって死んでくださるために、人間となってくださった神の子イエスさまに、心からの感謝を捧げましょう。

(三川栄二)

[今日の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙2章17、18節

それでイエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、
民の罪を償うために、
すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。

〈主題〉

まことの神、まことの人。

〈ねらい〉

神さまの神秘と奥義を知らされていることへの
滑いおそれをもって伝える。

〈展開例〉

みなさんは、自分だけのひみつを持っていますか。神さまは、イエスさまの中に、いっぱいひみつを入れてくださいました。これを「オクギ」とか「シンビ」と言います。先生も、全部のひみつを知っているわけではないんだけど、聖書から分かることを学びましょう。

イエスさまがほんとうの神さまで、ほんとうの人間であるということはとっても不思議なことです。それは、神さまのみこころによるほんとうに大きなひみつですね。それは、神さまだけがわ

た私たちの罪をかんぜんにきよめて、神さまとお
交わりができるようにしてくださるから。また、
人間となることによってしか、罪人の身代わりにな
ることはできないからです。このために、えい
えんの神さまのひとり子イエスさまは、わたした
ちのために、人となってくださり、神さまのまえ
に、ただひとつのきよいギセイとなってくださ
ったんですね。とっても不思議な神さまのひみつで
すね。わたしたちを罪から救うためのとっておき
のひみつです。

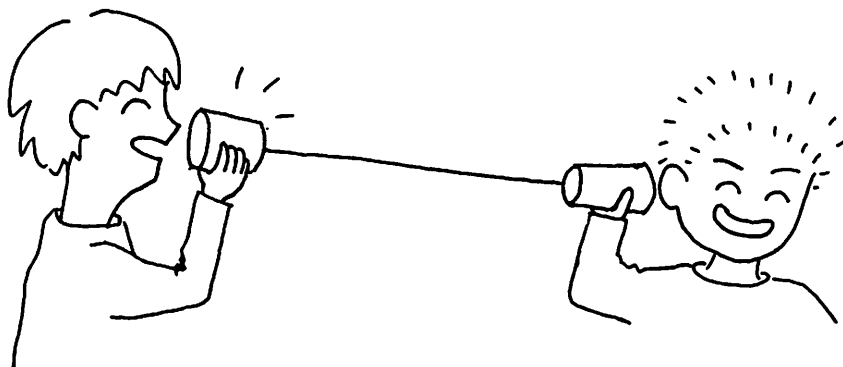
〈お祈り〉

天の父なる神さま。イエスさまが、神さまであり、また、人間ともなられたという神さまのひみつを信じ、十字架の上で流された血のうちに、わたしたちの救いといのちの喜びがあることを信じていけることができますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～糸でんわで遊ぼう～

- ①紙コップに絵を描こう。
- ②紙コップの底に穴をあけ、糸を通し、糸の端にツマヨウジを結びつけて止める。
- ③ロや耳に当てて、お互いにモシモシと話をしよう。



〈ねらい〉

二性一人格が、わたしたちが救い主と共に居ることができるためであることを伝える。

〈分級教師へのアドバイス〉

二性一人格は、論理として理解しようとする矛盾であり、つまずきでしかありません。アタナシウス・アリウス論争が示すように、罪からの救いという角度、つまり、わたしたちそれぞれの救いとの関係で理解されなければいけません。

〈展開例〉

①みんなは、たとえば、何か買って欲しいものがある時に、お金を持ってる人に頼む？ それともお金を持ってない人に頼む？ どっち？

〈回答例〉

- ・お金持ちの人
- ・貧乏な人
- ・お母さん

②お願いするんだったら、買ってくれそうな人をお願いしないとダメだよ。先生に頼んだって先生はお金持ってないからダメだよ。

③わたしたちがお祈りで何かをお願いするなら、私たちが救ってくださる神様をお願いしなければダメですよ。

④わたしたちが、「イエス様お願いします」ってお祈りしているのに、そのイエス様が、神様でなくて、わたしたちのお願いを聞いてくれない人だったら大変ですよ。

⑤じゃあ今度は、わたしたちが何か失敗して、ゴメンナサイって謝る時に、代わりに謝ってくれる人がいるとしたら、それは、友だちがイイ？ それとも全然関係ない大人の人がイイ？

⑥って言うか、全然関係ない大人の人は、一緒に謝ってくれないよね。わたしたちが失敗を誤る時には、同じ仲間でないと一緒に謝ったり、代わりに謝ってくれたりできないんですよ。

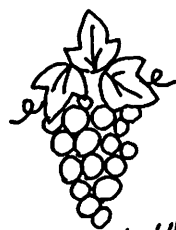
⑦イエス様はね、わたしたちが神様に罪を誤らなければならぬ時に、わたしたちの代わりに謝ってくださったお方なんです。だから、イエス様は、わたしたちと同じ人間じゃなきゃいけないんです。

⑧だから、わたしたちがイエス様に罪の罰の身代わりになっていただいて、私たちが許していただくには、イエス様は神様で、人でなければいけないんですよ。このことを難しい言葉でなんと言うか？ 先週やったのを覚えている？

- ・わからない
- ・二性一人格

〈折り〉

天のお父様、イエス様がわたしたちのために、神様でありながら人でもあるという不思議な二性一人格のお方としてわたしたちのところにお願いをくださったことを感謝します。わたしたちがイエス様によって罪を赦され、イエス様によって救いの道を歩くことができるように助けてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。



ぶどうの木 (御霊の象)

〈暗証聖句〉 ヘブライ2章17、18節

それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです。

〈ねらい〉

神であるイエス様が、どうして人になられたのかを知る。

〈展開例〉

悪いことをしたとき、私たちは罰を受けます。神様の前に罪人である私たちは、生まれたときから原罪をもって生まれ、一生涯、神様に対して罪を犯し続けます。その罰は死です。この体が死ぬだけでなく、一人一人が持っている魂の永遠の死です。神様から見放され、いわば地獄へ行くこととなります。そのような哀れな私たちを、神様はそのままにはされず、私たちを救うために、イエス様を救い主としてくださったのです。イエス様はどのようにして私たちを救ってくださるのでしょうか。私たちが受けなければならない罰を、代わりに受けてくださることによってです。私たちの身代わりになれるのは、チンパンジーでもキリンでもありません。また、お金を払って罰を逃れることも出来ないのです。私たちと同じ人間が、

身代わりにならなければなりません。しかも、まったく罪のない人間が身代わりにならなければならないのです。イエス様は神様ですが、おとめマリアから生まれ、私たちとまったく同じ肉体をとり、真の人となられました。ですから、私たちの弱さと苦しみを知っておられ、私たちを心から愛してくださり、全く罪のない方なので、私たちの身代わりになられたのです。私たちはそのイエス様を信じることで、罪を赦され、神様の罰を受けなくてもよいのです。そして神様の子となることが出来ます。そして永遠の命をいただくのです。

〈祈りましょう〉

つらいとき、くるしいとき、イエスさまを思い出します。イエスさまが、私を神の子にするため、かずかずのくるしみを受けてくださいました。わたしを、イエスさまの友、イエスさまの弟子にしてください。アーメン。

〈答えてみよう〉

- ① 私たちは、何と引きかえに罪をゆるされたのでしょうか。
○○○さまの○
- ② そして、何をいただいたか。
○○○○の○○○
- ③ なぜ、イエスは神であり、人でなくてはならなかったのでしょうか。ヘブライ2：14～18

〈やってみよう〉

～いろいろな十字架を調べてみよう～

他にもいろいろあるよ。



〈聖書をさらに深く〉

1. 「死の恐怖」(15節)を感じたことがあるでしょうか。死は逃れることのできない現実であり、自分の力で克服できないものです。そして、私たちに恐怖と絶望をもたらすものです。それは、死が私たちの罪と結びついていることと関係しています。しかし、イエスさまが人として来られ、十字架の死さえも味わってくださったのは、私たちが罪と死の支配から解放されるためでした。イエスさまを信じることで、死に対する感じ方が変わったという経験などがあれば話し合ってみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 川で溺れている人を助けるために私たちには何ができるでしょうか。川岸から、あしなさい、こうしなさいと声をかけることもできますが、命がけて自分も川に飛び込んで助けに行くという方法もあるでしょう。イエスさまが、罪人を救うために、人となって来られたということは、それと同じような意味です。
2. ただし、助けに飛び込んだ人が、同じように溺れてしまう人であっては意味がありません。つまり、罪人を救う人が罪人であっては意味がないのです。イエスさまは、罪人を助けることのできる力を持った真の神として、罪のない人間となって来られたのです。
3. そして大切な点は、助ける人も川に飛び込めば苦しい思いをすするということです。イエスさまは、真の人として苦しみを受けることで、私たちが救い出してくださったのです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

25日(月曜日)

コリントの信徒への手紙二 1章 1～7節

Q. この手紙を書いているのは誰？

26日(火曜日)

コリントの信徒への手紙二 1章 8～11節

Q. 自分を頼りにしないで、誰を頼りにする？

27日(水曜日)

コリントの信徒への手紙二 1章 12～22節

Q. 神の子イエス・キリストにおいては何だけが実現した？

28日(木曜日)

コリントの信徒への手紙二 23節～2章 4節

Q. どのような心で手紙を書いた？

29日(金曜日)

コリントの信徒への手紙二 2章 5～11節

Q. 前の手紙は何を試すためだった？

30日(土曜日)

コリントの信徒への手紙二 2章 12～17節

Q. 至るところにどういう知識の香りが漂っている？

○心に残った言葉を書き出してみよう。



テキスト マタイによる福音書1章18～25節

(1) ヨセフの正しさと決心

ユダヤでは婚約が法律上での夫婦であることを意味していました。しかし、実際の夫婦生活はその1年後ぐらいから始まるのです。ですから、婚約していたヨセフは既に夫であり、マリアは妻であったのです。また婚約の解消も離縁と呼ばれるのです。

既に夫婦とみなされているとはいえ、婚約期間でしたから、「身ごもっていることが明らかになった」と言われていますが、このことからヨセフの驚きをうかがい知ることができるのです。

この事実を知ったヨセフは、他の人に明かすことなく、密かに縁を切ろうとしたのです。それは、こそそとごまかそうとしているというのではなく、マリアの身を案じてのことなのです。この事実が公になればマリアは姦通の女として晒し者にされ、石打にされる危険があったからなのです。彼は正しい人であったので、マリアがそのような辱めに合うことがないように密かに別れよう決心するのです。

(2) 天使の出現

このヨセフの決心は御使いの出現によって阻止されます。

天使はマリアは聖霊によって身ごもったこと、その名をイエスとすべきことを語るのです。それは、神様の約束とご計画に基づくものであり、そのようにすることが神様の御意志であるからだということも告げるのです。そして、神様の御意志がここにあるからこそ、恐れることなく、マリアを迎え入れるように告げるのです。

この天使の御告げは、正しい人であったヨセフ

にとっても心休まる、深い平安を与えるものであったでしょう。ヨセフはこの御言に従い、マリアを迎え入れたのです。

(3) 神様の約束と罪からの救い

このところにある神様の約束とご計画とは、御自身の民を罪から救うということです。この罪からの救いは、神様と人間との断絶が取り除かれることを意味します。その救いを旧約聖書は待望し、新約において主イエス・キリストによってそれは成就するのです。「自分の民を罪から救う」ことによって「インマヌエル」「神は我々と共におられる」という出来事が実現するのです。つまり「あなたはわたしの民となり、わたしはあなたの神となる」とおっしゃった主の宣言の通りに、神様が私たちの神様となって下さり、「神は我々と共におられる」という出来事が私たちの身に現実となるのです。主イエスはこのことを実現するために神様から世に送られた救い主、メシアであったのです。

(4) イエスと名付けなさい

イエスという名は「主は救い」という意味であることを当時の人は知っていたのでしょう。つまり、当時わりと一般的な名前だったのです。その「主は救い」という名を付けよと御使いによって命じられているのは、この方がまさに、罪からの救い主であり、この方こそ「預言者を通して言われていたことの」実現であったからなのです。この名前にこそ、神様による約束の実現の宣言が表されているのです。
(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問23

子どもカテキズム

問23 主イエス・キリストとお呼びするのはなぜですか。

答 イエスとはお名前で「罪からの救い主」、キリストとはお働きを表し、「神さまから油を注がれた方」という意味です。このお方が私たちの主として与えられました。ですから、私たちは、喜びと感謝をもって主イエス・キリストとお呼びするのです。

〈人となられたイエス〉

今回からイエス・キリストの御名について学びます。「名は体を表す」という言葉があるとおり、イエス・キリストの御名は、そのままイエス・キリストのご人格とみわざとをあらわしています。私たちは祈るとき、「イエス・キリストの御名によって」祈りますが、そのときには決してただ御名をとこなえているというのではなく、このお方のご存在を崇め、このお方の仲保者としてのみわざを祈り求めているのです。

「イエス」は、このお方がまことの人としてお生まれになったときに名づけられた御名です。「キリスト」は称号で、このお方の職務をあらわす御名です。

「イエス」はヘブライ語の「ヨシュア」をギリシャ語の音にうつしたもので、旧約のイスラエルにおいてはどこにでもある平凡な名前であったようです。旧約聖書の中にこの名を持つ人は幾人も登場します。新約聖書の中にも「イエス」という名を持つ人が出てきます。

このように平凡な名ですが、神ご自身がこの名をつけるようにと、み使いを通してヨセフにお命じになりました(マタイによる福音書1章21節)。

そこには深い二つの意味があったと考えられます。まず、このようにありふれた名をつけられたということが、御子がまことに人となられ、私たちのひとりとなられたことへのしるしとなったということです。神が私たちのひとりとなるほどにへりくだりたもうたインマヌエルの恵みの事実を、この「イエス」という御名が証しているのです。

さらに、この御名が「神は救いなり」という意味を持つことです。イスラエルでは、家に跡継ぎである長男が生まれたときに、その家に神の祝福があるようにとの願いをこめて「ヨシュア」と名づけるならわしがあったようです。

しかしこのお方にとっては、まさに御名がご自身を体現することとなったのです。その御名のとおりに、このお方は十字架に死んでよみがえりたもうことによって、全人類に神の救いの祝福をもたらされたのです。(木下裕也)



オリーブ(恵み)

テキスト マタイによる福音書1章18～25節
カテキズム 子どもカテキズム問23

(単元のねらい)

ここでのねらいは、イエスという名前が、「主は救い」という意味であることを説明し、イエス様は罪からの救い主であることを明らかにすることにある。イエス・キリストという名称について、今回は「イエス」を扱い、次回は「キリスト」を扱う。本来は、一つの事柄であるので、次回分も頭に入れて、今回のテキストに取り組んでいただきたい。罪からの救い主の意味を語ることは難しいが、イエス様こそが子供達にとって一番必要な救い主であることを伝えたい。

「罪からの救い主、イエス様」

人は、誰でも名前を持っています。多くの場合、両親が付けた名前です。それぞれの名前には、両親の願いが込められています。皆さんは、どんな名前ですか。私の知っている人に「ひかり」さんがいます。漢字ではなく、ひらがなですが、「光の子」という聖書の言葉からとられた名前です。神様の光の内を歩き、光の子として生きてもらいたいという願いが込められています。私の名前は、謙といいます。これは、謙遜の謙です。父が謙遜な人になるようにという思いを込めて名付けてくれたものです。ですから、自分の名前を書く度に、父の気持ちを思い起こし、謙遜な人にならなくてはと思わされています。

イエス様の名前は、父ヨセフが付けたものです。しかしそれは、天使が夢でヨセフに現れ、「イエスと名付けなさい」というお告げによって付けられた名前です。ですから、イエス様の本当の名付け親は、天使を使わされた父なる神様です。「イエス」という名前は、本来は、「主は救い」という意味をもっています。ユダヤではよくある名前でした。「主の救いが、この子の上にあるように」との親の願いが込められています。日本名にすれば、「息子」、「患一」となるでしょう。神様の恵みがこの子の上にありますようにという願いが込められています。

ところが、イエス様の名前は、普通とは違った意味をもっています。天使は次のように語ってい

ます。「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」(21節)。神様の救いがこの子にありますようにという願いはありません。この子を通して、神様の救いがこの地に訪れますようにという願いです。願いというよりも、これは預言です。この子が、必ず、将来、自分の民を救うという預言です。「イエス」の本来の意味は、「主は救い」です。神様の救いの御業を表す言葉です。その神様の救いを、イエス様が行ってくださるという約束が、イエス様という名前に込められています。

両親のヨセフとマリアは、「イエス」と我が子と呼ぶとき、神様の救いがこの子を通してこの世でなされようとしているという期待を覚えたことでしょう。ただここで、イエス様のもたらす救いが、「罪からの救い」であることに注意しなければなりません。この世には様々な救いがあり、様々な救いを必要としています。

当時の社会は、ローマ帝国の支配下にあり、すべてのユダヤ人の願いは、ローマ帝国からの独立・解放でした。このような願いは、国を植民地として取り上げられた民族でないといけないかもしれません。また、この世には、貧しさからの解放が必要です。多くの人が飢えて死んでいます。また、病気からの解放も必要です。お医者さんが、このために働いています。また、弁護士さんは、法律によって、不公平、不平等からの解放のため

に戦っています。また、今日の世界の願いは、テロからの解放です。イエス様も、地上の御生涯において、病気の人を癒やし、5,000人の給食の奇跡を行い、人々の様々な悩みを受け止めてくださいました。ユダヤ人とサマリア人の間に宿る憎しみを取り除くために、良きサマリア人の譬をお話くださいました。イエス様の解放は、すべての苦しみや悲惨からの解放を含む幅広いものです。

しかし、イエス様の解放とこの世が求める解放は、同じではありません。イエス様のお働きの中心は、罪からの解放です。人々を罪から救うことです。ここでの罪は、警察に捕まるような犯罪ではありません。神様の御前でなされる罪です。神様に従わないことです。神様から離れることです。神様を無視することです。神様に感謝を忘れてしまったことです。神様によって創られ、神様によって日々支えられ、神様は御子をお遣わしくくださるほど愛してくださっていますのに、罪人は神様と共に生きることを喜びません。確かに信心深く生活している人もいますが、本当の意味で神様の御心に完全に従って生きている人は、誰もいません。聖書によれば、すべての人が罪人で、真の神様から離れ、神様を悲しませて、生きています。

もし、人々がこの罪から解放してください、と願っていれば、人々はイエス様の救いを求めるでしょう。人々が罪から解放してください、と願っていなければ、人々はイエス様の救いを求めないでしょう。人々は、自らの罪に気付いていませんので、罪からの解放を求めて教会学校に来る人は、僅かです。でも、イエス様は、人々を罪から解放するために、罪人のなかにお出でくださいました。そして、人々は、イエス様と出会って初めて、今まで、自分が神様から離れていたことに気がきます。イエス様は、神様と共に生きる祝福をたずさえてこの世にお出でくださいました。神様は、罪人が罪に気付いて神様に立ち帰ることを、黙って

待っておられるわけではありません。罪人が罪に気付くより先に、神様は、御子のイエス様をお遣わしくくださいました。イエス様は、神様の御心を知らず、神様の御心に従えない罪人をその罪から解き放ち、神様との正常な関係に引き戻すためにお出でくださいました。イエス様とお会いした人は、イエス様を通して、神様と共に歩む人生の祝福を体験します。そのなかで、今まで、自分の人生に神様との交わりが欠けていたという罪に気付くのです。

ですから、イエス様のお名前は、「インマヌエル」、つまり、「神、われらと共にあり」と説明されているのです。イエス様を通して「神様が共にいてくださる」祝福を知った人は、罪から解放されています。また、信仰をもっても悪いことを思ったり行ったりしますが、それでも、その都度神様に悔い改めることができ、神様と共に生きています。神様から離れて生きる罪から、イエス様は、本当に私たちを解放してくださったのです。また、罪から解放されて神様と共に生きる喜びを知った人は、教会学校に集い続けて、神様に喜ばれる人生を求めて、歩み続けます。

イエス様は、罪を裁くためではなく、罪から私たちを解放するためにお出でくださいました。イエス様は、ご自分の命を差し出す覚悟で、お出でくださいました。私たちが罪から解放するために、イエス様は十字架で血潮を流してくださいました。神様を無視し、神様から離れて生きる私たちの罪の裁きを、私たちに代わって受けてくださいました。神は、このイエス様の御業を良しとして、私たちをイエス様の民となし、イエス様に与えてくださいました。イエス様によって、私たちは神の民となりました。ですから、「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださいました」イエス様を、私たちの救い主とお呼び致しましょう。(ヨハネの黙示録1:5-6)(岩崎 謙)

[今日の暗唱聖句] マタイによる福音書1章21節

マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。

この子は自分の民を罪から救うからである。

〈主題〉

ただ一つの救い。

〈ねらい〉

イエスさまは罪人の救い主であり、ただ一つの信仰と希望の主であることを伝える。

〈展開例〉

みなさんは、ひとりひとり、名前をもっていますね。マリアさんから初めて生まれた赤ちゃんに「イエス」という名前がつけられました。それは、ヨセフさんも、マリアさんも、天のみ使いから聞いていた神さまから命じられたお名前でした。それは、罪から人々を救い出すというお名前でした。ほんとうにマリアさんから生まれたイエスさまは、ひとびとを罪から救う力のあるお方でした。それは、ただ、名前に力があるというよりも、イエスさま

まのもっておられるみかとそのお働きが人間のものではないということですね。イエスさまのお力がいちばんあらわれた所は、ゴルゴタの丘で十字架にはりつけにされて死にわたされた時と三日目に墓からよみがえられた時です。イエスさまの復活を見た弟子のペトロさんも、「ほかのだれによっても、救いは得られません」（使徒4：12）と人々に福音を宣べ伝えました。イエスさまのみかは今も、世界の人々の内に、教会の内にならわれていることを信じていのりましょう。

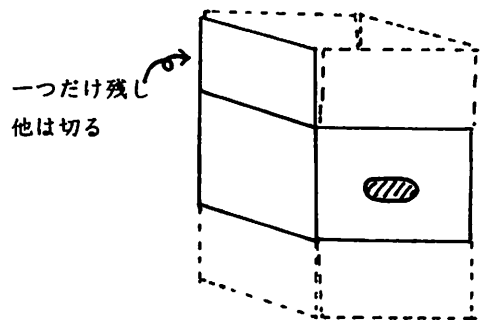
〈お祈り〉

天の父なる神さま。イエスさまのお名前によって、人々の罪がきよめられて、救われるようにしてください。いつも、イエスさまと共にお祈りできますように。かんしゃして、イエスさまのとうとお名前によってお祈りいたします。アーメン。

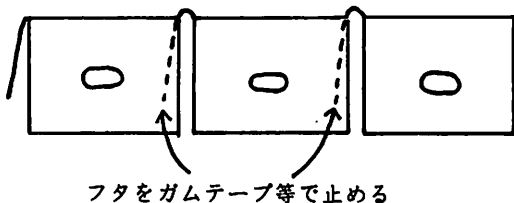
〈やってみよう〉

～イモムシ列車に乗ろう～

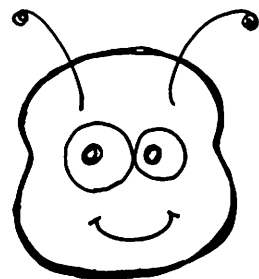
- ①段ボール箱のふたを一枚だけ残して切り取り、横（左右とも）には、手を入れる穴をあける。



- ②段ボール箱を縦に並べて、フタを前の箱に入れて、ガムテープなどで留める。



- ③イモムシの顔を作って、前に張る。



- ④段ボール箱の中に一人ずつ入って、イモムシ列車の出発進行！

〈ねらい〉

名前が、その人の本質を現す意味を持っていること。イエス様はまさに私たちが救いだすお方であることを示す。

〈分級教師へのアドバイス〉

小学校低学年でも、自分の名前を漢字で書くことができる子どもが多いようです。しかし、最近の傾向として、当て字が多く、名前に明確な意味がない子どもが増えています。注意しましょう。

〈展開例〉

①みんなは自分の名前を書けるかな？

(回答例)

- ・書ける
- ・書けない

②じゃあ、自分の名前の意味を知ってる？

- ・知らない

③先生の名前は、先生が、イエス様を信じて、喜んで生きるように先生のお父さんがつけてくれた名前です。みんなも、お父さんやお母さんや、

おじいちゃんおばあちゃんが色々な願いを込めて名前をつけてくれてるんだよ。

④それじゃあ、イエス様の名前はどんな意味だっ
て言ってたか覚えてる？

- ・忘れた

⑤イエス様の名前は「主は救い」つまり、「主なる神様はわたしたちのことを救ってくださるお方ですよ」って言っているお名前なんです。

⑥このお名前は父なる神様がつけなさいと命じられた特別なお名前ですから、本当にイエス様のことを良くわかっている名前ですね。

〈折り〉

天の父なる神様、あなたが、イエス様に「イエス」という名前を与えられ、わたしたち人間の元に遣わして下さったことを感謝します。わたしたちが、いつもあなたの救いに入れられますように、わたしたちがこのイエス様によって救われる者となりますように。

〈やってみよう〉**～名前あて～**

- ・カードなどに動物の絵を描き、その名前を当てる。
- ・動物図鑑などで動物の絵を示してもよい。
- ・特に名前がその動物の姿形を現しているものを選ぶと良い。
- ・植物、野菜、乗り物、人名など、名前の由来や意味を考えながらやってみよう。

〈暗証聖句〉 マタイ1章21節

マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。

す。私たちの身代わりになってくださった方、私たちが罪から解き放ってくださる方、私たちに命を与えてくださる方、それがイエス様、救い主なのです。

〈ねらい〉

イエスという名が「主は救い」という意味があり、その名を唱えるとき、私たちは何を思うべきかを知る。

〈祈りましょう〉

イエスさま、という名前がすきになりました。わたしをどんな罪からもすくいだしてくださるイエスさま。このうつくしい、すばらしい名前をけっしてわすれない子どもにしてください。アーメン。

〈展開例〉

人は、誰でも名前があります。名前には意味があります。イエスは「主は救い」という意味です。「イエス様」と口に出しているとき、思うとき、イエス様が救い主であることを思うべきです。「イエス」は記号ではありません。Aの箱、Bの箱のように箱を区別するための記号ではないので

〈答えてみよう〉

- ①イエスというお名前は何を意味しますか。マタイ1:21
- ②神さまの前でなされる罪とはどんなことでしょうか。

〈やってみよう〉

～イエスさまのお名前は？～

イエスさまって聖書で何とよばれているんでしょう。ヒントをみてね。

①

②

③

④

⑤

ヒント

あ い う え お

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

1 2 3 4 5

答 ①すくいぬし ②インマヌエル ③かみのこ ④ダビデのこ ⑤キリスト

〈聖書をさらに深く〉

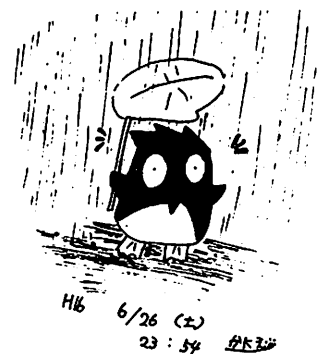
1. クリスマスの出来事が記された福音書はどれでしょうか。マタイとルカです。どちらも、天使が「その子をイエスと名付けなさい」と告げたことを記していますが、マタイの方は特にそこで、そのイエスさまが民を罪から救うということを記しています(ルカの方では、王座、支配ということが強調されています)。「イエス」とはまさに、「主は救い」という意味なのです。マタイとルカのクリスマス物語を読み比べながら、共通点とそれぞれの特徴を見つけてみましょう。
2. 「インマヌエル」という言葉も、マタイの方に出てきます。「神は我々と共におられる」という意味です。神さまは、マリアとヨセフと共にいてくださったように、私たちとも共にいてくださいます。神さまが共にいてくださることを実感できているでしょうか。

〈教理を響かせるために〉

1. 自分の名前の意味について知っている人はいるでしょうか。あるいはもう、いつか自分の子供にはこんな名前を付けたいと考えている人はいるでしょうか。名前には意味が込められているものです。「イエス」という名前には、ヘブライ語で「主は救い(罪からの救い主)」という意味がありました(英語の yes ではありません!)。そして、それは、神さまご自身が与えられた名前であり、イエスさまはその名の通りに生きられました。イエスさまの名前の意味を説明することが、そのまま聖書の内容を説明することになります。イエスという名前は知っていても、聖書のことを知らないお友達に、そのように説明してあげることができるでしょうか。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

- 1日(月曜日)
コリントの信徒への手紙二3章1~6節
Q. 文字は殺すが、霊はどうする?
 - 2日(火曜日)
コリントの信徒への手紙二3章7~18節
Q. 主の霊のおられるところには何がある?
 - 3日(水曜日)
コリントの信徒への手紙二4章1~6節
Q. わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、誰を宣べ伝える?
 - 4日(木曜日)
コリントの信徒への手紙二4章7~15節
Q. わたしたちは宝を何に納めている?
 - 5日(金曜日)
コリントの信徒への手紙二4章16~18節
Q. 外なる人は衰えても、内なる人はどうなっていく?
 - 6日(土曜日)
コリントの信徒への手紙二5章1~10節
Q. 目に見えるものによらず、何によって歩む?
- 心に残った言葉を書き出してみよう。



テキスト マタイによる福音書16章13～20節

(1) イエスの問いかけと弟子たちの答え1

「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」との弟子たちに対する主イエスの問いは、人の評判を気にしての問いではありません。これは16章5節以下のところを受けて、弟子たちに主イエスを正しく理解させる意味があったようです。それで、21節では「このときからイエスは」ご自分の受難と復活を「打ち明け始められた」とことの次第を記しているのです。

この問いに対して弟子たちは洗礼者ヨハネというものもあれば、主の来臨の先駆者のエリヤだという人もいれば、エレミヤだと言う人もいと答えるのです。人々の評判は様々であっても、皆一様に「預言者の一人」という理解であったのです。

(2) イエスの問いかけと弟子たちの答え2

このような人々の評判を聞いた後、主は「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」との問いをなさいます。それに対して、ペトロが弟子たちを代表して答えるのです。その答えは預言者でもなく、先駆者でもない全く異例のものでした。彼の答えは、人々の評判とは全く関係なくなされた「あなたはメシア、神の子です」との告白だったからです。この立派な告白をしたペトロでしたが、主がメシアとしての道を示し始められると、いさめ始めるのです。彼をはじめ弟子たちは主イエスによって主イエスをメシアと告白するように導かれるものの、その深い意味を理解していなかったのです。彼らがそれを理解するのは、主の受難と復活の後のことだったのです。彼らは復活の主と出会い、集まって祈り、「あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをこ

とごとく思い起こさせてくださる」聖霊を受けてからのことだと福音書や使徒言行録は記しています。

(3) 主イエスを正しく告白するために

主イエスを正しく理解し告白するためには、主イエスからの問いかけによる導きを受けなければいけません。また、人々の評判と違って「あなたはわたしを何者だと言うのか」という問いに対する自分自身の答えをなさなければならないのです。そして、ご自分のことを「打ち明けられる」主イエスの教えに聴き、復活の主イエスに出会い、聖霊の導きを受けなければならないのです。なぜなら「生ける神の子キリストです」との告白も、主イエスが「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」とおっしゃるとおり、父なる神様の啓示によるからなのです。つまり、主を正しく理解し告白するためには御自身を啓示してくださる聖霊なる神様のお働きなくしてはあり得ないのです。

(4) 父の啓示

旧約の預言書によれば「主の日」とは神が御自身を顕現される日のことを指します。メシアはその神の顕現そのものです。「生ける」とは「死せる」異教の神々に対する表現で、人間の手で動かされなければ移動することもできない偶像に対し、動きと働きかけがあること、人を救うことができることを意味します。イエスは私たちを導き、私たちに働きかけ、私たちを救う「メシア」であり、まさに「天の父」が私たちに現してくださった「生ける神の子」なのです。 (春名義行)

子どもカテキズム

問23 主イエス・キリストとお呼びするのはなぜですか。

答 イエスとはお名前で「罪からの救い主」、キリストとはお働きを表し、「神さまから油を注がれた方」という意味です。このお方が私たちの主として与えられました。ですから、私たちは、喜びと感謝をもって主イエス・キリストとお呼びするのです。

参考教理問答 『ジュネーブ』34-36、『ハイデルベルク』31,33、『ウ大教理』42

〈神さまから油を注がれた方〉

「キリスト」とは、主イエス・キリストの名字や姓ではありません。「油を注がれた者」という意味のヘブル語「メシア」のギリシア語訳です。

旧約時代のイスラエルにおいて、預言者と祭司と王は、主なる神がお立てになる特別な職務であり、神によって聖別されることが必要でした。そのため、聖別のしるしとして、頭に香油を注がれて、預言者と祭司と王の職務に任命されました。油を注がれるとは、神の御霊がその人にとどまり、神の特別な賜物がその人に与えられることを表すしるしです。「メシア」「キリスト」は、神によって立てられた特別な職務を表す言葉です。

〈真実のメシアなるお方、キリスト〉

主イエスは、神の特別な職務を果たすために、三位一体の神によって地上に遣わされました。主イエスは、神の御子であり、神と等しいお方、まことの神であるお方です。そのお方がへりくだってまことの人となり、罪なき生涯を歩み、「キリスト」の職務を成し遂げてくださいました。この主イエスこそ、旧約の預言者たちとは比べることができない、完全な真実の「油注がれた者」であり、まったき「メシア」「キリスト」です。

主イエスは公生涯のはじめに洗礼をお受けになりました。その時に、神の霊が鳩のように主イエスの上に降り、また天から「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声がしました(マタイ3:16-17)。この出来事が、主イエスが神

の御子であること、また「メシア」「キリスト」であることのしるしです。この方こそが、真実のキリストなるお方です。

ペトロをはじめとする弟子たちには、この「主イエスこそキリストである」という信仰を告白することが、神の恵みとして与えられました(マタイ16:16)。この告白に立たせられるということこそが、神の恵みであり、救いです。この信仰告白は、主イエス・キリストの人格と御業に基づいています。このキリストの上に、またこの信仰告白の上に、キリストの教会が建てられるのです。

〈キリストの職務〉

「油を注がれた者」キリストの職務について、旧約の伝統にならって、預言者と祭司と王の職務から考えることができます。子どもカテキズム問25~27は、この側面から、主イエス・キリストの御業について告白しています。イエス・キリストが預言者と祭司と王であるとは、言葉を替えると「イエス・キリストこそ主である」ということにほかなりません。イエス・キリストは、まことの神にしてまことの人であり、私たちに神を示し、御自身をささげて私たちの罪を償い、執り成してください、また私たちを神の恵みのもとに治めてくださるお方です。このお方が、私たちの主として与えられています。このことを心から喜び、感謝するのです。この方のほかに、私たちの救いは与えられていません。ただこの方お一人が、私たちの「キリスト」「救い主」なのです。(望月 信)

テキスト マタイによる福音書16章13～20節

カテキズム 子どもカテキズム問23

(単元のねらい)

前回は、イエス様が「罪からの救い主」であることを学んだ。今回は、そのイエス様がキリストであることを学ぶ。この説教には、子供たちには難しい内容が含まれているが、教師の理解を深めることを意図している。実際に活用するとき、対象に合わせて自分の言葉で言い換える工夫をしていただきたい。但し、誰に語ろうとも中心ポイントは揺るがない。イエス・キリストとは、単なる名前ではない。弟子達が、また、福音記者マタイが行った信仰告白である。イエス・キリストは卓越した人ではなく、究極的な神の御子の救い主である。

「生ける神の子、キリスト」

説教題には、「生ける神の子キリスト」と記しましたが、新共同訳聖書には、「生ける神の子メシア」と訳されています。新改訳聖書・口語訳聖書では、「生ける神の子キリスト」と記されていました。メシアとキリストとは、同じく「油注がれた救い主」という意味です。メシアと呼ぼうとキリストと呼ぼうと、意味は同じです。でも、イエス・メシアではなく、イエス・キリストと呼んでいることを思うと、16章の弟子の告白は、「生ける神の子キリスト」と訳されるべきです。マタイによる福音書は、1章1節でイエス・キリストの系図と書き出し、1章16節でキリストと呼ばれるイエスがお生まれになったとその系図を締め括っています。そして、この16章になって、やっと弟子達が自分の口でイエス様のことを、「キリスト」と呼んだのです。イエスとは名前ですが、キリストとは役職名です。イエス・キリストとは、個人名と名字のような名前ではありません。「イエス様は、キリストである」という信仰告白です。

では、具体的にペトロの告白を学びましょう。イエス様は、まず、人々がイエス様のことをどのように呼んでいるかを、弟子達に問い掛けておられます。ペトロは、弟子を代表して、答えます。「バプテスマのヨハネの生まれ変わり、エリヤ、エレミヤ、預言者の一人」これが、当時の人々の回答です。どれ一つをとっても、この世の規準で

るなら、高い評価です。バプテスマのヨハネは、当時の人々から預言者と尊敬されていましたし、エリヤ、エレミヤは大預言者です。新しい預言者が表れたという認識において、人々の答えは共通しています。

今日の人々にも、あなたは、イエス様をどう思っておられますかと聞いてみたいと思います。

ヒンズー教徒のガンジーは、イギリス留学中に聖書をよく読みました。特に、「悪人に手向かってはならない」との山上の教えに感銘を受けました。そして、イエス様が、手向かうことなく、十字架で死なれた姿にその実践を見ました。多神教であるヒンズー教徒のガンジーにとって、イエス様は、神が受肉した多くの存在の一つであり、かつ、「完全な人間の美しい例」をイエス様のなかに見いだしました。「自分も悪人に手向かうことなく、死にむかって進み、平和をもたらせる」という、ガンジーの信念は、イエス様によって、深く影響を受けています。

ユダヤ人の画家マルク・シャガールは、1938年にドイツで起こったユダヤ人の会堂襲撃事件の絵を描きました。その際、焼き討ちされた会堂をバックに白い大きな十字架を描き、「ナザレのイエス・ユダヤ人の王」という表札を記しました。イエス様の十字架を思い起こさせる言葉です。昔、十字架でユダヤ人の王イエス様が殺されたように、

ナチスによって、今日も、ユダヤ人の王イエス様が苦しみを受けているというメッセージを、この絵に託しました。シャガールは、苦しむユダヤ人の象徴として、イエス様を理解し、描きました。

イエス様の時代、人々は、最大級の預言者という評価をもって、イエス様を受け入れました。今日も、それぞれの立場の人々が、イエス様のある一つの側面を見て、高い評価をあたえています。イエス様は、ダイヤモンドのように、どこから光線を当てても、驚くほど豊かに輝きます。当時の民衆の評価も、今日の他宗教の知名人の評価も、イエス様のある側面を確かに捕らえています。

しかし、イエス様は、これらの答えには満足しておられません。そして、弟子達に向って、あなた方は、私を誰と呼ぶかとお尋ねになりました。イエス様に従おうとする者に、必ず、イエス様はこの問いを投げかけられます。「私をどのように理解しようと、それはあなたの自由です」と、イエス様はご自分を投げ出されません。イエス様が満足される答えは、ペトロが弟子を代表して答えた「あなたは、メシア、キリスト、生ける神の子です」というものです。

人々の答えと、ペトロのこの答えとは、どこが違うのでしょうか。人々の答えは、神の歴史を完成する終末の前に現れる預言者を意味しています。これからも多く現れるであろう預言者の一人という意味です。また、預言者のなかでは、エリヤ程の最大級の力をもつ者であったとしても、終末の完成の先触れの預言者であり、終末の完成そのものをもたらずお方ではありません。それに対して、ペトロの答えは、「あなた以外にもはや誰を待つ必要も、期待する必要もありません。あなたこそが、あの決定的な救い主です」というものです。

また、ここに「神の子」という言葉が添えられています。イエス様が洗礼を受けられたとき、天から、「これはわたしの愛する子、これに聞け」という声がありました。イエス様とは、神様との特別な関係に生きる神の子です。また、イエス様は、

神を天の父と呼んでおられる神の子です。当時の群衆やガンジーやシャガールがイエス様のなかに見たものは、この世における人々とイエス様との関わりです。しかし、イエス様を理解する上で、一番大切なことは、イエス様と父なる神様との関係です。そして、それを知ることができたのが、お弟子さんです。神の御子が、救い主としてお出でくださったのが、キリストです。

更に、「キリスト」という言葉の意味である「油注がれた者」とは、神によって任命される王・祭司・預言者である役職名を表わす称号です。また、この油注がれたお方は、旧約聖書が預言する救い主です。神の子が、神により任命され・油注がれた者として、つまり、キリストとして、私たちを救うためにお出でくださいました。そのお方が、イエス・キリストです。王として神の支配のなかに私たちを招き、守ってくださいます。祭司として神に罪の執り成しをしてくださいます。預言者として神の言葉を伝えてくださいます。神が立ててくださる救い主とは、王・祭司・預言者の三職を兼ね備えたお方です。そして、私たちを天の父なる神様と結び合わせてくださるお方です。神の御子が私たちの王となり、祭司となり、預言者となり、私たちを神様と結びつけ、神様の愛のなかで守り、育み、導いてくださいます。

イエス様の地上の生涯において、イエス様が、生ける神の子キリストであることを知ることができたのは、僅かな弟子達でした。そして、今日、私たちは、聖霊を受けて、心の目が開かれ、イエス様をキリストと呼ぶことが許されています。私たちは罪深い者ですが、王であるイエス様に守られて、祭司であるイエス様によって罪の赦しをとりなしていただき、預言者としてのイエス様を通して神様の御心を教えられています。何気なく口にするイエス・キリストという呼び名自身が、キリスト者にとっては、大切な信仰告白です。イエス様を心から「キリスト」と呼ぶことができます。恵みに感謝致しましょう。(岩崎 謙)

【今日の暗唱聖句】 マタイによる福音書16章15～16節（新改訳）

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」
シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」

〈主題〉

三つのあがないのお働き。

〈ねらい〉

わたしたちに語りかけ、罪をとりなし、すべてをまもっておられるお方を伝える。

〈展開例〉

みなさんは、イエス・キリストというお方の三つのお働きを知っていますか。一つは、「よげんしゃ」。もう一つは、「さいし」。そして、三つめは、「おう」です。わたしたちは何も神さまのこと、救いのことを知りません。でも、イエスさまは、よげんしゃとしてみことばをわたしたちに教えてくださいます。また、わたしたちには罪があります。ですからイエスさまは、さいしとしてわたしたちの罪をとりなして、神さまに近づいておいのりできるようにしてくださるのです。そして、

わたしたちは、弱いものです。この弱いわたしたちを守ってくださるのはおうであるイエスさまです。十字架にかけられてわたしたちの身代わりに命をなげうたれたイエスさまは、死んで、三日目に墓からよみがえって、弟子たちにあわれて、天に上げられました。そして、今も、よげんしゃ、さいし、おうとしてわたしたちのためにはたらいてくださっています。このお働きを信じて、いつも、お祈りしましょう。

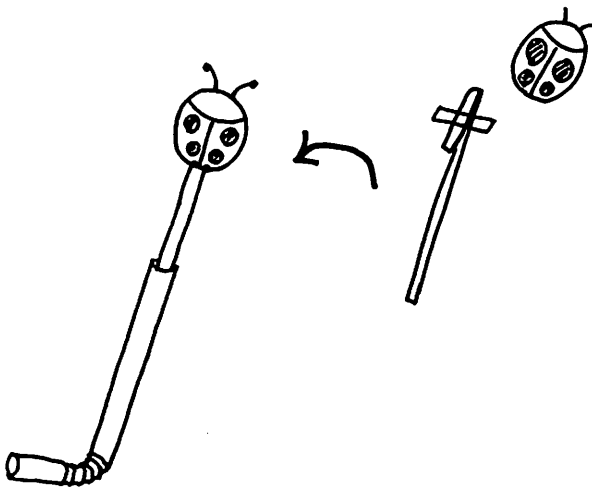
〈お祈り〉

天の父なる神さま。イエスさまの三つのお働きを教えてくださいませんか。いつも、イエスさまのまもりの中にあることを信じて、みことばに聞き、お祈りできますように。イエスさまのとういお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

～テントウムシが飛んだ～

- ①細いストローの先を折ってセロハンテープなどで留め、テントウムシの絵を描いて張る。
- ②太いストローに細ストローを差し込む。
- ③太いストローを吹いて、テントウムシを飛ばして遊ぶ。



〈ねらい〉

油注がれた者「キリスト」の称号が素晴らしいお方の称号であることを示す。三職へのつながりを持たせる。

〈分級教師へのアドバイス〉

説教展開例で示されている、神の御子、救い主としてのキリストの称号の理解については、あえて取りあげておりません。子どもたちの説教への理解に応じて、説教を補うか、さらに展開するかを選べばよいと思います。ただし、救い主の神性について触れるのであれば、逆に三職への展開は省いたほうが内容が散漫にならないでしょう。

〈展開例〉

①みんな、お父さんやお母さんが、会社に行くときとかお出かけする時とか、頭に何かついたり、いい香りのする香水を付けたりしているのを見たことがある？

(回答例)

・ある

②教会に来る時もお化粧するよね。イエス様の時代はね、整髪料とか香水とかそんなのはなかったから、良い香りのする油を頭に付けたんですよ。お客さんがいらっしやった時なんかは、お客さんの頭に油を付けるんです。

・きたない

・べとべとする

③いまみんながお台所にある油を頭にかけてたら大変だけど、昔はそういう油があったの。

④その油は、素晴らしい、偉い、大切な方にも注いだんですよ。例えば、国を治める王様とか、礼拝をささげる祭司さんとか、神様の言葉を伝える預言者さんとか、そんな人たちを「油注がれた者」と呼んだんです。

⑤イエス様も、油注がれた者だから、「キリスト」って呼ばれるんだよね。ってことはイエス様は、王様よりも偉くて、祭司さんよりも優しく、預言者さんよりも賢いんだよ。すごいわね。

⑥イエス様が、王様よりも祭司さんよりも預言者さんよりもすごいから、わたしたちはイエス様のことを「キリスト」って呼ぶんですよ。

〈祈り〉

天の父なる神様、イエス様が、わたしたちの救い主であることを感謝します。王よりも偉く、祭司よりも優しく、預言者よりも賢いキリストがおいでになることを、心から感謝します。どうかわたしたちが感謝を込めてイエス様を「キリスト」と呼びすることができるようにしてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。



〈暗証聖句〉 マタイ16章16節

シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。

〈ねらい〉

イエス・キリストのキリストの意味を知る。

〈展開例〉

イエス・キリストの「キリスト」の意味は「油注がれた者」という意味です。イスラエルでは、国を支配し治める王様になるとき、罪をとりなす祭司になるとき、神の言葉を伝える預言者になるとき油（オリーブ油）を頭に注ぎました。それは、神様のために特別に分け離すという意味です。神様のために、特別に選ばれその職務に任命されるのです。イエス様は真の王、真の預言者、真の祭司です。王様として、神様の支配の中に私たちを招き、祭司として神様に罪のとりなしをしてくだ

さり、預言者として神の言葉を伝えてくださいます。私たちが「イエス・キリスト」というとき、「王、祭司、預言者である救い主」と言っているのです。イエス様はどんな方ですかと尋ねられたら、思い出してください。

〈折りましょう〉

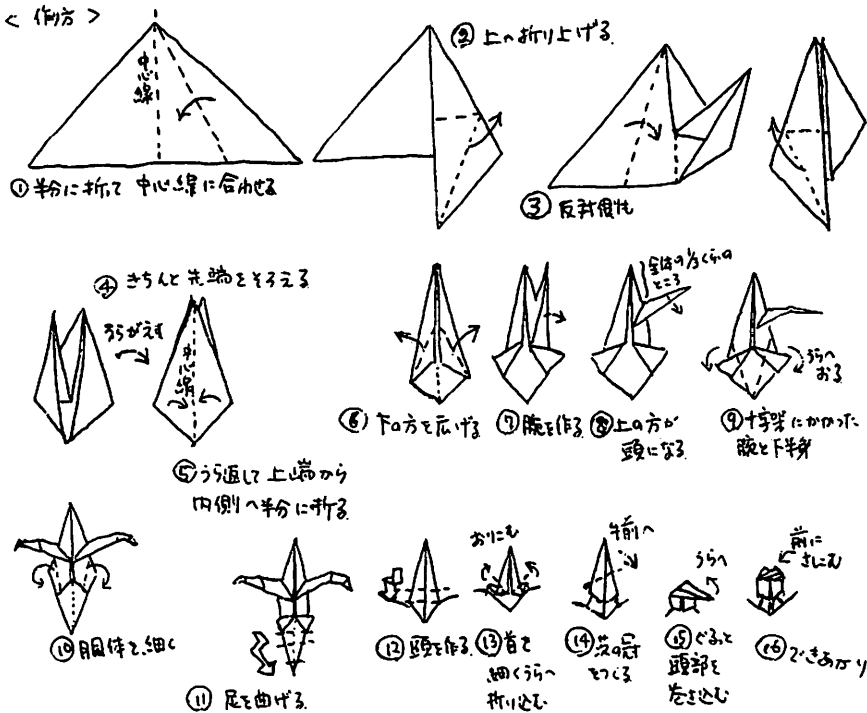
イエスさまはキリストだと、学びました。イエスさまこそわたしのほんとうのすくい主です。だから、わたしはイエスさまをキリストと信じます。どうか、この信仰によって、わたしをお救いください。アーメン。

〈答えてみよう〉

- ①人々はイエスのことを何者だと言っていたか。マタイ16:14～
- ②弟子たちは何者であると言ったか。マタイ16:16～

〈やってみよう〉

～折り紙のキリスト～ 〈用意するもの〉 三角の紙（人数分）



〈聖書をさらに深く〉

1. 教会に来ていないお友達は、イエスさまというお方を知っているでしょうか。また、知っているお友達は、イエスさまをどういう人だと思っているでしょうか。キリスト教の教祖？ 偉い人？ 不思議な力を持った人？ いろいろなイメージがあるでしょう。それでは、あなたはイエスさまのことをどうのお方だと思っているでしょうか。イエスさまは確かに立派な人でしたが、他の偉い人たちと同列に並べるのでできない特別なお方でした。イエスさまは、「メシア（キリスト）、生ける神の子」なのです。教会に来ることの意味は、イエスさまをそういうお方として知り、信じることができるということです。イエスさまは、他の人がどのように考えるかではなく、あなたがどのように考えるかを聞いておられます。ペトロが答えたように、私たちもはっきりと答えることができるでしょうか。

〈教理を響かせるために〉

1. 「イエス」を苗字、「キリスト」を名前と思っている人はいないでしょうか。「イエス」は名前ですが、「キリスト」は「油を注がれた者」（具体的には預言者・祭司・王）という職務を指す言葉であることを確認しておきましょう。ですから、イエス・キリストと呼ぶことは、イエスさまはキリストです、と呼び、告白していることにもなるのです。
2. あなたにとって、イエスさまはどのような存在でしょうか。孤独なときの友達？ 大切なことを教えてくれる先生？ 病気を治してくれるお医者さん？ どのイメージもすばらしいものです。しかし、何よりも、イエスさまはキリスト、私のために罪からの救いの仕事をしてくださったお方という信仰を持ちましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

8日（月曜日）

コリントの信徒への手紙二 5章 11～15節

Q. 何がわたしたちを駆り立てている？

9日（火曜日）

コリントの信徒への手紙二 5章 16～21節

Q. キリストと結ばれる人はだれでも、どうい
者？

10日（水曜日）

コリントの信徒への手紙二 6章 1～13節

Q. 今や、何の時？ 今こそ、何の日？

11日（木曜日）

コリントの信徒への手紙二 6章 14～18節

Q. わたしたちは生ける神の何？

12日（金曜日）

コリントの信徒への手紙二 7章 1～7節

Q. 誰の到着によって慰められた？

13日（土曜日）

コリントの信徒への手紙二 7章 8～16節

Q. 神の御心に適った悲しみは、何を生じさせる？

○心に残った言葉を書き出してみよう。



テキスト マタイによる福音書27章45～50節

(1) イエスの死

マタイはこのところで「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」との主イエスの悲痛な叫びを記し、十字架の意味を読者に伝えようとしています。

神様に向かって生きるものであるはずの人間にとって神様から見捨てられるというのは想像を絶する絶望と恐怖なのです。主は十字架の上でその絶望と恐怖を感じられたのです。神様から見捨てられるのは「その日、この民に対してわたしの怒りは燃え、わたしは彼らを捨て、わたしの顔を隠す」(申命記31章17節)と神様がおっしゃっておられるとおりの罪人なのです。しかし、主イエスには罪はないのです。そうであるにもかかわらず、主イエスは神に見捨てられたというのです。十字架の死は刑罰の死です。刑罰という以上そこで罪が裁かれたのです。この刑罰の罪は主御自身の罪ではなく私たちの罪に対する裁きと刑罰なのです。そのために、主がご自分の命を罪人たちの、つまり私たちのための身代金として与えられたということなのです。

神様との分離は、罪が支払うべき値段であり、キリストはこのところで、他者のためにその代価を払ってくださっているのです。

3時間にわたって全地を覆った闇は、神様の裁きと御怒りの現れであり、神様の介入による暗黒を示しているのです。その暗闇の中での主の叫びは、まさに御自身の絶望と恐怖の実感としての叫びであったのです。十字架の上で、御父は罪に対する怒りと呪いを注ぐ審判者であり、罪なきキリストが神様から罪人とみなされ、神様の怒りと呪いを罪人に代わり一身に受けているのです。キリストの十字架上の叫びと死は、私たちの贖いのた

めの苦しみの叫びと死なのです。

(2) 居合わせた人々

マタイは十字架の場面に居合わせた人々の反応に「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」という無知な人々の姿を描いています。エリヤの登場は、終末的御国の到来の待望を意味しています。「酔いぶどう酒」を飲ませようとしたのは、エリヤにその呼びかけに応答する時間を与えるために、今ひとときイエスの苦悶を引き延ばそうとする嘲笑的な試みであったのです。その(嘲笑的)待望もむなしく終わって、主イエスは再び大声を上げて、息を引き取るのです。この最期を描くことによって、この方こそ私たちを「救いに来」た方であることを示したいのでしょう。

(3) 苦難の僕

この十字架の出来事を含め、マタイはイザヤ書で語られた「苦難の僕」としての主イエスの姿を描いています。主イエスはお生まれになったときから貧しい者、低い者、神様により頼む者であり、また彼はまさに十字架にかけられた者なのです。さらに主はすべての人から、最期には弟子たちからも見捨てられ、神様からも見捨てられ、人々にその恥ずべき姿をさらし、嘲られた者としてまさに苦難の僕なのです。主はこの十字架の最期に至るまで従順に神様に仕え、僕として私たちに仕えてくださったのです。言い換えれば、十字架の死を受け入れてくださるほどに私たちの前に謙って下さったのです。マタイはこの十字架の叫びと最期を描くことで、そのことを明らかに示しているのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問24

子どもカテキズム

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、
どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、
三日目に永遠のいのちによみがえられました。
ですから、私たちは、罪赦されて
神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

参考教理問答 『ウ小教理』27、『ウ大教理』46-50、『ハイデルベルク』43

〈神の御子のへりくだり〉

主イエス・キリストは、私たちに救いを与えて
くださったお方です。この救い主の働き、職務を
理解する枠組みが「二状態三職論」です。二状態
とは救い主の「へりくだりと高举（低い状態と高
い状態）」であり、三職論とは「預言者と祭司と
王」の職務です。神の御子イエス・キリストは、
へりくだりと高举の状態において、預言者と祭司
と王の職務を成し遂げられ、今も神の右に座して
働いておられます。

〈へりくだりの頂点、十字架〉

私たちの救いは、神と人の間の隔ての壁が仲保
者によって取り除かれることにあります。この仲
保者として、神の御子が、へりくだって、いと高
き神のみもとから地上へと遣わされ、人間の肉を
とって人となりました。このお方は、神の御子
であるにもかかわらず、人間の姿を摂（と）り、
その人間性は罪を除いては罪人である私たちの人
間性と何ら変わるところがありませんでした。父
なる神に徹底的に服従され、御父の御心になう
お方でした。神であり、人であるお方です。ここ
に、罪人の罪を取り除く仲保者が与えられました。

このへりくだりのクライマックスが、十字架の
御業です。キリストは、十字架の死に至るまで、
徹底的にへりくだってくださいました。

〈罪人のしもべ、私たちの身代わり〉

このへりくだりにより、キリストは罪人の一人
となってくださいました。キリストは御自身をさ
さげて罪人の一人となり、十字架の死を引き受け
てくださいました。私たちの身代わりとなり、罪
の償いを成し遂げてくださいました。私たち罪人
に代わってすべての罪を担って死んでくださいま
した。このキリストの十字架の御業によって、私
たちは贖われました。このキリストの御業によっ
て、神の義と愛が明らかにされました。罪を裁き、
しかし罪人を愛して罪から救い出す三位一体の神
の義と愛です（ヨハネ4：9-10）。

〈キリストと共に十字架に死ぬ〉

キリストは、この十字架の御業によって、神の
救いを私たちに提供してくださいました。今、私
たちは、キリストの霊である聖霊を与えられて、
キリストと一つにされ、キリストの体とされてい
ます。すなわち、古い自分がキリストと共に十字
架に死んだのです。私たちの罪もキリストと共に
十字架につけられて葬られました。こうして、私
たちは、罪と死の支配から解放され、罪の奴隷
からキリストの奴隷へと変えられたのです。私た
ちは、キリストと一つであり、神の子どもとされ
ているのです。 （望月 信）

テキスト マタイによる福音書27章45～50節
カテキズム 子どもカテキズム問24

〔単元のねらい〕

主イエス・キリストが「だれ」であり「何をされたか」。これは私たちの信仰の核心にかかわる事からです。「この人を見よ」というピラトの促しは、主イエス・キリストへの信仰に生きるキリスト者の、日々の願いであり喜びでもあります。十字架を語る教師自身が、主の十字架の苦難と死を、自分自身の信仰の主題として、よく黙想しつつ、子どもたちとともに十字架のイエスを見あげ、そのような祈りをこめて、説教に分級にとりくみたいものです。

「十字架上のイエスを見よ」

主イエス・キリストが十字架にかけられ、十字架のうえで大きな苦しみをあじわってくださいました。イエス様は、前の夜、ユダヤ人の指導者たちにとらえられ、大祭司によって取り調べを受けました。それだけではなく、ローマ人の総督ポンテオ・ピラトによる裁判の席にも引き出されました。一晩のうちに何度も、さばきを受けておられます。イエス様をとらえた役人やローマの兵士たちは、イエス様をからかい、こぶしてたたき、つばをかけるなど、いろいろなひどいことを続けたのです。そして、いばらで編んだ冠をかぶせて、「ユダヤ人の王、万歳」などと言って笑いものにしました。

神の子であるイエス様が、そのようなはずかしめや侮辱を、なぜ受けなければならないのでしょうか。イエス様には、そんな苦しみを受ける理由は何一つありませんでした。それは皆さんもよく知っているとおりですね。病気で苦しんでいる人を、なおしてあげました。悪霊につかれた人に、もういちど人間として生きる喜びをとりもどしてくださいましたのもイエス様です。ひとりぼっちで生きる理由も意味もわからない人に、神様のおおきな愛を伝えてくださいました。神の国が、あなたがたの中にもう来ている、というすばらしい恵みを、はっきりと指差してくださったのです。

イエス様の歩まれた姿を見れば、神様がどんなに大きな愛で私たちを導いてくださるかが分かり

ます。そのような方が、十字架にかけられているのです。イエス様の両手・両足は、十字架の木に「くぎ」で打ちつけられていました。イエス様の両手は、くぎで打たれるような悪いことをしたでしょうか。いいえそうではありません。その両手は、いつも人々を助けるために精一杯つかわれたのです。おなかをすかせた人々にパンを裂いてくださった手です。子ども達の上に、その手をおいて祈ってくださいました。病気で起き上がれない人の手をとってくださいました。最後の晩餐のとき、イエス様は立ち上がって、弟子たちひとりひとりの足を洗ってくださったことも、皆さんは覚えているでしょう。

イエス様の足は、くぎで打たれるような罰を受けるべきでしょうか。けっしてそんなことはありません。イエス様は、その足でどんなところへも出かけて行き、困った人々を見出しては神様の恵みを知らせてくださいました。神様の愛を伝えるために、歩きつづけてくださったのです。そのような両手・両足が、どうして十字架にくぎで打ち付けられなければならなかったのでしょうか。それこそ謎です。

今日のカテキズム24問で、こう言われています。「主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に」。イエス様は、私たちの身代わりとして、十字架につかれたのです。イエス様のような正しくきよい方が、なぜ十字架であ

のような苦しみを受けなければならなかったか。イエス様のような方が、どうして兵士たちや役人から、あのようなはずかしめと侮辱を受けてくださったか。その謎にはちゃんと答えがあります。私たちひとりひとりの身代わりでした。ほんとうは、このわたしが、そして皆さんひとりひとりが、そのような苦しみを受けても仕方ないのです。

すこし前のカテキズムを、思い出していただきたいのです。18問では、このように学びました。「罪を犯した人間はどのようにになりましたか」。「神さまとの交わりを失い、生きているあいだも、死んだあとも、神さまの怒りを受けなければならなくなりました。ですから、心が曲がって、自分中心になり、お友だちとけんかをしたり、うそをついたり、盗んだり、悪いことをしてしまうのです」。私たちの心が曲がってしまいました。ほんとうに悲しいことです。けれどもそれはほんとうのことですね。自分のことしか考えることのできない、狭い心になっていることは、だれでも「ほんとうにそうだ」と認めるほかないですね。神様は、大きな愛の神さまですが、罪を嫌う神さま、ただしく清い神さまです。

このような清くただしい神さまの前に、私たちはどのように生きることができるでしょうか。神さまの怒りを受けているままでは、とても元気なあかるい生活を続けることはできませんね。私たちの心から、うそや、怒りや、憎しみなどの思いがいつも出てくるのは、罪のはたらきなのです。この罪をゆるしていただくのでなければ、人はただしくきよい生活を求めることもできず、友だちを本気で愛したりゆるしたりすることもできません。

イエス様は、そのような私たちに代って、十字架についてくださいました。十字架の上でイエス

様が叫ばれた言葉が、今日の聖書に記されています。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」。なんと悲しい叫びでしょう。イエス様は、天におられるまことの神様の独り子です。その父である神さまが、なぜ独り子であるイエス様を見捨てられるのでしょうか。それが「身代わり」ということですね。私たちに代って、イエス様が、神さまから捨てられ、神さまの怒りを受けてくださった。それが十字架の苦しみなのです。

昼の12時から午後3時まで、全地が暗くなったと聖書に書かれています。イエス様が天を見上げると、そこは真っ暗だったのです。いつも見上げれば、天の父である神さまを見つめることができたイエス様。そのイエス様の上で、天が閉ざされて真っ暗になっているのです。これが神さまの怒りです。神さまの怒りを、イエス様がひとりで受けくださいました。父である神さまの心に、どこまでも従ってください、私たちの罪がゆるされるため、私たちに死と裁きでなく永遠の命を贈るために、十字架での苦しみを受けてくださいました。

神さまとイエス様のつながりは、切れてしまったのでしょうか。そうです、しばらくの間ですが、神さまは確かに独り子イエス様を見捨ててしまわれました。でもそれは、私たちの罪がまったくゆるされ、永遠の命への道が開けるために、どうしても必要なことでした。そして神さまは、イエス様の真剣な、命がけの愛を喜んで受け入れてください、3日目に、死人の中からよみがえらせてくださったのです。十字架にかかり、復活されたイエス様こそ、私たちがほんとうに勇気をもって生きるための、友であり兄弟です。 (小野静雄)

[今日の暗唱聖句] マタイによる福音書27章46節

三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

〈主題〉

キリストのまずしさ。

〈ねらい〉

キリストのまずしさを知って、お互いにゆるし合う者となろう。

〈展開例〉

みなさん、イエスさまがお弟子さんの足を洗われたことを知っていますか。イエスさまは土ぼこりでごれたお弟子さんの足をひとりひとり洗われたんです。それは、食事の席でのしゅうかんでした。しかも、それは、しもべというまずしい人のしごとでした。それをイエスさまが、手ぬぐいをとって、たらいに水をくべてなされたものですから、お弟子さんたちはとってもおどろきました。「せんせい、そんなことをしないでください」と

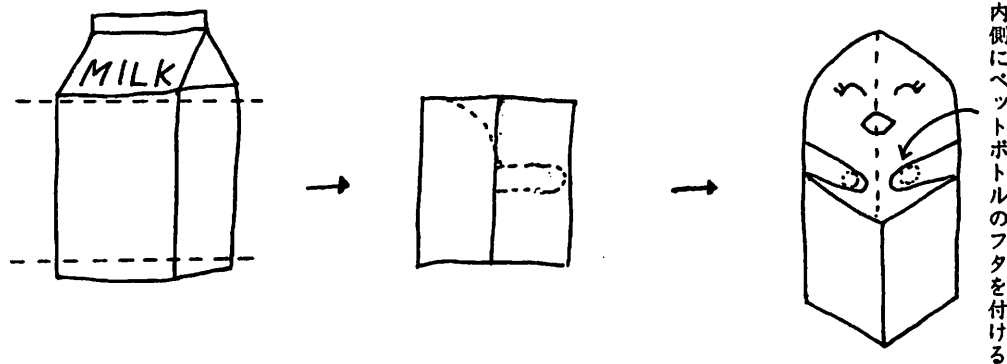
ベトロはさげびました。でも、イエスさまがなされたことは、じつは、弟子の足のよごれを洗い清めるように、弟子たちの罪をぜんぶ洗い清めることを教えてくださったのでした。ですから、イエスさまのまずしさを知るとき、わたしたちは、罪を洗い清められて、神さまに近づくことができます。それは、ただ、イエスさまが十字架上でそのお体をわたしたちのためにささげてくださったからです。お互いに、ゆるしあい、まずしさを認めあうほんとうのゆたかさを知りましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。イエスさまのまずしさを教えてくださいありがとうございます。どうか、イエスさまのまずしさを知って、お互いにゆるし合う人にして下さい。イエスさまのとうといお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

～ペンギンさんのカスタネット～



- ①牛乳パックの上と下を切り取る。
- ②牛乳パックを二つ折りにして、点線のように切り取る。
- ③手の部分の内側にペットボトルのフタを取り付ける。
- ④ペンギンの顔を描こう。
- ⑤両手でペンギンの手を合わせて、カスタネットのようにならす。

〈ねらい〉

キリストの十字架が、わたしたちのための犠牲であり、それは本当に悲惨なところにまでへりくだってくださった業であることを伝える。

〈分級教師へのアドバイス〉

十字架は、その痛みと苦しみと恥辱が絶望にまで極まる刑罰です。あまりグロテスクになるのはふさわしくないのかもしれませんが、想像の世界のきれいな事にしてしまうのではなく、現にわたしたちの身代わりとなったキリストの悲惨さに目を向けることが、そこにへりくだってくださったキリストのわたしたちへの愛を鮮やかにさせます。

〈展開例〉

①みんなは、十字架ってどんなのだから知ってるかな？

(回答例)

- ・教会の上に付いてる。
- ・ペンダントにしてる。
- ・献金の袋に付いてる。

②みんなそうやって飾りにしているけど、十字架って、最初は死刑の道具だったんですよ。

③イエス様は大きな大きな十字架に、こんな太い釘で手をコーンコーンと打ち付けられちゃったんです。痛かったでしょうね。

④しかもみんなにバカにされて、叩かれて、悪口

を言われて、死刑にされちゃったんです。どうしてだと思う？

⑤それは、本当だったら、わたしたちがそうやって神様から罰を受けなければいけなかったんですよ。〇〇君も、※※さんも、先生も、みんな本当は、神様から罰を受けなければならなかったのに、イエス様とその代わりに十字架について苦しんで苦しんで死んでくださったんです。だからわたしたちは、そんな罰を受けなくて済んだんですよ。

⑥どう思う？ みんなが誰かの代わりにそんな罰を受けてくださいって言われたらいやでしょ？

- ・いやだ
- ・平気

⑦実は、イエス様も十字架にかけられるのは痛くて辛かったけれども、大切なわたしたちのために苦しんで苦しんでくださったんです。そのおかげで、わたしたちは悪いことをした罰を受けなくて良くなったんですよ。

〈祈り〉

天の父なる神様、イエス様がわたしたちのために、この地上に生まれ、苦しみを受け、十字架にかかってくださったことを感謝します。わたしたちが、この十字架によって命を頂いていることを感謝します。イエス様の御名によってお祈りします。

〈暗証聖句〉 マタイ27章46節

三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

〈ねらい〉

イエス様は「だれ」であり、「何をなさったか」のか、自分の言葉で言えるように。

〈展開例〉

神様であるにもかかわらず、イエス様は、私たちと同じ「人」となられたことによって、御自分を低くされました。罪を犯されなかったことを別にして、私たちと全く同じ人間となられたのです。そして、父なる神様に完全に従われました。神様の御言葉を宣べ伝え、病人を癒し、子どもの頭に手を置いてくださるやさしい方でした。私たちが犯した罪の罰は、本来私たちが受けるべきですが、私たちの代わりにイエス様が罰を受けられたのです。その罰とは、裏切られ、さげすまれ、最も苦しくて、恥ずかしく、惨めな十字架の死、そして何より、父なる神様に見捨てられたことです。神

様に完全に従ってこられたイエス様の、神様に見捨てられる苦しみは大きすぎて、私たちには、ほんの少ししか理解できません。しかし、イエス様のおかげで私たちは神の子とされ、真の永遠の命をいただくことが出来るのです。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」。十字架の上のイエス様の言葉をいつも思い出しましょう。

〈祈りましょう〉

イエスさまが、十字架でうけてくださったくるしみを目とじて思います。わたしを愛するために、こんなくるしみを受けてくださったイエスさま。わたしからはなれず、ともにいてください。アーメン。

〈答えてみよう〉

- ①「エリ・エリ・レマサバクタニ」とはどういう意味ですか。
- ②主イエス・キリストは私たちのためにどんなく苦しみにあわれましたか。
- ③なぜイエスさまはこのような苦しみにあわなければならなかったのですか？

〈やってみよう〉

～十字架の上で～ (図版は129ページに掲載しています。)

暗号をといて、イエスさまが十字架の上でおっしゃったことばを書いてください。

8つのことばが出てくるよ。

(ヒント) 1字おきに読んでみて。迷路になっているから気をつけて。

(こたえ) ①おんなのかた そこに あなたのむすこがいます。

②そこに あなたの ははが います。

③ちちよ かれらを おゆるしてください かれらは なにをしているのか じぶんで わからないのです。

④まことにあなたにつげます。あなたは きょう わたしとともに ばらだすにいます。

⑤わがかみ わがかみ どうして わたしを おみすてに になったのですか。

⑥わたしは かわく。

⑦かんりょうした。

⑧ちちよ わがれいを みてに ゆだねます。

〈聖書をさらに深く〉

1. 身近な人の死に接したことがあるでしょうか。それは平安な死だったでしょうか、苦しい死だったでしょうか。死の迎え方にもいろいろな姿があります。それでは、聖書に出てくるイエスさまの死の姿はどのようなものでしょうか。暗闇、叫び声、あざけり、そこに出てくる光景を思い浮かべながら、自由に考え、話し合ってみましょう。
2. 悲惨な死、かわいそうな死というイメージが思い浮かぶでしょうか。そのような中で、イエスさまの死が、神さまから見捨てられた裁きとしての死であったこと、そして、それは私たちの身代わりとしての死であったことに考えの焦点を合わせていきましょう。イエスさまは多くの働きをされましたが、最も重要な働きは、十字架上で死なれることだったのでした。

〈教理を響かせるために〉

1. キリストの謙卑・へりくだりという言葉覚えましょう。弟や妹がいる人の中で、いばったり、命令ばかりしたりしている人はいないでしょうか。自分より低い立場の人に自分を合わせて優しくするということは、なかなか難しいことです。しかし、イエスさまは、神さまでありながら、神さまより低い立場の人間と同じ姿になられ、さらに、罪人が歩むべき低い状態を味わってくださったのです。それは、罪人を裁くためではなく、教すためでした。
2. 使徒信条をもう覚えているでしょうか。その中で、「主は聖霊によりて宿り」から「十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり」が、イエスさまの謙卑・へりくだり（低い状態）です。イエスさまの深い愛を覚えながら、使徒信条を覚え、告白してみましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

15日（月曜日）

コリントの信徒への手紙二 8章 1～7節

Q. どこに与えられた神の恵みについて知らせている？

16日（火曜日）

コリントの信徒への手紙二 8章 8～15節

Q. 主の貧しさによって、あなたがたはどうなる？

17日（水曜日）

コリントの信徒への手紙二 8章 16～24節

Q. 主の前だけでなく、誰の前でも公明正大にふるまうべき？

18日（木曜日）

コリントの信徒への手紙二 9章 1～8節

Q. 惜しまず豊かに蒔く人は、何も豊か？

19日（金曜日）

コリントの信徒への手紙二 9章 9～15節

Q. 施しは、何を引き出す？

20日（土曜日）

コリントの信徒への手紙二 10章 1～11節

Q. わたしたちの戦いの武器は何？

○心に残った言葉を書き出してみよう。



テキスト 使徒言行録1章6～11節

(1) 御国の建設

復活の主イエスの顕現と「神の国」についての教えが使徒たちを再び集めます。同時にこの「神の国について話された」ことと約束の霊がまもなく授けられるという指示が使徒たちに、イスラエル再建の終末的期待を持たせたようです。

主イエスは彼らの問いをすべて否定されたのではなく三つの訂正が加えられています。まず、神様だけが世の終わりまでの期間と最後の出来事の時をお決めになるのであり、前もって知りたいとの気持ちは好奇心にすぎず、無意味であることを示されます。次に、イスラエル再建は確かに始まっているけれども、それは偏狭な民族主義に留まるのではなく「ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで」の全世界的な領域で行われるのです。

第三に、御国の「建て直し」は神様の主権と御力で行われ、その「時や時期」は私たちの「知るところではな」くすべて「父がご自分の権威をもってお定めになっ」ているのですが、しかし「証人」の証しによってそれがなされることが語られます。つまり、その建て直しのために人が用いられるということなのです。その証人は「わたし（イエス）の証人」であると語られるのです。しかし、その証人は人間の知恵によって語るのではなく、約束の聖霊が与えられ、力を受けてであると言われるのです。御国の再建に人間の力による手助けが必要であるかのように見えるのですが、人間の力によるのではなく、人間に賜物を与えられる神様の主権と力によってこそ、神の国が再建されるのです。

(2) イエスの昇天

主イエスは、世界宣教への任務とその賜物が聖

霊を通して与えられることを語られた後、「彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えな」りました。復活の主の顕現は、その場に突如として現れたり、また、見えなくなったりしました。ですから、このような目に見える形での昇天には意味があるのです。「話し終わると」天に上げられたという点にその意味が表されています。つまりこのことによって神様の主権によってなされる神の国の「建て直し」は、主イエスの昇天によって開始されることが明らかにされるからです。ルカ福音書では、主イエスが祝福をなさりながら上げられていく姿が描かれています。主による御国の「建て直し」の働きへの召しと祝福は切り離せないものなのです。そして、この祝福をなさって昇天なさった主イエスは、昇天後も使徒たちの活動を支配なさるのです。昇天なさった主は使徒たちの地上での活動を支配なさるだけではなく、私たちの手の届かない「天」をも、すなわちすべての被造世界がイエスの下に置かれています。まさに「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」（マタイ28章18節）ことが、この昇天によって明らかに示されているのです。昇天によって主イエスはこのようにして神様の右の座に着かれ、神様の御栄光のお姿を回復なさるのです。

(3) イエスの再臨

「白い服を着た二人の人」は復活の時に現れた天使を指すものと思われます。昇天に加えて「天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」と、主の再臨のことが教えられます。このときこそ、神の国が完成するときなのです。
(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問24

子どもカテキズム

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、
どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、
三日目に永遠のいのちによみがえられました。
ですから、私たちは、罪赦されて
神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

参考教理問答 『ウ小教理』28、『ウ大教理』51-57、『ハイデルベルク』45

〈高く挙げられたキリスト〉

主イエス・キリストは、へりくだって十字架に死に、葬られ、三日目に復活されました。そして、40日間、弟子たちをお教えになったのち、天に上げられ、栄光をお受けになりました。キリストは、今も御父の右に座して、この世界を統べ治めておられます。十字架の低さから、天の栄光へ。下から上への方向性です。これが高擧です。

この高擧の中心が、キリストの復活です。キリストは、罪人の罪を担って死んでくださいましたが、決して死で終わりませんでした。キリストは死と滅びに打ち勝たれました。御父もキリストを死と滅びから高く引き上げて、神の栄光をお与えになりました。これは、キリストの勝利のあらわれであり、保証です。キリストは十字架のキリストですが、十字架において罪と死に打ち勝った復活のキリスト、勝利のキリストなのです。

〈讚美され、礼拝されるべきお方〉

この高く挙げられたキリストが、真理の御霊、慰め主、弁護者として、御自身の霊を私たちにお送りくださいました。私たちの内に聖霊が住んでくださって、私たちはキリストの体とされ、キリストに喜びと慰めを見出す者とされました。それ故に、私たちは、高擧のキリストを仰いで、三位一体の神を讚美し、礼拝します。「こうして、天

上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです」(フィリピ2:10)。

〈初穂としてのキリストの復活〉

キリストの復活は、単なる肉の体の生き返りではありません。栄光の体へのよみがえりです。朽ちる体から、朽ちることのない霊的な体へと新たにされたのです。

また、キリストの復活は、私たちの初穂としての復活です。キリストの恵みがキリストを信じる者すべてに与えられます。ですから、キリストと共に十字架に死んだ者は、キリストと共に復活させられます。いや、すでに私たちは神の子とされ、復活の命に生かされています。肉体においては、私たちの体はなお朽ちる体です。しかし、霊において私たちはすでに罪と死から解放され、復活の命に生かされ、勝利しています。私たちの肉体の死の時には、罪と完全に死別し、永遠の命へと、朽ちない体へと変えられることが約束されています。その約束を確信して、私たちは、すでにこの地上において、新しい霊的な命に生かされ、神の御心に従う者として喜びの内に歩むのです。

(望月 信)

テキスト 使徒言行録1章6～11節

カテキズム 子どもカテキズム問24

(単元のねらい)

高く挙げられる主イエス・キリスト。そのようにして贖い主としての榮譽を受けておられるキリストへの、感謝と信頼を語ることがこの単元の主眼となります。復活の出来事のなかに、いかに力に満ちた主イエスの命があふれているか。そして昇天を通して主イエスがなされる新しい御業が、どのように弟子たちと教会をはげまし、今も支えてくださっているか。天に挙げられたキリストが、けっして私たちに手の届かないかなたの存在なのではなく、日々の同伴者であることを告げる説教が求められるわけです。またこの高く挙げられたキリストこそ、子どもたちへの「牧会的かわり」の根拠であり約束であります。

「よみがえり、天にいる主イエス」

主イエス・キリストが復活されたことは、弟子たちの大きな喜びとなりました。復活されたイエス様は、40日の間、たびたび弟子たちに現れてください、ご自身が確かに生きていること、いまでも後も永遠に弟子たちに希望と力を与えてくださることを、約束してくださいました。私たちにとっても、イエス様のご復活は特別に大きな喜びですね。私たちの命は、けっして死で終わりではないのです。カテキズムでは「神と共に永遠に生きる祝福」と言われています。神様からけっして離れないで生きられるのです。ですから毎日の生活が、もう永遠の命の始まりです。そして死んだあとも、天で永遠に生きる希望があたえられたのです。

イエス様は、復活されたあと、弟子たちの前にくりかえし姿を現してくださいました。ペトロやヤコブ、アンデレやトマスのような、イエス様の弟子たちが、復活したイエス様に出会いました。それだけではなく、イエス様を信じて一緒に伝道の旅にお従いしてきた、何人もの女の人も、復活されたイエス様にお目にかかることができました。復活されたイエス様の目的は、何よりもお弟子さんたちに勇気と喜びを与えて、救い主イエスを宣べ伝える働きを始めるよう、命令を与えることでした。はじめは信じることのできない弟子たちも、何度も姿を現してくださいるイエス様に出会ううち

に、復活が本当の出来事であること、イエス様がもう永遠の命をもっておられることを確信するようになりました。

イエス様のもう一つの目的は、主イエスを失って悲しんでいる、女の弟子たちや、名前の知られていない弟子たちを励ますことです。イエス様と一緒に生きることを、ただ一つの喜びとして歩んできたのです。そのイエス様が、十字架によって突然とりさられてしまったのですから、女の人たちの悲しみは大変なものだったでしょう。そのような気落ちしている弟子たちの心を励ますためにも、イエス様は復活されたお姿を何度も現してくださいました。復活されたイエス様が、とくに弟子たちにご自分の姿を現されたのは、日曜日のことです。それで、弟子たちは、日曜日が、とくべつにイエス様にお会いできる日だと信じるようになりました。イエス様の弟子たちが、日曜日に礼拝のために集まるようになったのは、そのためだと言われています。私たちも、日曜日の礼拝にあつまるたびに、いまでも復活されたイエス様を囲んで礼拝することができるのです。

こうしてくりかえし復活のお姿を現してくださいしたイエス様は、40日目に、弟子たちから離れて天に上げられました。さあ、弟子たちはこれからどうなるのでしょうか。イエス様から離れて、

自分たちだけで信仰の歩みができるのでしょうか。そうではありません。弟子たちから離れて天に上げられるとき、イエス様はひとつの大切な約束を与えてくださったのです。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」という約束です。弟子たちはけっして、一人ぼっちで取り残されるわけではありません。イエス様は、けっして弟子たちを見捨てるようなことはなさいません。イエス様の姿は見えなくなりますが、そのかわりに、聖霊という弁護者、助けぬしが与えられることをちゃんと約束して行かれました。

イエス様は、弟子たちの見ている前で、栄光に つつまれて天に昇ってゆかれました。イエス様は、天の父である神さまのもとに行かれたのです。使徒信条という言葉、みなさんも礼拝で大人の人たちと一緒に唱えていますね。そのなかに、「三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり」という少しむずかしい言葉があるでしょう。イエス様は、全能の父である神さまともにおられます。そこで、イエス様は、どうしておられると思いますか。地上でのお働きを終えて、もう何もすることなく休んでおられるのでしょうか。けっしてそうではありません。イエス様は、いまでも働き続けてくださいます。神のみ国が完成するために働いておられます。私たちひとりひとりの毎日の生活を、イエス様はいつも見守っておられます。悪魔の力が、私たちを攻撃することがないように、そして教会が喜びをもってイエス様の言葉を信じ、そしてイエス様の愛を宜べ伝えることができるように、祈りとりなしを、続けてくださっています。ですから、私たちは、ひとりであるときも、みんなであるときも、いつでもイエス様を中心にして生きることができるのです。

「地の果てにいたるまで、わたしの証人となる」

とされています。これはどういうことでしょうか。証人というのは、イエス様の恵みとイエス様の勝利を、人々にあかしする人のことです。イエス様が、十字架について私たちの罪の身代わりとなられたことをあかしするのです。復活して永遠の命を、私たちにくださったことを証言するのです。ですから、イエス様の証人になるには、私たち自身が、イエス様の復活という恵みと勝利を、心から信じていることが、なにより大切なことですね。

考えてみてください。私たちがイエス様のことや聖書のことを知るようになったのは、どのようにしてですか。私たちのことを祈ってくれた人がいるのです。皆さんのお父さんやお母さんだったかもしれません。日曜学校の先生たちも、皆さんのために祈りました。「あなたはけっして一人ぼっちではないですよ。神さまはあなたのことをとても愛してくださっていますよ。イエス様と一緒に生きるならば、何もおそれることはないのです……」。そのように心からイエス様の恵みを伝えてくれる人がいたので、わたしも教会に来ることができました。そして、こんどは私たちが、イエス様の証人になることを、イエス様はつよく願っておられます。

私たちは小さくても、イエス様はいつでも私たちと一緒に働いておられますから、なにも心配りません。何かこまったことがあれば、イエス様に打ち明ければよいのです。こまったこと、心配なこと、うれしいこと、感謝すること、どんなことでもイエス様は私たちの祈りの声に耳を傾けてくださいます。イエス様に祈ることによって、勇氣と、知恵と、がまんする心を、いただくことができます。イエス様は、天国のすべての恵みを私たちのために用いることができるのですから、どんなことでもイエス様に祈ってみましょう。

(小野静雄)

【今日の暗唱聖句】 使徒言行録1章9節

こうして話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。

〈主題〉

神の栄光にみちたお方。

〈ねらい〉

十字架の死からよみがえらえたキリストは今も天上でとりなしておられる。

〈展開例〉

みなさんは、イエスさまが三人のお弟子さんを連れて山に登られたことを知っていますか。ここでは、イエスさまの白い衣が輝き、まばゆいほどになりました。その時、天から声がして、「これはわたしの愛する子、これに聞け」と言いました。ペトロたちは、これを見てとてもおどろきましたが、イエスさまは、十字架にかけられるまで、そのことをだれに言わないように、と注意しました。イエスさまの栄光は、神さまの栄光です。それは、輝きに満ちた栄光です。その栄光を、キリストは

十字架の死からよみがえられて天に上げられてから、いよいよあらわしておられます。そして、イエスさまは、天上でも、ご自分がなし遂げられた十字架をもとにして、わたしたちのためにとりなし、わたしたちが、神さまに近づいてお祈りできるように働いてくださっています。お祈りするとき、いつもイエスさまの栄光をこころに覚えましょう。十字架の死からよみがえられて、天に上げられたイエスさまをこころにいつも覚えましょう。

〈お祈り〉

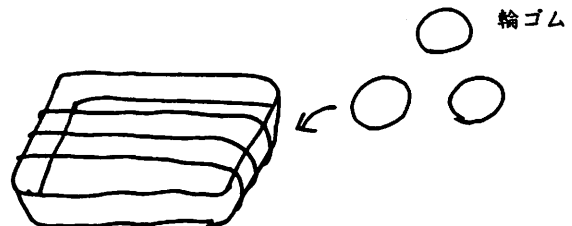
天の父なる神さま。神さまの栄光の輝きを信じることが出来ますように。イエスさまの十字架をとおして、罪の世界から救われて、賛美の声をあげることが出来ますように。イエスさまのとういお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～ギターでルンルンしよう～



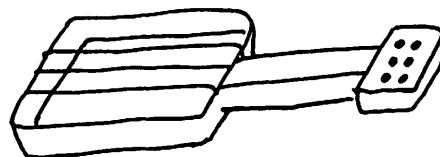
①発泡スチロールのトレイに絵を描く。



②輪ゴムをかける。裏側を、ガムテープなどでしっかり留める。

③輪ゴムをはじめてならす。

④ギターの柄の部分に牛乳パックなどで作ってくっつけてもよい。



〈ねらい〉

イエス様が「天に昇られた」ということが、わたしたちから遠く離れたのではなく、わたしたちの「日々の同伴者」であることを示す。特に祈りにおいてその実感を得ることができるように目指す。

〈分級教師へのアドバイス〉

キリストの臨在は、正確には「聖霊なる神様の臨在を通しての臨在」なのですが、分級ではその点は省いております。もう少し話を展開できるのであれば、「弁護者、助けぬし」である聖霊について触れてもよいかもしれません。

〈展開例〉

①十字架につけられたイエス様は、死んでしまいましたけれども、イエス様は神様でしたから、そのまま死んだままではありませんでした。どうしたと思う？

(回答例)

- ・復活した
- ・弟子たちにあらわれた

②復活しただけじゃありません。復活したイエス様は、今度は弟子たちが見ている前で、天に昇っていかれたんです。本当ですよ。

③じゃあ、天に昇ったイエス様はどうしたと思う？

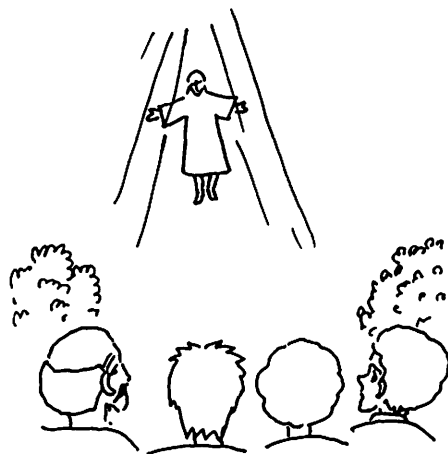
- ・わからない
- ・父なる神様と一緒にいる

④イエス様は天に昇られて、父なる神様の右の座に着いておられるんだよね。わたしたちから見るとずいぶん遠いようだけれども、実は、イエス様からはわたしたちのことが良くわかっているんですよ。

⑤わたしたちが天にいらっしゃるイエス様にお祈りをする時、一人で心細い時、いつでもどこでも、イエス様はわたしたちのすぐ隣にいて、わたしたちを見守って、助けてくださるんです。復活して、天に昇ったイエス様だから、こうしてわたしたちのことを助けてくださることができるんですよ。

〈祈り〉

天のお父様、イエス様が復活して、天に昇られて、わたしたちをいつも守ってくださるお方であることを感謝します。わたしたちが元気なときも、元気がない時も、学校に行っている時も、お家にいる時も、いつでも共に居てくださることを感謝します。イエス様に助けられてわたしたちが毎日元気で居ることができるようにしてください。



〈暗証聖句〉 使徒言行録1章9節

こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。

〈ねらい〉

1. イエス様は、今、天におられる。
2. 天から聖霊を与える約束をされた。
3. 再びおいでになる。

〈展開例〉

イエス様は十字架の死で終わりではありませんでした。復活なさり40日の間お弟子さんや女の人たちに現れ、悲しみの中にいた人をはげまし、確かに甦られたことをみんなに知らせ、お弟子さんの見ている前から天に登られました。せっかく復活したイエス様がまたいなくなってしまう不安におもったお弟子さんもいたはずです。しかしイエス様は聖霊なる神様を送ってくださいさりイエス様が神様であること、十字架の上で確かに死なれたが、今は甦られたこと、わたしたちの真の救い主であ

ることを世界中の人に宜べ伝える働きをむかしも今もわたしたちに与えてくださいます。そしていつの日かわたしたちにはわかりませんが、イエス様は必ずもう一度この世界に来られ本当の神の国を完成させていただきます。

〈祈りましょう〉

イエスさまが、天におられ、父である神さまともにおられることを、信じています。いのっているわたしも、べんきょうやあそびのときのわたしも、天のイエスさまが見まもってくださいるのでわたしはなにもこわくありません。アーメン。

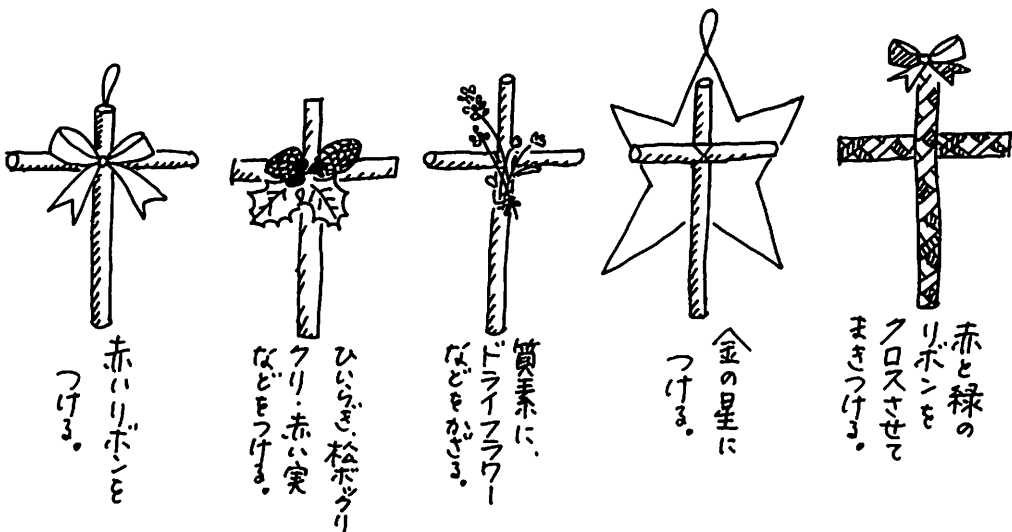
〈答えてみよう〉

- ① イエス様が天に上げられた後、何を私たちに与えてくださいましたか。
- ② 聖霊が降ると、私たちはどうなりますか。使徒1:8
- ③ どんな力が私たちに与えられるのか考えてみましょう。

〈やってみよう〉

～木の枝の十字架～

拾ってきた枝などを使って十字架を作ってみよう。



〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまの十字架から昇天までの期間を確認しておきましょう。過越祭のときに十字架にかかられたイエスさまは、三日目の日曜日に復活されました。そして、40日にわたって（使徒1:3）弟子たちの前に現れ、天に昇られました。ちなみに、さらに10日後の五旬節の日に、聖霊が降りました（ペンテコステ）。一ヶ月以上も弟子たちに現れ続けたこと、また使徒たちの目の前で天に昇られたことは、イエスさまが確かに復活され、生きておられるということを証ししています。そして、イエスさまは今も私たちのためにとりなしてくださっているのです。

〈教理を響かせるために〉

1. キリストの高擧という言葉覚えましょう。使徒信条の「三日目に死人のうちよりよみがえり」から「かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん」までが高擧の状態です。イエスさまは、見える肉体をもって復活し、天に昇られました。つまり、今もイエスさまは人としての性質を持っておられるのです。
2. 今もイエスさまが生きておられることを、実感できているでしょうか。話し合ってみましょう。「目に見えないから……」と思ってしまう人があるかもしれません。しかし、ある人はこう言いました「イエスさまは地上におられたとき私たちが遠かったが、天に昇られて私たちに近くなられた」。目で見ていたイエスさまを人々は十字架にかけたのです。しかし、今は、聖書を通して、イエスさまがどういうお方か、すべてが明らかにされています。聖書を読み、信じ、祈ること、それこそ、天におられるイエスさまと近くにいることです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

22日（月曜日）

コリントの信徒への手紙二10章12～18節

Q. 誇る者は誰を誇るべき？

23日（火曜日）

コリントの信徒への手紙二11章1～6節

Q. 誰と比べてもわたし（パウロ）は引けを取らない？

24日（水曜日）

コリントの信徒への手紙二11章7～15節

Q. サタンでさえ何を装う？

25日（木曜日）

コリントの信徒への手紙二11章16～33節

Q. 誇る必要があるなら、何に関わる事柄を誇る？

26日（金曜日）

コリントの信徒への手紙二12章1～10節

Q. わたしはどのようなときにこそ強い？

27日（土曜日）

コリントの信徒への手紙二12章11～21節

Q. わたし（パウロ）はそちら（コリント）に何度目の訪問をしようと準備している？

○心に残った言葉を書き出してみよう。



テキスト イザヤ書11章1～5節

このテキストには、イザヤを通してメシア預言が語られています。

〈エッサイの株からの若枝〉

「株」切り落とされた切り株からは、通常新しい芽を出すことはなく、人間の目には、全くの絶望的な状況が示されています。

「エッサイ」とは、ダビデの父（サムエル上16章）のことであり、ベツレヘムの羊飼いに過ぎませんでした。従って、聖書で、ダビデのことを「エッサイの息子」もしくは「エッサイの子」（サムエル上20：27, 30, 31、同22：7, 8、サムエル下20：1、列王上12：16等）と語る時、ダビデに対するさげすみ、軽蔑を込めた言い方でした。

つまり約束された救い主は、ダビデによって約束されたメシアであるにも関わらず、「エッサイの株」として、イスラエルの罪により国が滅ぼされ捕囚の民とされていくイスラエルの姿として、つまり絶望的な状態で、示されています。

そしてその絶望的な中、蔑まれ、顧みられることのない貧しい家系から、ダビデに勝るメシア（キリスト）が、一つの芽として萌えいでることが約束されます。つまり、救い主の誕生は、イスラエルの信仰の故でも、彼らの律法の遵守という行いの故でもなく、本来ならば罪の故に滅び行くイスラエルの絶望の中、一筋の光として、神様の一方的な恵みとして、与えられるのです。

〈神の霊がとどまったもの〉

そして、この救い主には「主の霊」がとどまります（イザヤ9：5-6、ヨハネ1：33-34）。つまり与えられるみどり子は、イスラエルに約束されたダビデの子であると共に、同時に聖霊に満たされており、主なる神様から与えられた真の救い主であることが語られます。つまり救い主の約束が語られる時、それは神の第二位格の御子が中心となりますが、なおも三位一体なる神の御業であることも同時に確認しなければならないのです。

そして霊的に油注がれたメシアは、知的「知恵と識別」、実際の「思慮と勇気」、霊的「主を知り、畏れ敬う霊」において、人間的な弱さや欠け・罪のある存在ではなく、神的な完全に満たされたお方です。

〈私たちが倣う方〉

3～5節には、与えられる救い主の具体的な働きについて語られています。こうした救い主の御業は、被造物である私たちが、創造主である神様への信仰を告白する時の服従の姿そのものです。そして「正当な裁きを行い」、「公平に弁護する」、「正義」、「真実」により、彼自身もまた主そのものである姿が示されています。そして絶望の中に与えられた救い主こそが、平和と神の御国を実現するお方であることを宣言しているのです。

（辻 幸宏）

テキスト イザヤ書11章1～5節

(単元のねらい)

待降節を迎えた。今年は、主イエスの降誕が旧約聖書における神の預言の成就であることをイザヤ書から説くことにした。地上に降誕される前の主イエスと生まれる前の自分自身の存在とを重ねて考えさせた。主イエスの降誕は、ただ神の恵みによって実現したことを語る。イザヤの預言がどのように成就したのかを、主イエスの生涯から成就の具体例を挙げて語ることも楽しいのではないか。待降節に、クリスマスの準備とともに、主の再臨への期待を育みたい。

「ダビデの子孫からイエスさまがお生まれになる」

今日から、待降節が始まりました。イエスさまのお誕生を待ち望む準備をする季節が始まりました。今年も楽しいクリスマスのお祝いを心を込めて準備しましょう。お友達を誘って大勢でお祝いしたいですね。

クリスマスはイエスさまのお誕生日です。日曜学校では、お誕生者のお祝いを毎月します。先生が、祝福のお祈りをします。そして祝福の歌を皆で歌います。「生まれる前から神さまに愛されてきた〇〇ちゃんの、誕生日です。おめでとう。」と歌います。皆はこの歌をどんな気持ちで歌っていますか。「生まれる前から神さまに愛されてきた」っていても、生まれる前のことなんか、誰も分かりませんよね。みんなの中で、生まれる前に、自分がどこにいたのかなんて知っているお友達はいませんね。それだけではなく、生まれる前に僕たち私たちが、本当にいたのかどうかだって分かりませんよね。ところが、聖書には、ちゃんと僕たち私たちが生まれる前から神さまが覚えていてくださるといことが記されています。

エフェソの信徒への手紙第1章4節、「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」つまり、生まれる前から愛されてきたのです。天のお父さまは、イエスさまによって僕たち私たちを愛してくださったのです。

それなら、そのイエスさまは、いつお生まれになられたのでしょうか。それは、今からおよそ2000年前だっていうことは知っていますね。それなら、イエスさまがお生まれになる前は、天のお父さまはイエスさまのことをどのように愛しておられたのでしょうか。それは、僕たち私たちと同じではありません。何故なら、イエスさまはただの人ではないからです。僕たち私たちとまったく同じ人間ですが、僕たち私たちとはまったく違う神さまです。イエスさまは神の独り子、神の御子なのです。イエスさまは、人間としてお生まれになる前は天のお父さまの右におられる神の御子でした。天のお父さまと御子のイエスさまとは、いつもいっしょにおられて愛しあっておられたのです。

そして、その神の御子のイエスさまは僕たち私たちが生まれる前から僕たち私たちを神さまの子どもにしようと前もって選んでおいてくださったのです。愛していてくださったのです。

そんな神の御子のイエスさまが、人間としてお生まれになるのは、ただ僕たち私たちを神さまの子として罪から救い出し、永遠の命を与えるためです。父なる神さまは僕たち私たちを愛しておられるからイエスさまを人間としてお生まれさせられたのです。

神さまは、イザヤという預言者に、イエスさまがお生まれになるずっと前、700年ほど前にイエ

スさまのお誕生を予告させられました。それが、今日読んだ聖書の箇所です。

「エッセイの株からひとつの芽が萌えいで その根からひとつの若枝が育ち」と言います。エッセイというのはイスラエルの偉大な王様であってダビデのお父さんのことです。ところが、そのダビデが築き上げた王国は、北イスラエルと南ユダという二つの国にわかれてしまいます。そればかりか、北イスラエルの国は、大帝国バビロンによって滅ぼされてしまいます。今、かろうじて南ユダ王国はありますが、アッシリア王国に支配されてしまっているのです。それが、エッセイの切り株、ほとんど死にかけたような状態なのです。けれども、神さまは、人間の思いからすれば、もう望みのないところからでも、神さまの約束、ご計画を実現なさることがおできなのです。イザヤさんはここで、『若枝が育ちますよ。救い主がお生まれになるのですよ』、つまり、イエスさまがお生まれになると予告しておられるのです。

そのイエスさまは、どんなお方なのかとイザヤさんは教えてくれます。神さまの霊、聖霊が豊かに注がれるのです。なぜなら、このイエスさまは、父なる神、御子なる神イエスさま、聖霊なる神さ

まの交わりをもつ三位一体の神さまだからです。

「知恵と識別の霊」とは、イエスさまが裁きをされる時、ただ目に見えること、耳で聞くことだけで判断するのではなく、隠れているところ、人間の心の底の底までよく考え、見抜いた上で正しい判断をなさることがおできになるということです。「思慮と勇気の霊」とは、イエスさまは、どんな敵に対しても正しく立ち向かうことのできるお方だということです。「主を知り、恐れ敬う霊」とは、イエスさまは、神さまに従うことを第一に考え、その通り生きられるお方であるということです。

あとから皆で、イエスさまがなさったことで、ここに紹介されている例を挙げてみると楽しいですね。たとえば、先生は、荒野で悪魔の誘惑を受けたときのイエスさまのお姿を思い出します。悪魔の誘惑は、「神さまを第一にするな」というものです。けれども、イエスさまは、そんな誘惑を退けられました。

ここで予告されたイエスさまの誕生と紹介は、2000年前のクリスマスで実現しました。今年のクリスマスも、すばらしいクリスマスになるように、良い準備をしてゆきましょう。(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句]

エフェソの信徒への手紙 1 章 4 節

天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、
御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、
キリストにおいてお選びになりました。

〈主題〉

神さまの約束の救い主。

〈ねらい〉

イエスさまが神の約束の救い主であることを信じる。

〈展開例〉

みなさんは、クリスマスが来るのが待ち遠しいですか。そう、今日からアドベントと言って、世界中の人々が、イエスさまのご降誕をお祝いするころの備えをしていきます。イエスさまがお生まれになったとき、イエスさまは、「ダビデの子」と言われました。マリアさんから生まれたのに、どうして、ダビデの子なのでしょう。それは、イエスさまは神さまがダビデ王にあなたの子孫を祝福することをお約束になっていたからです。ですから、このお約束を知っている人は、みんな、

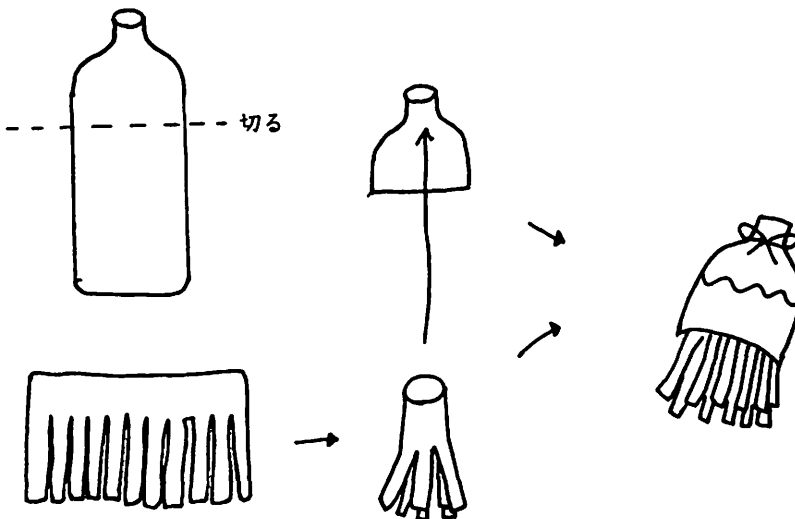
神さまの祝福による救い主の来られることを待ち望んでいました。イエスさまがこのお約束のとおりに来たこと、それは神のお約束の実現でした。でも、どうして、神さまのお約束のとおりイエスさまは来たのに、最後は十字架にはりつけにされたのでしょうか。それは、イエスさまを神さまの約束の救い主と認められない人々にきらわれたからですね。わたしたちは、救い主イエスさまを神さまの約束の救い主と信じますか。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。神さまのお約束の救い主、イエスさまをわたしたちにお与えくださり、かんしゃします。どうか、ころから神さまのお約束を信じて、クリスマスに備えることができますように。イエスさまのとういお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～シャカシャカベル～



- ①ペットボトルの上部を切り取り、それをを用いる。
- ②アルミホイルに短冊状に切れ目を入れ、丸くして、ペットボトルの口に下から差し込み、留める。
- ③持ち手の部分をアルミホイルトリボンなどで飾る。
- ④シャカシャカならして遊ぶ。

〈暗証聖句〉 エフェソ1章4節

天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。

救いだすひと筋の光を与え、希望を失わないようにしてくださいました。その救い主はダビデの子孫から生まれるとイザヤにお知らせくださいました。そのお方がわたしたちのイエス様です。

〈ねらい〉

1. 救い主を与える約束。
2. イエス・キリストがわたしたちの救い主。
3. ダビデの子孫からお生まれになる。

〈祈りましょう〉

わたしを愛してください、イエスさまをあたえてくださったかみさま。ことしもイエスさまのたんじょうを、心からお祝いできるよう、日曜学校を祝福してください。アーメン。

〈展開例〉

昔、神様のお言葉を国の王様や民に伝える、イザヤという預言者がいました。イスラエルの国が周りの国々から攻めこまれ、町が火で焼き払われ、前のような豊かな国のおもかげがないほど荒れはてた国になってしまいました。しかし、その荒れはてたところから、神様はまことの救い主を与えてくださる約束をしてくださいました。人の考えではとても不可能だと思われるところから人々を

〈答えてみよう〉

- ① イエス様がお生まれになることを予告した聖書の箇所はどこでしょう。イザヤ11:1~5
- ② イザヤが予告したイエス様に注がれた霊は何でしょう。
 - (1)
 - (2)
 - (3)

〈やってみよう〉

〜光のカンカラ・ランタン〜

ロウソク立ては、針金のほか、缶の底に、釘を打ってもいいです。やりやすい方法を考えてください。

- 材料
- アルミの空き缶
 - ホロタル
 - マジック
 - きり
 - ロウソク
 - かんざり
 - 太い針金
 - ラッカー
 - ペンチ

① 缶のふたをとり取る。



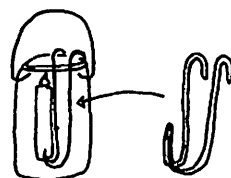
② タルをきりとめる。



③ マジックで金体に下絵を描く。



④ きりで突いて穴を開けていく。



⑤ タルを板に針金で取りロウソク立てを作る。

⑥ ラッカーを金体に吹く。(塗装しなくても おもしろいよ。)

〈聖書をさらに深く〉

1. マタイ1章に、イエスさまの系図が出てきます。アブラハムなど、よく知っている名前もそこにはあるのではないのでしょうか。その系図の中で、ダビデの名前を確認しましょう。イエスさまは、ダビデの子孫としてお生まれになりました。そして、今日の箇所は、預言者イザヤが前もって、救い主（イエスさま）はエッサイの子であるダビデの子孫から生まれることを預言したものでした。
2. イエスさまがダビデ王の子孫として生まれるということは、その血統の良さを誇るためではなく、イエスさまが神の恵みの歴史の中でお生まれになるということが実現するためでした。人間の罪や弱さが現れるときにも、神さまは恵みをもって歴史を導かれました。預言をしたイザヤの時代も、アッシリアの攻撃を受けた危機の時代でした。自分自身の罪や、直面している困難について、クリスマスの前に静かに考えてみましょう。神さまの恵みはそのような私たちに与えられたものです。
3. イザヤの預言は、イエスさまの誕生だけでなく、イエスさまがどのようなお方として働かれるのかを記しています（2～5節）。福音書の中で、このようなイエスさまのお姿を見たことがあるのでしょうか。思いつくものがあれば話し合ってみましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

29日（月曜日）

コリントの信徒への手紙13章1～13節

- Q. 主がお与えくださった権威は、壊すためではなく、どうするため？

30日（火曜日）

ガラテヤの信徒への手紙1章1～10節

- Q. この手紙を書いているのは誰？

1日（水曜日）

ガラテヤの信徒への手紙1章11～24節

- Q. わたし（パウロ）は誰と知り合いになろうとしてエルサレムに行った？

2日（木曜日）

ガラテヤの信徒への手紙2章1～10節

- Q. わたし（パウロ）はどういう使徒としての任務が与えられた？

3日（金曜日）

ガラテヤの信徒への手紙2章11～14節

- Q. ケファらの見せかけの行いに誰さえも引きずり込まれた？

4日（土曜日）

ガラテヤの信徒への手紙2章15～21節

- Q. 生きているのはもはやわたしではなく、誰がわたしの内に生きておられる？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト イザヤ書11章6～10節

〈争いの世の中〉

罪がこの世に及び、人間の墮落以後は、強い者が弱い者を滅ぼし、血に血を注ぐ状態となっています。それは動物世界だけに留まることなく、人間の社会にあっても、手に武器を取り、自らの権力を固持するがために、争い事が絶えません。

〈神の国の実現〉

しかし今日与えられたテキストには、「狼に小羊」、「豹に子山羊」、「子牛に若獅子」、「乳飲み子と毒蛇」、「幼子と娘」、これらが一緒に戯れていると語ります。これは肉食の動物が草食となることを意味していると言ってもよく、全ての動物が共存することが出来る世界でもあります。こうした状況は、天地万物が創造された時の状態であり(創世記1:29,30)、人間の墮落で失われた世界です。

しかしイザヤは、約束された救い主が到来することにより、再びこうした神様が創造された時の状態が取り戻され、地に平和がもたらされることを約束します。

〈その日〉

「その日」に、こうした平和な日々が到来することを約束しています。そして私たちが「その日」を解釈する時、二重写しする必要があるかと思えます。それは、キリストの御降誕の時であり、最後の審判の時です。

キリストが御降誕するとは、「エッセイの根」つ

まりダビデの子孫として、約束の救い主の誕生の時ですが、キリストが宿られることにより、すでに平和が実現したのです。そのことを、キリストは、宣教活動において、語られる御言葉の権威と癒しなどの奇跡を通してお示し下さり、さらに十字架の死に打ち勝ち、死より復活されることにより、罪に勝利し、全ての悪を滅ぼされることにより実現して下さいました。ですから、すでにこの世ではキリストによって平和が実現しています。しかし、神の国が完成したわけではなく、なおも罪の残滓が世を取り巻いています。そのため、私たちの目に写る世界は、罪の墮落に歩んでいる時と全く変わらないように見えています。

しかし、救い主であるキリストを信じる者には、すでにキリストにより平和がもたらされており、約束されています。だからこそ、キリストが再臨され、最後の審判がもたらされ、完全に罪が滅ぼされることにより、神の国が完成し、真の平和がもたらされ、神様の栄光が輝く世界が到来します。

〈キリスト者の平和の取り組み〉

今なお、地上に戦禍が絶えません。しかしながら、キリストによって救われ、キリストに倣う者とされた私たちキリスト者は、神の国を目指す者として、武器を手取るのではなく、神の武具を身に着けることにより(エフェソ6:10-20)、キリストの平和を実現することが求められています。

(辻 幸宏)

テキスト イザヤ書11章6～10節

〔単元のねらい〕

待降節は、降誕の準備の時であり、あわせて再臨の主イエス・キリストへの準備を整えるときである。主イエス・キリストの降誕に始まる十字架・復活の御業の成就が、神との平和の礎となった。これを根拠に、子らに、終わりの日、再臨においてもたらされる完全な平和の実現も必ず成就することを信じさせたい。そして、その希望をもって、正義と真実の主イエス・キリストにならって平和のために、生きることへと導きたい。

「ライオンと友だちになる日が来るんだ」

クリスマスが近づいてきました。今日も皆さんと一緒にイエスさまを礼拝することができて心から嬉しく思います。神さまに感謝いたします。

今日の聖書のなかに、動物がたくさん出てきました。何種類でできたか、数えられますか。狼、小羊、豹、子山羊、子牛、若獅子、牛、熊、蝮です。8種類の動物と蛇、さらに小さい子ども、人間も出てきます。出てくる動物のなかで、狼とか、豹とか、若獅子とか、熊とか、ライオンとか怖い動物ですよね。動物園の檻の中に入っても、「ウォー」って吼えられたら、泣きだしてしまうお友達もいるかもしれません。ライオンの赤ちゃんはとてもかわいいですが、先生は昔、サファリパークといって、ライオンが放し飼いになっているところを自動車でゆっくり走って見学したことがあります。自動車のなかにも、ライオンさんが近寄ってくると、なんだかドキドキしました。

ライオンは、「百獣の王」といって、とても強い動物です。お腹がすいているライオンに近づく動物などありません。すぐに鋭い牙と顎、強い足で、大抵の動物などひとたまりもなく食べられてしまいます。熊だって、他の動物は怖くて近寄らないでしょう。ところがどうでしょう。今読んだ聖書の中に「その日が来れば」とあって、その日が来れば、狼と小羊が一緒にいて、豹は子山羊と一緒に寝る、子牛と子どものライオンと一緒に育って、その動物たちを小さな子どもがお世話を

するのです。仲良くしているのです。動物には、肉食動物と草食動物があります。草食動物は、いつでも肉食動物を嫌います。食べられてしまうからです。肉食動物は肉食動物どうしても友達にはなれません。けんかします。それが、その日がくれば、友達になるのです。さらに、蝮という猛毒をもった蛇の巣の中に、赤ちゃんが手を入れても大丈夫だということです。噛まれないからです。

……でも、「その日」がまだ来ていないので、皆は、蝮と仲良くしないで下さいね。

それなら、「その日」っていつの日のことなのでしょう。それは、私たちの主イエス・キリストがこの地上に来られる日のことです。そして、先週学んだように、既にその日は来しました。イエスさまは、僕たち私たちを神さまの子にするために、お生まれ下さったのです。既に2000年前に最初のクリスマスはお祝いされました。イエスさまはもう来てくださったのです。

この神の御子のイエスさまの誕生によって、僕たち私たちと神さまの間は平和になりました。僕たち私たちは、神さまから生まれながら怒りを受けなければならない罪人でした。神さまの敵でした。けれども、イエスさまが人間となってくださり、僕たち私たちの罪を十字架について贖ってくださったので、僕たち私たちは、神さまと仲良しになれたのです。それで、イエスさまが、天に戻られて、地上にイエスさまの体としての教会を与えてくださいました。この教会では、イエスさ

まによって神さまの子どもにさせていただいた人たちが神さまの家族、イエスさまの兄弟姉妹となって、仲良しになりました。教会は今世界中にあって、肌の色も、国籍も、民族も違う人たちがイエスさまを救い主と信じ、神さまの恵みの支配が世界に及ぶようにとそれぞれ、その場所その場所で一生懸命、「主を知る知識を満た」そうと伝道をしています。それぞれ奉仕の働きをしています。

ただし、神の国は教会において始まっていますが、まだ、完成はしていません。世界中の人たちが、イエスさまを救い主、王の王として、信じているわけではありません。このイエスさまを信じていない人たちが、イエスさまに従わない人たちがいるところでは、本当の平和はまだ完成されません。

それなら、ここで約束された「その日」とは、いつの日のことなのでしょう。それは、今週の子どもカテキズム、問33にあるように「再臨の日」、イエスさまが再び地上に来られる日に実現するのです。

人間が罪を犯してから、「地は呪われて」しまいました。罪の汚染は人間だけに広がってしまったのではなく、生きているものすべて、世界中が

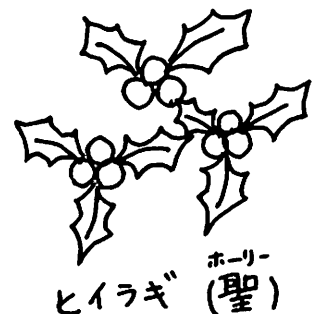
罪の影響を受けてしまったのです。最初は、人間同士喧嘩はありませんでした。動物たちも仲良く暮らしていたのです。しかし、「その日」には、それが元通りになります。もっとすばらしい世界が新しく創造されます。

その日には、僕たち私たちのような小さな子どもが大活躍すると言われてます。動物たちと仲良くなり、動物どうしも仲良くなり、小さな子ども、力のない子どもがそれを導くのです。神さまの平和を作り出すのです。力が強い大人、人を殺す武器を操れる人ではなく、小さな子どもこそ、神さまに用いられるというのです。すばらしいですね。

その日は必ず来ます。何故なら、クリスマスは2000年前に本当に実現したからです。イエスさまは、本当に、十字架にかかって死んで下さり、本当に、三日目に復活されたからです。ですから、その日を待っている僕たち私たちは、何にもしないで待っているわけにはゆきません。この平和の王なるイエスさまのことを、お友達に伝えるのです。それこそ今、僕たち私たちにできる平和のためが一番すばらしい奉仕なのです。（相馬伸郎）

[今日の暗唱聖句] イザヤ書11章6節

狼は小羊と共に宿り
豹は子山羊と共に伏す。
子牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。



〈主題〉

イエスさまはふたたび来られる。

〈ねらい〉

イエスさまが十字架、復活、昇天の後、再び、来られることを信じる。

〈展開例〉

みなさんは、神さまのお約束の救い主イエスさまが十字架にかけられて、命をなげうたれあとに、三日目に復活されたことを覚えていますか。その後、イエスさまは、また、死なれましたか。いいえ、そうではありませんね。イエスさまは、神さまのお力によって、復活し、弟子だちのしている前で、天に上げられました。そのとき、天のみ使いは、「あなたが知っているのと同じように、また来ます」と約束してくださいました。みなさん

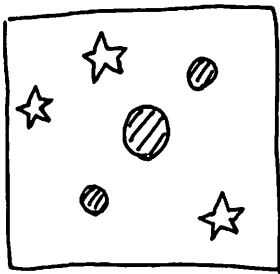
は、この神さまのお約束を信じますか。そう、一度、イエスさまは神さまのお約束のとおり、お生まれになって来てくださいましたから、こころをたしかにして信じることができますね。目に見えなくても、イエスさまがおられるところが、天であり、えいえんのわたしたちの住まいです。イエスさまがえいこうのうちに、ふたたび来てくださるのはほんとうにたのしみですね。いつ、イエスさまが来られてもよいように、こころを備えていきましょう。神さまのお約束を信じて。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。神さまのお約束を信じて、こころから神さまをさんびします。どうか、イエスさまのふたたびこられることを信じて待つことができますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～小さな小さな指人形～



- ① 布の端切れに首の穴一つと腕の穴二つをあける。
- ② ヤクルトの空き容器を首の穴に入れ、顔を描き、飾る。
- ③ 布に手を差し込み、指を入れて、指人形をして遊ぶ。

〈ねらい〉

救い主による平和の到来が、どれ程不思議なことであるか、自然の法則と見られる動物たちの敵対が解消されることから、わたしたち人間の敵対の解消を想起させる。

〈分級教師へのアドバイス〉

わたしたちは、いまだにキリストの来臨とキリストによる究極の平和の実現を待望し続けている者です。クリスマスによって、この平和は原理としては実現しているのですが、まだ完成してはおりません。当然わたしたちも、完全な平和を実現する者とはなっておりません。展開例で挙げているような人間関係の衝突は子どもたちとは言え、深刻である場合があります。子どもだから単純であると決めつけず、共に、平和を見いだせるように祈りましょう。

〈展開例〉

①今日出てきた動物をもう一回思い出してみよう。
何を食べるのかな？

(回答例)

・狼	>	肉	小羊	>	草
・豹	>	肉	子山羊	>	草
・若獅子	>	肉	子牛	>	草
・熊	>	肉等	牛	>	草
・獅子	>	肉	牛	>	草
・兎	>	肉			

②動物たちも一緒に居ることができないことがあるよね。

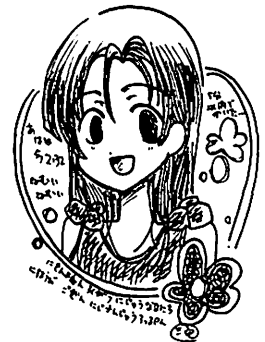
③わたしたちはどうかな。兄弟で仲良くしなきゃって言われているのに喧嘩しちゃったり、お父さんお母さんの言う事を聞かなきゃいけないって言われているのに、文句言っちゃったり、友だちと仲良くしなきゃ行けないのに喧嘩しちゃったり、そんなことってあるでしょ。先生も昔は良く兄弟げんかをしてお父さんに怒られたりしたんですよ。

④でもクリスマスの時は、兄弟でも仲良くしました。だってクリスマスはイエス様がおいでになった嬉しい素晴らしい日だからです。イエス様はわたしたちが兄弟や友だちや、みんなと仲良くすることができるように、この地上に生まれてくださったんですよ。

⑤だからみんなクリスマスの時のように、みんなが本当に仲良くなれるようにイエス様にお祈りしましょう。

〈祈り〉

天のお父様、クリスマスにイエス様がお生まれになって、わたしたちが喜びで満たされるようにしてくださったことを感謝します。わたしたちがイエス様によって、すべての人と仲良く和解することができるようにしてください。



〈暗証聖句〉 イザヤ11章6節

狼は子羊と共に宿り豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち小さい子供がそれらを導く。

〈ねらい〉

1. 神の国の実現。
2. 命と平和の君、イエス様。
3. 神の国の完成。

〈展開例〉

アダムとエバが罪を犯してから今日にいたるまで、世界の中で戦争や病気、食べ物のない飢えや飲み水のない渴きに苦しまない日はありません。今もどこかで悲しいできごとが起こっています。しかし2000年ほど前にイエス様がこの地上においでになり、教会を通して神の国を実現されました。神様と人がつどい、共に交わりをもつことがゆるされました。それがわたしたちの通っている教会です。しかしまだ世の中には悲しいできごとがた

くさんあります。本当の神の国の完成は再びイエス様がおいでになる時におこります。すばらしい世界の訪れを心待ちにしながら今日の礼拝をささげましょう。

〈祈りましょう〉

ほんとうの平和をつくるために、うまれてくださったイエスさま。せんそう、あらそい、にくしみのない世界になるよう、人々の心をつくり変えてください。わたしの心に、いつも平和をあたえてください。アーメン。

〈答えてみよう〉

- ①イザヤ11:10の「その日」とはいつのことですか？
- ②再臨とはなんですか？
- ③イザヤ11:6～10から、この世界はどのようになると言われていますか？

〈やってみよう〉

～クリスマスの飾り～

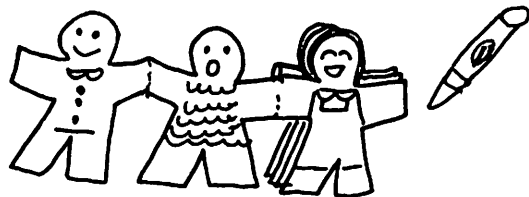
クリスマスの飾り（ガーランド）をつくり教会を飾ろう。



うまい紙をたたんで
線のように切る。



ひろげて 顔や服をかく。



〈聖書をさらに深く〉

1. クリスマスをお祝いする意味はどこにあるでしょうか。2000年前のイエスさまのお誕生を振り返るということだけでしょうか。そうではなく、そのイエスさまが今も私たちの救い主として生きておられるということ、そして、イエスさまが2000年前と同じようにもう一度地上に来られるということをクリスマスには覚えます。イエスさまの第一の来臨（クリスマス）と第二の来臨（終わりのとき）の間の時代を私たちは生きているということを確認しましょう。イエスさまが来られるその日（10節）には、動物たちも共に平和に暮らすというスケールの大きな神の国の完成がもたらされます。
2. それでは、イエスさまが来られるその日まで、私たちにできることは何でしょうか。話し合ってみましょう。教会生活の中でも、これまでしていなかった新しいことにもチャレンジしてみましょう。例えば、祈禱会に出席してみるということはどうでしょうか。世の中にはまだまだ神の国の平和とは程遠いような現実がありますが、私たちは祈りの中で、「御国を来たらせたまえ」と願うのです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

6日（月曜日）

ガラテヤの信徒への手紙3章1～6節

Q. 霊を受けたのは、何を聞いて信じたから？

7日（火曜日）

ガラテヤの信徒への手紙3章7～14節

Q. 木にかけられた者は皆、どうなっている？

8日（水曜日）

ガラテヤの信徒への手紙3章21～25節

Q. 律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く何係？

9日（木曜日）

ガラテヤの信徒への手紙3章26節～4章7節

Q. 律法の支配下から贖い出された者は、何となる？

10日（金曜日）

ガラテヤの信徒への手紙4章8～20節

Q. わたし（パウロ）は、何がきっかけであなたがた（コリント）に福音を伝えた？

11日（土曜日）

ガラテヤの信徒への手紙4章21節～5章1節

Q. 何に二度とつながれてはならない？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト イザヤ書53章1～12節

〈受難の預言〉

「わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか」(1)。この53章では約束の救い主がイスラエルを救いに導く政治的な指導者としての姿はなく、苦しみ、罪人のひとりに数えられ、死を遂げられることが示され、預言者イザヤに与えられた召命である「人々の心を頑なににするメッセージ」が改めて語られていきます。

待降節に、この預言を学ぶことの意味は、クリスマスにおいて、神の御子が人として宿って下さったことのみを学ぶことにとどまらず、なぜ御子がへりくだられ、人間の姿を取られたのかを考える必要があるからです。この御子イエス・キリストこそが、罪人の罪の救いと救いを担われるお方として、旧約の時代にすでに約束されているのです。

〈若枝〉

「乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝」(2)は、11章1節の「若枝」と深くつながりがあり、罪による滅びから捕囚の民とされるイスラエルに与えられる救い主であることを鮮明にします。

しかし同時に「この人は主の前に育」ち、主なる神様から与えられた救い主であることが、指し示されています。

〈御子の謙卑〉

彼は神の御子としての救い主でありながらも、謙卑な姿を取られ、地上における生涯でさまざまな悲惨を経験され(参照:ウ小教理27)、「わたしたち」つまりユダヤ人に軽蔑され、裁かれ、死を

遂げられます。

「彼が刺し貫かれたのは わたしたちの背きのためであり 彼が打ち砕かれたのは わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって わたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ 道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて 主は彼に負わせられた。」(5,6)

これこそ、旧約の預言者によって約束され、全ての神の民に与えられたキリストの十字架による身代わりの死と罪の贖い、一方的恩恵による救いの宣言です。

7節以降には、キリストが十字架への道を歩まれる時に成就していく預言が、具体的な事柄として語られています。

〈わたしたち〉

旧約の時代に罪を繰り返し、また御子イエス・キリストを十字架に架けたのはユダヤ人ですが、このキリストの御業はユダヤ人に与えられたと限定してはなりません。ここで語られている「わたしたちの背き」、「わたしたちの咎のためであった」とは、まさしく神様が救って下さろうとしている全ての神の民のためであって、キリストの時代から2000年の時を経た私たちにも向けられています。従って私たちは、イザヤが「わたしたち」と繰り返して語る言葉を、ユダヤ人たちの姿だと読むことと同時に、私たち自身の姿であることをしっかり見据えなければなりません。(辻 幸宏)

テキスト イザヤ書53章1～12節

〔単元のねらい〕

ここでは、イザヤのメシア預言のなかでもその頂点として位置づけられるテキストを扱う。主イエス・キリストの降誕がまさに、罪の贖い、罪からの救いのためであること、また、苦難の僕である御子の苦しみを耐えるお姿と御子を与えてくださった御父の限りない愛を深く覚えさせたい。いよいよ次週は降誕祭。クリスマス集会の準備に忙しうさせられるこのときであるが、心に主キリストを宿す真のクリスマスの喜びを味わわせることを第二にすることはできない。

「十字架に苦しむためにお生まれくださったのは誰？」

いよいよ、来週はクリスマスです。お店に行くと、クリスマスツリーにきれいな飾りがつけられています。サンタ、サンタとにぎやかで楽しいクリスマスの音楽が鳴っています。なんだか、サンタクロースの日なのかなと思ってしまうほどです。きっと、皆も、プレゼントをもらえること、ケーキやご馳走が食べられること、今から楽しみにしているでしょう。でも、もちろん、クリスマスはサンタさんの日ではありません。お店の人は、お父さんやお母さんや、皆に少しでもお金を使ってほしいから騒いでいるのです。本当のクリスマスの意味も、喜びも知らないのです。

それなら、クリスマスを喜ぶことは間違っていますか。おめでどうって、言うことはいけないことですか。決してそうではありません。僕たち私たちににとって最高におめでたい日、楽しい日です。でも、本当のクリスマスの喜び、お祝いの仕方はそんなことではありません。それなら、神さまに喜ばれるクリスマスのお祝いの仕方ではどうすればよいのでしょうか。

待降節の間、僕たち私たちが、ずっとイザヤ書を読んで礼拝式をささげてきました。イエスさまがお生まれになる700年以上も昔から、イザヤさんは、イエスさまのことをエッサイの株から萌え出でた若枝と言いました。お生まれになることを予告していたのです。それなら、救い主イエスさまである、若枝は、どんなにすばらしい成長を遂

げ、明るく楽しい道を歩まれたというのでしょうか。

ところが、イザヤさんはこのような予告をしました。お生まれになった救い主のイエスさまは、神の御前に歩まれるけれども、人々はイエスさまを軽蔑したり、無視すると言うのです。それどころではありません。御自分のせいでの苦しきと痛みをお受けになられるのではなく、僕たち私たちのための苦しきと痛みを味わわれると言うのです。そうです。生まれる前から十字架につけられること、神さまのお怒り、神さまからの刑罰を、僕たち私たちの身代わりにお受けになることを予告されていたのです。イエスさまは僕たち私たちの身代わりに苦しまれるために人としてお生まれくださったのです。

そんなにすばらしいイエスさまがお生まれになった最初のクリスマスの日、世界の人々、ユダヤの人々はどんなにイエスさまを喜び、歓迎しなければならぬでしょうか。ところが、実際はそうではありませんでした。イエスさまは、馬小屋でお生まれになられたのです。何故なら、宿屋には、空いている部屋がなかったからです。しかもそればかりではありません。イエスさまは、お生まれになったその日だけ、大変な目に遭われたのではないのです。人間の悲しみや苦しきを経験してくださったのです。僕たち私たちがよく知っているイエスさまは、病んでいる人、悲しんでいる人、苦しんでいる人の友だちになってくださいま

した。人から軽蔑され、見捨てられている人のお友だちになってあげたのです。そういう人のお友だちになるということは、自分もその人の悲しみとか苦しみを背負うということです。イエスさまは、多くの人々のこらえきれない痛み、悲しみを肩代わりしてあげて、その人の痛みと悲しみを取り除いてさえてくださるのです。イエスさまには、そのようなことがおできになるのです。神さまの独り子で、しかも人間となってくださったからです。イエスさまは、痛み、悲しみ、苦しみの一番の原因である、人間の罪を御自分が肩代わりして、神さまの裁きを十字架でお受けになられたのです。このイエスさまを信じた人は、罪が赦され、神さまの子どもにさせていただけるのです。イエスさまは、僕たち私たちを神さまの子どもにするために、お生まれくださり、十字架のお苦しみを耐えてくださったのです。

預言者イザヤさんのこの預言の言葉は、誰も信じる人、理解した人はいなかったのでしょうか。そうではありません。イエスさまがお墓の中からお甦りになられたとき、お弟子さんたちには、よく分かったのです。「私たちが救う為に父なる神さまは独り子のイエスさまを私たちに与えてくださったということは本当のことなんだ。」イエスさまこそ、あのイザヤさんが預言した通りの救い

主だと信じたのです。イエスさまのお誕生をお祝いすると言うこと、天のお父さまが喜ばれるクリスマスのお祝いの仕方は、このイエスさまを信じることで、心の中にお迎えすることだと分かったのです。

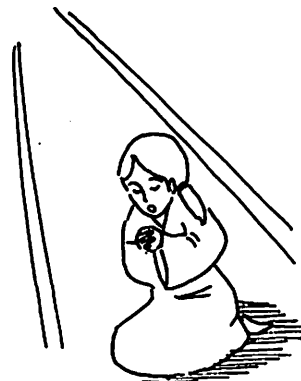
あなたも今朝（もう一度）、イエスさまが何のためにお生まれくださったのか、十字架で苦しまれたのか、復活されたのかを信じてください。そうすれば、イエスさまは、あなたの心の中に宿ってくださいます。「悔い改めよ。見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしはその中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」（ヨハネの黙示録第3章20節）今、イエスさまは、聖書の御言葉とこの説教によって本当のクリスマスのお祝いに、あなたを招いておられます。来週のクリスマスをお迎えする最高の準備、最も大切な準備は、イエスさまを信じて待つこと、イエスさまを心にお迎えして待つことです。

来週は、新しいお友だちとも本当のクリスマスをお祝いできますようにも、祈りましょう。

（相馬伸郎）

【今日の暗唱聖句】 イザヤ書53章12節後半

多くの人の過ちを担い
背いた者のために執り成しをしたのは
この人であった。



〈主題〉

キリストが受けられた苦しみ。

〈ねらい〉

キリストの苦しみのほんとうの目的を伝える。

〈展開例〉

みなさん、来週はいよいよクリスマスですね。世界中のこどもたち、人々がこのクリスマスの日をこころ待ちにしています。ほんとうの王、わたしたちの救い主、イエスさまをこころから賛美して、一緒に、お祝いしましょう。でも、どうして、クリスマスは世界中の人々が喜ぶ時なのでしょう。それは、イエスさまの来られたことによって、ほんとうの平和がもたらされたからです。そのほんとうの平和をわたしたちに与えてくださるために、イエスさまは、十字架の苦しいを担って

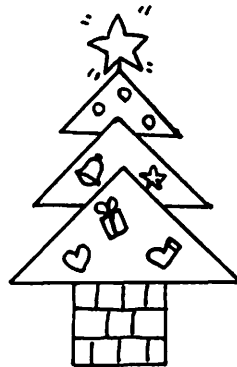
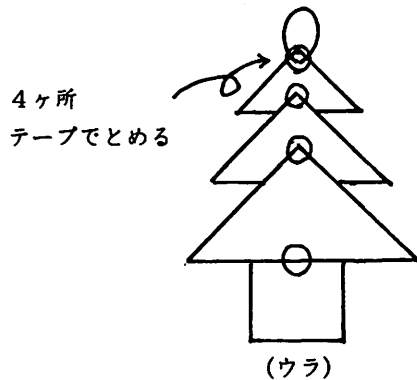
ださったんですね。それは、わたしたちは担うことのできない、神さまの呪いと怒りを身に引き受けられるというたいへんつらく苦しいものでした。ですから、ただしくクリスマスをお祝いするために大切なことは、このイエスさまのお苦しみをこころに覚えて、罪をゆるしてください、とお祈りすることです。そして、こころからこのほんとうの平和をいっしょに喜び、人々にお伝えうすることですね。イエスさまといっしょに。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。世界中の人々といっしょにクリスマスをお祝いできますように。どうか、わたしたちの罪をゆるして、人々にほんとうのクリスマスをお伝えすることができますように。かんしゃして、イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～クリスマスツリーをつくろう～



- ①緑色の折り紙を二つ折りにして、三つにつくって、つなげる。
- ②茶色の折り紙で鉢をつくって貼り付ける。
- ③ツリーに星や絵を描き、貼り付けて、飾り付ける。
- ④ひもを付けてつるすようにしても、台紙に貼り付けてもよい。

〈ねらい〉

キリストの降誕が、受難に向かうものであること。受難を前提とするからこそ降誕が恵みとして祝われることを意識する。

〈分級教師へのアドバイス〉

クリスマスが単なるお祝いではなく、わたしたちの救いにとっての重要な意味を持っていることを理解することは大切なことです。今回の展開例は、説教展開例の流れに比較的忠実に沿ったものになっています。

〈展開例〉

①いよいよクリスマスですね。教会でも待降節の間クリスマスのことを色々学びましたね。そこで、クリスマス・クイズ！

②第一問 クリスマスはイエス様がどうした日でしょう？

（回答例）

- ・生まれた日

③第二問 イエス様が生まれたのはどこでしょう？

- ・ベツレヘム
- ・馬小屋
- ・飼い葉桶の中に寝かされた

④第三問 イエス様のお誕生をお祝いしたのは誰でしょう？

- ・羊飼い
- ・東方の博士

⑤第四問 ヘロデ王様は、イエス様のお誕生を喜んでいらっしゃいますか？

- ・喜ばない
- ・不安に思った
- ・殺そうとした

⑥第五問 エルサレムの人たちは、イエス様の誕生の知らせを聞いて喜んでいらっしゃいますか？

- ・不安に思った（マタイ2：3）

⑦第六問 イエス様が生まれて、大人になった時、王様や祭司さんや律法学者さんたちは、イエス様のことを好きになられたでしょうか？

- ・嫌いに思った
- ・ねたんだ

⑧第七問 人々はイエス様のことを大事にして、信じたでしょうか？

- ・信じない
- ・十字架につけてしまった

⑨第八問 イエス様が十字架につけられたのはどうしてでしょうか？

- ・イエス様を殺そうとした人にだまされた
- ・殺そうとした人たちを赦すため
- ・イエス様を信じる人たちを赦すため

⑩第九問 イエス様は、なんのためにこの世に生まれたのでしょうか？

- ・十字架にかかって、私たちに救ってくださるため

⑪第十問 わたしたちは、イエス様の知らせを聞いてどうしたらよいでしょうか？

- ・喜ぶ
- ・イエス様を信じる

〈祈り〉

天のお父様、イエス様がわたしたちの罪を赦すためにこの地上にお生まれになってくださったことを感謝します。わたしたちがイエス様を信じることができるようにしてください。

〈暗証聖句〉 イザヤ53章12節後半

多くの人の過ちを担い背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。

〈ねらい〉

1. 神が人となられた。
2. キリストの受難の預言。
3. キリストは人の弱さ、罪深さを知っておられる。

〈展開例〉

救い主であるイエス様は、神様でありながら、わたしたちとまったく同じように、お腹もすき、のども渴き、暑さや寒さも感じ、体の痛みも心の痛みもわかってくださる人となられました。預言者イザヤは、救い主が王様のように強くて、立派な姿でなく人々から見捨てられ、見るべき面影もないと言っています。子なる神、イエス様がこの世界においてになり人となられた生涯は、人々に仕え、弱者の支えとなる生活でした。十字架の

死をとげられた時、苦しみとその低さ、人々のそしりは最高になりました。この苦しみとそしりをわたしたちの代わりにたった一人でお受けになってくださいました。今日も感謝いたしましょう。

〈祈りましょう〉

うまれる前から、くるしみを受けるよう定められたイエスさま。かいばおけの中に生まれ、十字架のくるしみまで歩いてくださり、かんしゃします。アーメン。

〈答えてみよう〉

- ① イエス様は私たちの為にどんな苦しみを受けられましたか？ イザヤ53：4
- ② イエス様が受けた傷によって私たちはどうなりましたか？ イザヤ53：5
- ③ クリスマスを迎えるために最も大切な準備は何でしょう。
○○○さまを信じ、○○○さまを○○○にお迎えすること

〈やってみよう〉

～クレッシュを飾ろう！～

ねんどで人形づくり

☆12月12日と19日の2週間を使って仕上げましょう。



イエスさま誕生の場面を
いろいろ工夫して作って
みて下さい。

〈聖書をさらに深く〉

1. 救い主イエスさまの誕生を預言したイザヤは、この53章で、救い主の苦難について預言します。これが、イエスさまの十字架の出来事を指していることが理解できるでしょうか。十字架の場面を思い起こしながら読んでみましょう。
2. イエスさまの苦難は、最後の十字架のときだけでなく起こったのではなく、その誕生のときから始まっていました。ヘロデによって命が狙われた出来事（マタイ2章）、またユダヤ人たちからもずっと迫害を受けたことなどを思い起こしてみましよう。私たちは果たして、生まれながらに苦難を宿命づけられていたとしたら、生きていくことができるでしょうか。イエスさまは、私たちの身代わりに苦難を生涯の間担ってくださったのです。
3. イエスさまの苦難を知る私たちはもはや、自分是不幸な人生を生きているなどと考える必要はありません。イエスさまのゆえに、恵みの人生が与えられているのです。ただし、そのときに私たちに求められる大切なことがあります。それは、悔い改めということです。「彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった」（5節）からです。クリスマスの喜びを目前にした今、静かに自分の罪について考えてみましょう。そして、心からの悔い改めの祈りをささげましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

13日（月曜日）

ガラテヤの信徒への手紙5章2～15節

Q. 律法全体は、何という句によって全うされる？

14日（火曜日）

ガラテヤの信徒への手紙5章16～26節

Q. 霊の結ぶ実は何？

15日（水曜日）

ガラテヤの信徒への手紙6章1～10節

Q. 御言葉を教えてもらう人は、誰と何を分かち合う？

16日（木曜日）

ガラテヤの信徒への手紙6章11～18節

Q. 割礼の有無は問題ではなく、大切なのは何？

17日（金曜日）

エフェソの信徒への手紙1章1～14節

Q. この手紙を書いているのは誰？

18日（土曜日）

エフェソの信徒への手紙1章15～23節

Q. 教会の誰の体であり、誰の満ちておられる場？

○心に残った言葉を書き出してみよう。



テキスト マタイによる福音書2章1～12節

〈主イエスの出生の史実〉

「ヘロデの時代」(1)との証言は、主イエスの誕生の年代を探る上で、非常に重要です。ヘロデ王がユダヤ王として統治していた期間は、BC37～BC4年であり、さらに「二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた」(16)との記述から、主イエスの誕生は、BC6～5年と推測することが出来ます。

また、出生地であるベツレヘムは、ダビデの生まれ故郷としてダビデの町として知られていました(サム上16:1、17:12、20:6)。主イエスは、このダビデの町において「ダビデの子」(1:1)としてお生まれになりました。

〈ヘロデ王〉

ヘロデは、「ユダヤ人の王がお生まれになった」(2)ことを聞き、不安を抱きます(3)。そのため彼は祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアがどこで生まれることになっているかと聞き出します。為政者が教会会議を招集し、神様の御意志を確認することは許されていることです(ウェストミンスター信仰告白23:3、31:2)。そして人の上に立てられた権威者は、全てを統治しておられる王の王である主なる神様の御旨に合う政治を行うことが求められています。それが天地万物を支配する権能(創世記1:28)が、与えられた人間の使命です。しかしヘロデは、それを悪用したのです。

〈占星術の学者たち〉

一方、占星術の学者たちは、東の方からエルサレムに來ました。彼らがどこから來たのかは、場所が特定されていませんが、バビロンかその周辺のアッシリアやベルシャ地方だと考えられます。また彼らは占星術の学者であり、主なる神様への信仰は持っていなかったことは確かなことでしょう。そして彼らが、ユダヤ教とメシア待望についてどこまで知っていたかについても、聖書からは確認することが出来ません。しかしいずれにしても彼らは、異教宗教を信じる異邦人でした。それにもかかわらず、主は、彼らを通して、救い主の誕生の次第を伝える使者としてお選び下さいました。主の選びは、まったく神様からの一方的な恵みとして与えられることを、彼らは、証ししています。

そして彼らは、大胆にヘロデ王の前で「ユダヤ人の王がお生まれになった」と語るものとされました(2)。実際に今、ユダヤの王として立てられているヘロデの前で、このことを語ることは、死を覚悟しなければならなかったことでしょう。しかし、主は彼らにそれだけの賜物を与え、またその働きを全うすることを良しとして下さいました。

そして、お生まれになられたばかりの御子を探み(8)、贈り物を献げる(11)特権に与ったのです。

救い主に出会うことは、占星術の学者たちが喜びにあふれたように(10)、真の喜びであり、祝福です。
(辻 幸宏)

テキスト マタイによる福音書2章1～12節

〔単元のねらい〕

主を亡き者にしようとするヘロデ王。もしかすると、本当に救い主がお生まれになったのかもしれないと期待し、出掛けてもよいのに、腰を上げることもしなかったエルサレムの人たち。これらに対比される東方の博士たち。ここでは、長く危険な道程をものともせずの旅立った彼らの内に注がれていた情熱と、その彼らを導かれた主の恵みを思い巡らすことをねらいとしたい。

「その星を見て喜びにあふれた」

今年も、主イエス様のご降誕を喜び祝うクリスマス礼拝の日を迎えることができました。

イエス様は私たちを救うために、今からおよそ2000年前、ユダの地ベツレヘムにお生まれ下さいました。

さて今日は、マタイ福音書2章から、イエス様誕生の知らせを聞いた最初の人たちの様子を見て行きましょう。

実は、救い主誕生の知らせは、誰にとっても嬉しい知らせではなかったのです。

まず、ヘロデ王。彼は何と幼子のイエス様を殺すことだけを考えました（マタイ2：13-16）。どうしてでしょうか。それは、ヘロデが、ずっと王様でいたいと考えたからです。「私が王様だ。この国の富も、権力も、人の命も全部私のものだ。誰にも渡さないぞ」と思っていたからです。

イエス様は、ヘロデが救われることを願っておられます。人を破滅に陥れる金銭の欲望からヘロデが解き放たれることを願っておられます（テモテ6：7-10）。しかし、その尊い主の御旨がヘロデには分かりません。彼にとって、ユダヤ人の王としてお生まれになったイエス様の誕生は、自分の王位を脅かす敵の出現にしか、映らなかったのです。

続いて、エルサレムの人々、祭司長たちや律法学者たちはどうでしょうか。彼らは救い主がベツレヘムでお生まれになることが分かっていました。旧約聖書のミカ書にそう書いてあるからです。そして今、東方の学者たちが来て、その方の誕生を

告げたのです。しかも、エルサレムからベツレヘムまでは、わずか約8 kmの距離、2～3時間で行くことが出来るでしょう。しかし、どうしたことか誰一人、ベツレヘムに行こうとしていないのです。まるで、他人事のようなのです。実際、幼子イエス様を拝したのは、東方の学者たちだけでした。

み言葉を知ってはいても、み言葉に対する信頼も、みずみずしい期待も枯れ果ててしまっているようなのです。

こうして、ヘロデ王を見ても、エルサレムの人たちの様子を見ても、何とも暗く悲しい状況であったのです。

しかし、忘れてはなりません。イエス様は、この暗闇に住む民、死の陰の地に住む私たちを照らし、救うためにこそ来て下さったのです（マタイ4：12-16）。

さて、最後に東方の学者たちに注目してみましょう。

古来、ここでの東方がどこを指しているのか、色々と考えられてきました。バビロン、ベルシャ、アラビアなど。しかし、はっきりとしたことは分からないようです。

そこで、例えばバビロンということにして、エルサレムまでの距離を計ると、直線距離だけで約1000kmあります。新幹線の営業キロ数でいくと、東京から名古屋、大阪、神戸を越えて下関までの距離に相当します。1～2カ月はかかる危険に伴う長旅であったのです。

それでも、彼らはやって来ました。エルサレムの人たちとは対照的です。そして、ついにイエス様のもとに辿り着くと、彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げたのでした。

乳香というのは、王様への贈物に相応しい、大変高価な香り良き香料です。没薬というのも、これに類するものです。

けれども、どうして東方のこの占星術の学者たちは、長い旅をものともせず、主のもとに来ることが出来たのでしょうか。終りに、そのことを考えてみましょう。

そうしますと、まず第一に気付かされるのは、彼らが宝島の冒険旅行をしてきたのではないということです。つまり、隠された宝物を見付けだし、それを手に入れるために旅をしてきた、というのではないのです。宝物なら、宝箱の中に黄金、乳香、没薬と、もうすでに一杯に詰まっています(11節)。危険を冒してまで出掛ける必要は何もありません。それに、お会い出来たとしても、イエス様はまだ幼子ですから、お話を聴くことも出来ません。そう、何かを得るための旅ではなかったのです。それとは正反対に、ただ、献げに行く旅であったのです。それでも、彼らは旅立つことが出来ました。

どうしてでしょうか。皆様ならどんな解答を出されるでしょうか。

私自身は、こう考えました。「そうだ、彼らはすでに大きな喜びを受けていたんだ。だから、感謝にあふれて旅立てたんだ」と、そう思うのです。

ルカ福音書5章を開いてみましょう。そこにも喜びにあふれる人物が出てきます。徴税人のレビです。彼は、イエス様から「わたしに従いなさい」と言われると、何もかも捨てて立ち上がり、イエ

ス様に従いました。そして、自分の家で盛大な宴会を催したのです。

招待された大勢の仲間たちはニコニコ顔のレビとテーブルに並んだ御馳走を見て、びっくりです。「おい、ケチで有名なレビが一体どうしたんだ?」。レビは答えます「皆にも、ぜひ喜んでもらいたいんだ。なぜって、イエス様が、こんな私にも目を留めて、弟子にして下さったんだから！」(ルカ5:27-29)。

盛大な宴会なのですから、かなりの出費だったことでしょう。しかし、レビは盛大な宴会を開くことを惜しんではいません。それよりも、主の恵みをたたえ、感謝を現すことを願ったのです。このレビの内にあふれていた、感謝を現さずにはおれない大きな喜びが、東方の彼らの内にもあふれていたに違いないと思うのです。だからこそ、主にお会いし、この方を拝し、贈り物を献げることを目指した、この長い旅が続けられたと思うのです。

そして、主イエスのもとに行こうとしている者を、主なる神様は決して忘れてはおりません。主イエス様に会えるまで、星は学者たちから離れず、先立って進み、ついに幼子のいる場所の上で止まったのです。

私たちは、エルサレムの祭司長や律法学者たちのように、時に、み言葉に対する信頼、期待をひどく弱くしてしまうことがあるでしょう。しかし、星を用いて東方の学者たちを間違いなくイエス様のもとに導かれた主は、私たち一人一人とも、また離れずに共にいて導いて下さいます。これからも、主を仰ぎ望み、進んで参りましょう。感謝を献げる旅に主は私たちを召して下さったのですから。

クリスマスおめでとう！ (小野田雄二)

[今日の暗唱聖句] マタイによる福音書2章10～11節

学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。

彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

〈主題〉

クリスマスをこころから喜ぶ。

〈ねらい〉

イエスさまのご降誕をいっしょに喜び、そのころを神さまにささげる。

〈展開例〉

みなさん、クリスマスおめでとう。今日はたのしいクリスマスですね。みんなでいっしょに、クリスマスをお祝いしましょう。

イエスさまがお生まれになる時、それはそれは不思議なことがたくさんありました。天のみ使いから神さまからのお約束を聞いたヨセフとマリアはほんとうにおどろいたことでしょう。でも、神さまのお約束を信じて、イエスさまのお生まれになる日をお迎えすることができました。東の国が

らははかせたたちが、おささげしたものは何でしたか。そう、黄金、乳香、もつやくでしたね。どれも、イエスさまのお誕生をお祝いし、おささげるためのものです。クリスマスのほんとうのプレゼントは、このはかせたちと同じように、わたしたちが、イエスさまにおささげするかんしゃとれいはいのこころを持つことです。そのために、イエスさまは、ベツレヘムの家畜小屋にお生まれになりました。まず、わたしたちのかんしゃのこころをイエスさまにおささげしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。今日はうれしいクリスマスです。いつも、イエスさまのしゅくふくの中で、わたしたちのこころを神さまにおささげできますように。かんしゃして、イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～フルーツポンチをつくろう～

- ①サクランボやミカンなどのフルーツ缶詰、牛乳かんてんやナタデココなどを用意する。
リンゴやバナナを切り分けたものもよい。
- ②用意した材料を大きな器に入れ、サイダーを注ぐ。
- ③小さな器に取り分けて、みんなでいただきます。

〈ねらい〉

救い主の恵みが、信仰の知識によってではなく、救い主を受け入れるか否かにかかっていることを示す。

〈分級教師へのアドバイス〉

東方の博士については様々な伝承や伝説があります（人数、人種、名前、献げ物の意味、もう一人の博士など）。それらは興味をそそるものですが、誤った知識を植え付けることとなりますので、十分注意したほうがよいでしょう。

〈展開例〉

①先週に続いて、恒例となったクリスマス・クイズです！今日は三択クイズです。

②第一問 イエス様の誕生を聞いて、遠くからやってきたのはどんな人たちだったでしょう？

- (1) 東方の博士
- (2) ヘロデ大王
- (3) 牧師先生

③第二問 東方の博士たちはどうやってイエス様がお生まれになったことを知ったでしょう？

- (1) 聖書を読んだ。
- (2) 星が現れたのを見つけた。
- (3) テレビのニュース。

④第三問 イエス様が生まれた町を教えてくださいのは誰だったでしょう？

- (1) 祭司長たちや律法学者たち。
- (2) エルサレムの町の人たち。

(3) カーナビ。

⑤第四問 イエス様のところに会いに出かけたのは誰だったでしょう？

- (1) ヘロデ大王
- (2) 博士たち
- (3) エルサレムの町の人たち

⑥第五問 博士たちが贈ったのは何だったでしょう？

- (1) 黄金、乳香、没薬
- (2) ケーキ
- (3) ゲームカード

⑦第六問 博士たちが大切なものをイエス様に差し上げたのはどうしてだったでしょう？

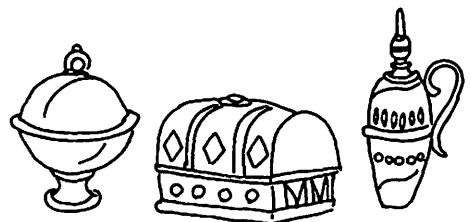
- (1) イエス様に褒めてもらいたかったから。
- (2) 王様の命令だったから。
- (3) 救い主がお生まれになったのがどんな宝物よりも嬉しかったから。

⑧第七問 みんなはイエス様に何を差し上げたらよいでしょうか。

- (1) 黄金
- (2) ゲームカード
- (3) イエス様を信じて従うこと

〈祈り〉

天のお父様、クリスマスを迎えることができ感謝します。クリスマスの時に、わたしたちがイエス様に従って行くことができる決心を与えてください。



〈暗証聖句〉 マタイ2章10節～11節

学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。

〈ねらい〉

1. 救い主の誕生。
2. キリストの誕生を喜んだ学者。
3. 旧約の預言の成就。

〈展開例〉

今年もクリスマスの季節が訪れました。三人の博士は、遠い国から星に導かれ、救い主のイエス様を訪ねて長い旅を続けてきました。この博士たちは、ユダヤ人の王様がお生まれになることを空の星をながめて知りました。しかし、この知らせも、神様が博士たちに解るようにしてくださり、星に導かれ、イエス様のところへたどり着き、イエス様を拝むことができ、たくさんの贈り物も捧

げました。でも本当の贈り物は、神様が救い主イエス様をわたしたちのこの世界に送ってくださったことです。クリスマスは神様からわたしたちへの愛のしるし、わたしたちへのよい贈り物です。

〈祈りましょう〉

すくい主として、うまれてくださったイエスさま。かみさまの最もすばらしいプレゼントを、ありがとうございます。わたしの心の中にも、どうかイエスさまがうまれてくださいますように。アーメン。

〈答えてみよう〉

- ①救い主誕生の知らせを聞いて快く思わなかったのは誰ですか。
また、喜んだのはだれですか？
- ②東方の学者たちは、長い旅を何によって導かれてきましたか？
- ③東方の学者たちは何をささげましたか？

〈やってみよう〉**～クレッシュを飾ろう！～**

ねんどで人形づくり

☆先週の続きをしよう。

〈聖書をさらに深く〉

1. 6節の言葉は、旧約聖書ミカ書5章1節の引用です。確認してみましょう。イエスさまの誕生は、旧約聖書に預言されており、その意味で特にイスラエルの人々（ユダヤ人）に約束された救い主、「イスラエルの牧者」でした。しかし、その救い主を、ユダヤの王ヘロデ、またエルサレムの人々も歓迎しようとしませんでした。
2. ヘロデたちがイエスさまを歓迎できなかった理由は何でしょうか。考えてみましょう。神さまは、「いと小さき者」（ミカ5:1）と言われていたベツレヘムを救い主の誕生地として選ばれました。同じように、神さまは、小さな者を選んでイエスさまとの出会いを与えてくださいます。自分は大きな者、偉大で立派な者と思っている人は、救い主を歓迎することはできません。私たちはどうでしょうか。
3. ユダヤ人ではない占星術の学者たちが、イエスさまに出会うことができました。彼らの姿を通して、私たち自身の信仰について考えてみましょう。彼らは星に導かれて来ました。私たちも、教会に来るようになったきっかけがいろいろあると思います。お父さんお母さんがクリスチャンだったから、お友達が誘ってくれたから、などなど。そうした人たちは自分にとっての星のような存在です。みんな輝く星に導かれてイエスさまのところに来るのです。
4. そして彼らは宝の箱を開けて、イエスさまに献げものをしました。私たちも、自分の大切なものをイエスさまのためにささげ、用いることができるでしょうか。クリスマスに、神さまはイエスさまという最も大切な独り子を私たちに贈ってくれました。わずかであっても、そのことへのお礼を私たちもするのです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

20日（月曜日）

エフェソの信徒への手紙2章1～10節

Q. あなたがた（エフェソ）は、恵みにより、何によって救われた？

21日（火曜日）

エフェソの信徒への手紙2章11～22節

Q. あなたがたはどのような土台の上に建てられている？ またそのかなめ石は誰？

22日（水曜日）

エフェソの信徒への手紙3章1～13節

Q. 神はわたし（パウロ）を何に仕える者とされた？

23日（木曜日）

エフェソの信徒への手紙3章14～21節

Q. 何に根ざし、何にしっかりと立つ者となるべき？

24日（金曜日）

エフェソの信徒への手紙4章1～6節

Q. 何で結ばれ、何を保つようにすべき？

25日（土曜日）

エフェソの信徒への手紙4章7～16節

Q. 何に対する信仰と知識において一つのものとなる？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト 詩編第27編

〈詩の内容〉

神への信頼の表明、祈りと賛美の歌

〈詩の構造〉

- (1) 1節 導入 神への信頼の表明
- (2) 2～6節 主部前半
 - 神の守りへの確信
 - (i) 2～3節
 - 苦難の中での確信の表明
 - (ii) 4～6節
 - 主の家によって与えられる確信
- (3) 7～12節 主部後半
 - 確信を支える詩人の祈り
 - (i) 7～10節
 - 御顔を求める祈りと彼への祝福の確信
 - (ii) 11～12節
 - 主の道を求める祈り
- (4) 13～14節 結び
 - 信頼の表明

〈黙想の手引き〉

神への信頼を歌う詩編の中でも最も美しい詩の一つであると思います。

「わたしには確信がある。」あなたは今、このように宣言することがおできになりますか。神は光、救い、命の砦であると実生活の中で経験し、それゆえに確信し、讃えることができますか。また不信仰者である敵が戦いを挑んできても、恐れたり、おののいたりしないで生きることができますか。

このような神への信頼と賛美、信仰の勝利のうちに進む姿勢は、私どもが常に求めるべきものです。しかし、私どもの現実、そのように言

い切ることが困難です。

詩人の信仰の確信と経験の秘訣は何でしょうか。彼はそこで何をするのでしょうか。それは、祈りです。しかも、「ひとつのことを主に願ひ、それだけを求めよう。」と、集中するのです。それは、「主の家」つまり礼拝の家、私どもで言えば、「神の民の祈りの家」である教会に生きることを求める祈りに他なりません。言わば、主日礼拝式で、「神の御顔を尋ね求める」こと、逆から言えば、「御顔の光で照らされる」ことこそ、詩人の喜びと感謝、確信の源なのです。実に、教会に生きることこそ、たとひ災いの日にあっても、揺るがぬ「岩の上」に立たせられる根拠となるのです。

詩人は最後に、自分の魂に向かって言い聞かせます。「主を待ち望め」と。それは、主ご自身が彼の祈りへの応答として、「わたしを待ち望め」と語られたからです。もとより信仰は、単なる「思い込み」ではありません。しかし、詩人のように、神の御声を、自分自身の中に語りこんで行くことが大切なのです。実にそれは、この詩をよく読む（朗読する）事によっても果たされてまいります！

「命あるものの地」とは、神の臨在される地のことです。そこでは、主の恵みを「見る」ことまでできます。それは、神が私どもを見守っておられる地だからです。

〈教師方へ〉

一年間、子らと共に礼拝を捧げることができたことを心から感謝しましょう。今日までお互いが守られ、支えられ、生かされてきたのは、礼拝式において御顔の光が豊かに注がれたからであると確認しあいましょう。

(相馬伸郎)

テキスト 詩編27編

(単元のねらい)

主を待ち望むなら力を得る、これを語り伝えることをねらいとしたい。状況は望みがないように見えても、いのちの主の語り掛けを受けるなら希望が生じます。そして、主を待ち望むなら、主はきっと御言葉をもって語り掛けて下さいます。語られる時は、子供達の前に立つ教師自身の証し(御言葉によって力を得た証し)を織り込むなら、より良いと思います。

「主を待ち望め、心を強くせよ」

今日は、今年最後の主の日となりました。この一年も主に守られて来たことを感謝したいと思えます。

さて、今日は詩編27:14「主を待ち望め、雄々しくあれ、心を強くせよ。主を待ち望め。」この御言葉に注目して、主を待ち望むなら力を得る、ということを考えてみようと思います。

まず、主を待ち望むとは、どういうことでしょうか。それは、主に心を向け、祈り、そして祈りに答えて、語りかけて下さる主の御声に、ひたすら心の耳を澄ますことであります。

具体的な一つの例を取り上げてみましょう。歴代誌下20章を開けて下さい。

ある日のこと、ユダの王ヨシャファトは、もう泣き出したいような気持ちでいました。なぜなら、死海のかなたのエドムからおびたしい大軍が攻めて来たからです。

ちょうど、一人で道を歩いていたら、急に、怖そうな兄さんたち20人ぐらいに取り囲まれ「金持ってんだろ？」とニヤニヤしながら問い詰められているようなものです。あまりの恐怖に胸はつかえ、悲鳴を上げることも出来ません。ヨシャファト王は、そんな圧倒的に不利な、望みのない状況に取り囲まれてしまっていたのです。

さて、ヨシャファト王はどうしたのでしょうか。彼は、泣き出したいような気持ちを必死でこらえ、ユダの全ての人々に断食を呼び掛けました。皆一つ心となって、ひたすらに主の助けを呼び求めよ

と命じたのです。そして、ヨシャファトは祈りました「私たちの神よ、彼らをお裁きにならないのですか。私たちには、攻めて来るこの大軍を迎え撃つ力はなく、何をなすべきか分からず、ただあなたを仰ぐことしかできません」(12節)。何をなすべきか、どうしたらいいかさっぱり分からない。どうにもお手上げの状態であることを告白します。

私たちも、しばしばそうなります。「神様、どうしたらいいか分からないよ」と。

さて、こうしてヨシャファト王は、ひたすらに主を待ち望みました。すると、主は答えて下さいました。一人の人ヤハジエルを用いて、ご自身の御旨を語り聞かせて下さったのです。「主はこう言われる。『この大軍を前にしても恐れるな。おじけるな。これはあなたたちの戦いではなく、神の戦いである。明日敵に向かって攻め下れ。……その時あなたたちが戦う必要はない。強く立って、主があなたたちを救うのを見よ。ユダとエルサレムの人々よ、恐れるな。おじけるな。明日敵に向かって出て行け。主が共にいる。』」(15～17節)。

この主の御声を受けて勇気百倍。翌朝早く、王と民は敵に向かって出て行き、そして大勝利を得ることが出来たのでした。

このように、主を待ち望むならば力を得ます。主が答えて下さるからです。そして、それはヨシャファト王に限ったことではありません。主イエス様を信じる私たちも同じです。主は、主を待ち望む者に、今は、御言葉を通して答え、語りかけ、力を下さいます。

主に信頼する者は、失望させられることはありません（ローマ10：11）。

さて、詩編27に戻しましょう。

この詩編の作者も、辛く苦しい所を通ってきました。彼は祈ります。「主よ、呼び求めるわたしの声を聞き、憐れんで、わたしに答えて下さい。御顔を隠すことなく、怒ることなく、あなたの僕を退けないで下さい。あなたはわたしの助け。救いの神よ、わたしを離れないで下さい、見捨てないで下さい」（7,9節）。

こうして、彼がひたすらに主を待ち望んでいると、主は彼に答え、さとしを与えて下さいました。彼は、切なる呻きの中で、一つの気付きを与えられたのです。「そうだ！父母が私を見捨てようとも、主は必ず、私を引き寄せて下さる！」（10節）と。彼は、主に見捨てられることのないことの確信を得、同時に、力と勇気を回復して行きます。

もちろん、主が見捨てることをなさらないというのは、彼の勝手な思い付きではありません。主が、御言葉によって明らかにして下さいている約束です。

「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようともわたしがあなたを忘れることは決してない」（イザヤ49：15）。

詩編27編の作者、彼を取り巻く苦しく孤独な状況は、敵に迫られていたヨシャファト王のように、祈り出す前と何も変りはなかったかもしれませんが。しかしそれでも、主を待ち望むならば力を得ます。主を待ち望む者に、天地を造られた主が、御言葉の約束をもってご自身の臨在を示して下さいますから

です。やがて、主は私たちの口に、心からのこの告白を授けて下さるでしょう。「主はわたしの光、わ

たしの救い、わたしは誰を恐れよう。主はわたしの命の岩、わたしは誰の前におののくことがあろう」（1節）。

数年前のこと、私と家族は教会堂の二階に住んでいるのですが、ある真夜中に、一階に泥棒が入ったことがありました。それからというもの、夜を迎える度に、また入られるのではないかと不安でなりませんでした。すると主は、箴言3：25～26の御言葉をもって答えて下さいました。「にわかにかかる恐怖におびえるな。悪者どもが襲いかかってもおびえるな。主があなたのわきにおられ、あなたの足がわなにかからないように、守ってくださるからだ」（新改訳）。

この御言葉によって、どんなに慰められたことでしょうか。主が共にいて守っていて下さることが、本当に実感できたのです。そう、主を待ち望むなら力が与えられます。

ちなみに、数週間後、その泥棒が捕まったことの知らせが届きました。

最後に、ローマ書8：31～32を開いて終わらしましょう。「では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。〈誰も敵対出来ません！〉。「私たちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。〈ご自分の一人御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべての良きものをわたしたちに惜しまずに与えて下さいます！〉。

迎える新しい年も、主を待ち望み、力を得て進んで参りましょう。（小野田雄二）

〔今日の暗唱聖句〕 詩編27編1節

主はわたしの光、わたしの救い

わたしは誰を恐れよう。

主はわたしの命の岩、

わたしは誰の前におののくことがあろう。

〈主題〉

ただひとつの希望への感謝。

〈ねらい〉

イエスさまにつながって生きることの祝福を思い起こし、感謝する。

〈展開例〉

みなさん、今年ももうすぐ終わりですね。この一年の間も、イエスさまにしっかりとつながっていましたか。そう、イエスさまがわたしたちをしっかりととらえてみちびいてくださいました。イエスさまは、「わたしはまことのぶどうの木」とおっしゃってくださいました。新しい年も、イエスさまにしっかりとつながっていきましょう。それから、イエスさまにしっかりとつながっている人たちがまず愛し合うことをおぼえましょう。世界中のこどもたちは、イエスさまを愛するように、お

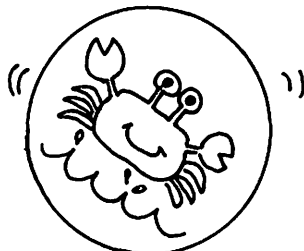
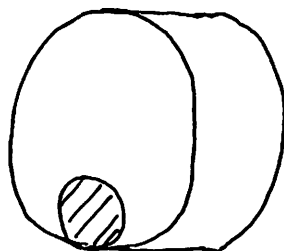
祈りしましょう。そして、いっしょにイエスさまをれいはいして、よろこぶことができるように、おいのりしましょう。イエスさまにしっかりとつながるとき、「あい」「よろこび」「へいわ」「かんよう」「しんせつ」「ぜんい」「せいじつ」「にゅうわ」「せっせい」という実がわたしたちの中に結ばれていきます。これからも、しっかりとイエスさまにつながって、いっしょに、しゅくふくの実をむすんでいきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。今年も、毎日、わたしたちを守ってくださってありがとうございます。今年一年の恵みをかんしゃして、イエスさまにつながっているしゅくふくをかんしゃできますように。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈やってみよう〉

～ユラユラ缶であそぼう～



- ① 缶詰の缶などの、丸い缶の内側に、粘土を丸めたものやビー玉、使い終わった乾電池などをテープで留める。
- ② 表側に絵を描いた紙を貼り付けて、ゆらして遊ぶ。

〈ねらい〉

この一年が神様の祝福に満たされた一年であったこと、祈りに応えていただいた一年であったことを感謝する。

〈分級教師へのアドバイス〉

この一年の教会学校での様々な出来事を思い出すことが出来ればよいでしょう。また、それぞれの生活において、神様に祈りに応えてもらった経験を見いだすことが出来るならば、それは子どもたちの信仰に大きな力となります。否定的な思い出の中にも、神様の恵みを見いだすことが出来るように誘導しましょう。

〈展開例〉

①今年もあとのこり5日でおしまいです。みんな今年は何なことがあったかな？

(回答例)

- ・小学校一年生になった
- ・旅行に行った
- ・覚えてない

②教会ではどんなことをしたのを覚えている？

- ・キャンプに行った
- ・工作をした
- ・お菓子を食べた
- ・覚えてない

③色々なことがあったよ。もうずっと前になるけど、

春にはピクニックに行ったし、修養会に行つてよその教会の子どもと一緒に遊んだ子もいたでしょ。それから、花の日の礼拝で病院にも行ったね。覚えてるでしょ？

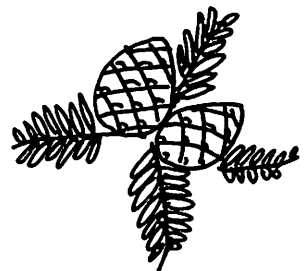
④楽しいことがいろいろあったよね。神様がわたしたちのことを守ってくださって、教会で色々な楽しいことをさせてくださったんだよ。それから、毎日毎日わたしたちが学校に行つてお勉強をして、お友だちと遊んで、そんなときにも神様がわたしたちのことを守ってくださっているんだよ。

⑤毎週毎週、先生が礼拝の時や分級の時にお祈りをしてますよね。それからお父さんお母さんが毎日毎日お祈りしてますよね。みんなも毎日お祈りしてるかな？神様はそのお祈りを聞いて、わたしたちのことを守ってくれているんですよ。

⑥みんな来年になっても、またちゃんとお祈りをして、神様に守ってもらって、楽しい一年にしてください。

〈祈り〉

天のお父様、この一年守られたことを感謝します。また、来年もどうか神様が守ってくださいますように。教会に休まず来て、聖書のお話を聞くことが出来るようにしてください。



もみの木(永遠の命)

〈暗証聖句〉 詩編27章1節

主はわたしの光、わたしの救い、わたしは誰を、
恐れよう。主はわたしの命の砦、わたしは誰の前
におののくことがあろう。

〈ねらい〉

1. イエス様は、わたしの光です。
2. イエス様は、わたしの救い主です。
3. イエス様は、わたしの命です。

〈展開例〉

この一年も、うれしいこと、悲しいことがあ
りました。思い出してみましょう。いろいろな事が
ありましたが一番の祝福は、日曜日の礼拝に通う
ことができたことだと思います。毎週の礼拝にな
にげなく行っている教会ですが、この礼拝におい
てイエス様がわたしたちと交わりを持ってくださ
る、イエス様がわたしたちを集め御言葉を教え、
子どもの礼拝ではありませんが、聖餐の食事に招

き、同じ信仰を持つ者と共に交わり祝福してくだ
さいます。この交わりは、わたしたちに命と光と
救いを与えます。今日の詩編作者もイエス様との
交わりに確かな平安を覚えた一つのことを神様
に求めました。主の家に宿り、仰ぎ見、喜ぶこと
です。この一年を感謝し新しい年に希望と平安を
祈りましょう。

〈祈りましょう〉

弱いとき、かなしいとき、いつも共にいてくだ
さったイエスさま。一年の歩みを守ってくださり、
ありがとうございます。これからもイエスさまを
信じて歩みます。アーメン。

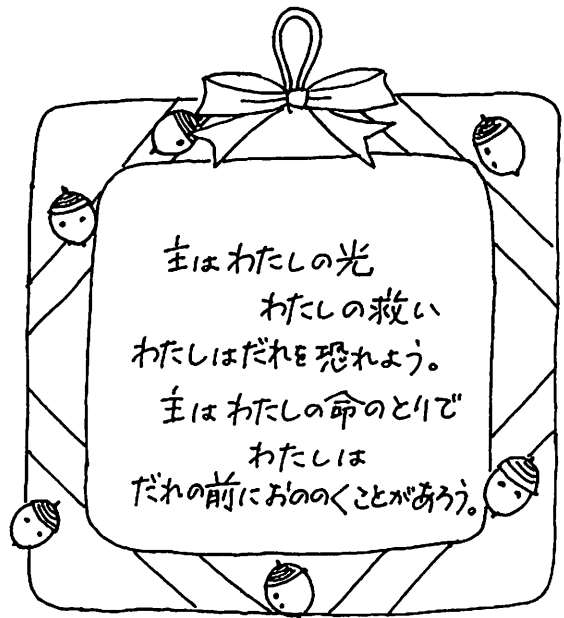
〈答えてみよう〉

- ①主を待ち望むということは、どんなことか、
みんなで話しましょう。
- ②主を待ち望むものには、どうしてくださいま
すか。

〈やってみよう〉

～額飾り～

詩編27:1 (暗証聖句) の聖句を書き出し、飾りましょう。
工夫してステキな額をつくりましょう。



〈聖書をさらに深く〉

1. この一年間を振り返り、話し合ってみましょう。家庭で、学校で、そして教会で、どのようなことがあったでしょうか。楽しい思い出ばかりではなかったかもしれません。つらいことや、悲しいこともあったでしょうか。
2. それでは、この一年間、どれくらい聖書を読むことができたでしょうか。全巻通読とまではいかなくても、新約聖書は全部読んだという人はいないでしょうか。いつもどのように聖書を読んでいるか話し合いながら、来年の目標を立ててみましょう。少しずつでも、毎日聖書を読んでいく習慣を身につけましょう。
3. ただし、大切なことは、どれだけ読んだかという量だけではなく、何よりも御言葉が心に残り、毎日の力となるということです。この一年、そのような経験ができたでしょうか。具体的なことがあれば話し合ってみましょう。「わたしの光、わたしの救い」と言えるような経験を積み重ねることが大切です。礼拝で聞いて心に残っている御言葉、自分で読んでいて気に入った御言葉などがあったでしょうか。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

27日（月曜日）

エフェソの信徒への手紙4章17～24節

Q. 心の底から新たにされて、何を身に着けなければならない？

28日（火曜日）

エフェソの信徒への手紙4章25節～5章5節

Q. いつまで怒ったままでいてはいけない？

29日（水曜日）

エフェソの信徒への手紙5章6～20節

Q. 何の子として歩むべき？

30日（木曜日）

エフェソの信徒への手紙5章21～33節

Q. 人は父と母を離れてどうなる？

1日（金曜日）

エフェソの信徒への手紙6章1～9節

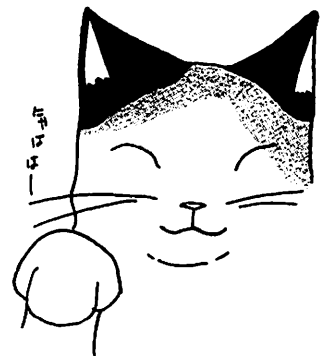
Q. 約束を伴う最初の掟は何？

2日（土曜日）

エフェソの信徒への手紙6章10～24節

Q. 霊の剣とは何のこと？

○心に残った言葉を書き出してみよう。



「創立20周年記念宣言と今日的意義」(二)

牧田吉和 (神戸改革派神学校)

III. 20周年宣言の枠組みとしての恵みの契約

— 「歴史」の項

1. 「創立宣言」と「20周年宣言」に共通する恵みの契約の基づく歴史観

20周年宣言は、『宣言』、『回顧』の項を扱った後で、実質的な内容を『歴史』の項から始めています。そこに提示されているのは恵みの契約に基づく歴史観です。これは、新しい試みではありません。創立宣言においても、恵みの契約に基づく歴史観が次のように提示されています。

「抑々(そもそも)人類は神の聖前(みまえ)に一体にして、等しく罪の奴隷たり。然(しか)るに神は罪ある人類の為に永遠の御旨によりて救の計画を樹(た)て御子イエス・キリストの歴史的贖罪事業を以て之を歴史の中に実現し、永遠の生命に定められたる者に信仰を与えて召し、之を義とし子となし、聖化しつつ神人と偕(とも)に住み給ふ。是(これ)我等の信じる宗教にして、其の救は人類の罪の起源と共に古く、而(しか)して人類救贖(きゅうしょく)完成の日に至る。四千年の昔、神はアブラハムを選びて『信仰の父』とならしめ、彼と契約を結び、彼の子孫を恵み(但し不信の者は折られたり)彼等にその智慧(ちえ)大能慈愛真理を顕(あら)はし給へり。而して時満ちて御子イエス・キリストを遣わし、彼の十字架の死と復活により我等の救いの基(もと)い置かるるや、不思議なる御摂理により、この救の福音はユダヤ人の不信を通して全世界に及びぬ。即ち神の救は旧約時代の一時的なるユダヤ民族的枠を脱して、本来の面目たる世界性を發揮し、使徒達によりて『万民の主、世界の光』として宣伝へられ、新約の基督教会は、斯(か)くて全世界にその存在を見るに至れるなり。」

一方、20周年宣言においては、『歴史』の項で恵みの契約について以下のように述べられています。

「そもそも、神が人間に与えたもうた恵みの契

約は、アダムにおいて罪に落ちた人類を、イエス・キリストによって救い、天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめる契約であって、それは、キリストの受肉と十字架と復活によって成就され、再臨において完成される。歴史は、この契約に基づく神のご支配のもとに、キリストの教会による福音の宣教をとおして、終末の栄光へと向かいつつある。われらは、聖書に示されたこの歴史観に立ち、キリストの教会のえだとして、福音宣教の使命を果たそうとするものである。」

以上のように「創立宣言」と「20周年宣言」とを比較してみますと、20周年宣言の方がより簡明ではありますが、二つの宣言は共通して恵みの契約に基づく歴史観に立っていることが具体的に確認できます。この意味において、歴史観においても、確かに20周年宣言は創立宣言を前提にしています。

2. 創立宣言と20周年宣言の強調点の差

— 契約的応答として信仰の服従と義務の強調

創立宣言も20周年宣言も共に恵みの契約に基づく歴史観に立っているのですが、そこに強調点の差もあります。創立宣言は、恵みの契約に基づく歴史観を述べた後で、教会論を以下のように展開します。

「神のみ明らかに知り給う所謂(いわゆる)『見えざる教会』は全世界に亘り、過去、現在、未来なる全歴史を通し地上と天上とを貫きて聖なる公同教会として存在す。然(しか)れども、我らは地上に於て、見えざる教会の唯一性が、一つ信仰告白と、一つ教会政治と、一つ善き生活とを具備せる『一つの見ゆる教会』として具現せれる可(べ)きを確信す。是(これ)日本基督改革派教会の主張の第二点なり。」

ここでは、「永遠の生命に定められたる者」からなる「見えざる教会」は恵みの契約を通して歴史の中で「見ゆる教会」として現実化されるのですが、それがどのように具現されるのかという点が、特に“教会制度的な面”から明らかにされて

います。すなわち、「信仰告白」と「教会政治」と「暮らし生活」において具現されると語っています。

一方、20周年宣言も、恵みの契約に基づく歴史観を前提にしていますが、教会について語る場合に、特に“実質的な面”を問題にしています。この点を明確に理解していただくために、前号でも引用しましたが、20周年宣言の起草者である吉岡繁先生自身の次のような言葉に耳を傾けたいと思います。

「ウェストミンスター信仰告白には、見える教会は、組織としての教会は、信条、礼拝、説教、礼典、教会政治による秩序、役員、そういうもの、組織を持ったものが教会だと言っています。20周年宣言におきましては、このような一つの外的組織というものを、もっと奥にある、生き生きとした生命をもつものとするという霊的生命に注目しているのです。」(『宣言の学び—創立宣言から四十周年宣言まで—』31頁)

吉岡先生が指摘しておられる点を、恵みの契約の本質論からしますと、次のような説明することができます。すなわち、恵みの契約は、神の側からの〈一方性〉と神と人間との関係における〈相互性〉という二つの面をもっています。すなわち、神の一方的なイニシアティブによって契約は成り立ちます。神が人間と契約を結び、人間との交わりに入ってくださいるためには、神の側のへりくだりと主権的恩恵性を絶対的前提として必要としているからです。しかし、契約である以上、神と人間との間に相互の義務関係も生じます。契約履行の責任関係です。この場合に、人間の側においては神に対する信仰と服従、責任と義務とが強調されることとなります。20周年宣言は、このような意味における契約における人間の信仰と服従、責任と義務の側面が強調されているのです。これは、“契約の実質”を問題にすることにもなります。この点に関して、やはり起草者の吉岡先生は次のように指摘しておられます。

「契約は相互的ですから両方の当事者がいるんです。普通の契約の場合は対等ですが、恵みの契約の場合は神様と人間が対等というわけにはいかないでしょうね。ですけれども、神様が命を注いでくださるという恩寵に対して、私たちは服従する。信仰と服従は契約に対する私たちの態度と責

任です。そういう意味で『信仰』というのを入れたわけです。……。私たちは応答しなきゃならない。その応答というのはやはり信仰です。教会は、政治もしなければならぬし、信条も作らなきゃならない。しかし、それは信仰と命を養うためにある。それが目的なのです。この点を一番注意しなければならない、こういうことですね。」(前掲書 33頁)

このような恵みの契約における人間の信仰と服従の契約的責任は、ウェストミンスター神学校の組織神学教授であったジョン・マーレーが特に強調した点です。吉岡先生のこのような主張には、先生自身の師でもあったマーレーの影響がうかがえるかもしれません。しかし、これは決してマーレーの独自の思想ではなく、元々契約神学の中にある思想です。しかし、歴史的改革派神学がいつもこの点を十分に自覚し、強調してきたわけではありません。この問題性もあって、マーレーは、契約における人間の責任と義務に注意を喚起したとも言えるでしょう。

いずれにしても、創立宣言も20周年宣言も恵みの契約に基づく歴史観に立っているのですが、20周年宣言は、契約的な信仰的応答と責任を強調し、その視点から創立宣言の第二点を展開したとすることができます。20周年宣言に関して、たびたび、創立宣言の「使命論的展開」として特徴づけられます。その通りだと思えます。しかし、それは、契約的責任にかかわる、“契約論的使命論”とも呼ぶべきものです。この点に、20周年宣言の神学的特質があるでしょう。

3. 聖霊論的・終末的展開としての20周年宣言

恵みの契約の実質的側面、契約における人間の信仰の服従と責任の強調は、“聖霊を通して、また聖霊に生かされた”人間の信仰的服従と責任の強調を意味します。そこでは、契約の実質を失った空洞化ではなく、キリストにあって神との生きた契約的交わりを喜び、感謝しつつ、契約の律法に従って神とその御業に奉仕するという“生き生きとした霊的活力”、“霊的生命力”を問題にすることにもなります。この強調点については、すでに前号でも指摘しましたし、今後さらに具体的な課題において指摘することができるでしょう。こ

の視点から見れば、20周年宣言は、創立宣言の第二点の“聖霊論的展開”とも表現できるはずです。

しかし、“聖霊論的展開”とは、同時に“終末論的展開”を意味しています。勿論、恵みの契約に基づく歴史観は、契約の仲保者が恵みの契約を通して神の国を終末に向かって完成に導くという歴史観であり、それ自体すでに終末論的な歴史観です。しかし、20周年宣言が人間の契約的責任を強調した聖霊論的展開を内容とするということは、神の国の終末論的展開に対する人間の奉仕的応答と責任を強く問うことになります。この点も、これから具体的に見て行くことができます。この意味において、20周年宣言は、終末論的展開を強く意識していると言えます。

この終末論的展開という側面は、起草者である吉岡先生自身が明確に自覚しておられたことです。吉岡先生は、20周年宣言を作成するにあたり、1962年～65年まで開かれた第二バチカン公会議を意識しておられたことを明らかにしておられます（前掲書 同31頁）。ローマ・カトリック教会においては、従来は使徒団の継承者としての司教団が教会の中心であったわけですが、第二バチカン公会議においては聖霊と信仰によって結合された神の民が強調されることになりました。同時に神の民を旅する神の民として捉え、神の民を終末的希望の共同体として理解しました。これが20周年宣言にも影響を与えています。

20周年宣言の場合には、改革派神学の伝統に従い、恵みの契約の歴史的展開という独自の神学的基盤に基づいていますが、確かに教会を神の民として捉え、しかも教会を終末論的な光の下で希望の共同体として位置付け、使命論的に理解している事実を確認できます。この要素は50周年の「伝道の宣言」にも結びついています。その意味では「伝道の宣言」は20周年宣言の延長線上にあると言えるはずですが、これはまた、「予定についての信仰の宣言」や、特にこれから出される予定の「終末的希望についての信仰の宣言」に密接に関連している問題でもあります。

IV. 教会の生命としての礼拝—「礼拝」の項

1. 教会の生命としての礼拝を問う

20周年宣言は恵みの契約の展開としての歴史を

枠組みにして、特にその実質面に着目して諸項目を扱うのですが、第一に取り扱うのは『礼拝』の項です。有名な項目ですので、皆さんも良くご存知でしょう。

「教会の生命は、礼拝にある。キリストにおいて神ひとと共に住みたもう天国の型として存する教会は、主の日の礼拝において端的にその姿を現わす。わが教会の神中心的・礼拝的人生観は、主の日の礼拝の厳守において、最もあざやかに告白される。神は、礼拝におけるみ言葉の朗読と説教およびそれへの聴従において、霊的にその民のうちに臨在したもう。」

おそらく20周年宣言の中で最も心を動かされる箇所はこのくだりではないでしょうか。前号でも触れましたように、私自身、20周年宣言が出された頃、個人的にも礼拝の問題で苦しんでいました。そのこともあって、20周年宣言のこの項を最初に読んだとき、本当に感激しました。“その通りだ。アーメン！”という気持ちでした。この問題こそが、その後の自分自身の神学研究の中でいつも心にあった問題でもありますし、今もそうです。

『礼拝』の項において注目すべきことは、「教会の生命は礼拝にある」とズバリと言い切った点です。創立宣言との関係でいえば、創立宣言には、実は“礼拝”という言葉がありません。創立宣言は、あくまで教会の制度面に焦点をあわせています。教会の制度面の問題は、歴史的に見ても、日本のキリスト教における教会形成論の克服すべき問題点であり、その事実を念頭に置けば創立宣言の主張は重要であり、また強調しなければならなかった点でもありました。しかし、創立宣言の主張に基づいた日本キリスト改革派教会の教会形成の二十年にわたる努力は、評価すべき成果と共に、一つの壁に突き当たっていました。その壁とは、すでに指摘しましたように、制度的に整備されてきた教会の“内実”に関する問題でした。その際、第一に問題になったのは「礼拝」であったのです。

一般に、「祈りの法則」が「信仰の法則」を規定する、と言われます。つまり、「礼拝の法則」が「神学の法則」を規定する、ということです。逆にいえば、それは、信条も教会政治も、結局は真の礼拝をささげるためのもの、真の礼拝共同体を形成するためのものである、ということの意味し

ています。ですから、信条や教会政治をどれほど整えても、それによって礼拝が枯渇するならば、それは本末転倒だということにもなります。この意味において、20周年宣言は、教会の内実の面から、さらに踏み込んで言えば礼拝の内実の面から、改革派教会の歩みにメスを入れたと言えます。これは、教会の行き詰まりの問題の核心に切り込んだことを意味しています。

2. 天国の型としての礼拝

—礼拝の聖霊論的・終末論的理解

20周年記念宣言は、「教会の生命は、礼拝にある」と断言した後で、「キリストにおいて神ひとと共に住みたもう天国の型として存する教会は、主の日の礼拝において端的にその姿を現わす」と述べています。この点を、恵みの契約という視点からもう少し丁寧に説明してみたいと思います。

恵みの契約の実質は、「キリストにある神と人との交わり」です。教会は、恵みの契約に基づく神の民ですので、教会は「キリストにあって神との交わりに生きる民」ということになります。天国において、すなわち終末の栄光の御国において、恵みの契約は完成し、「神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる」（黙21：3）ということが完全に実現します。そのとき、教会は完成します。この意味で言えば、地上の教会は、すでにキリストにあって神との交わりに生かされていますが、いまだ完全ではなく、終末的完成への途上にある教会です。したがって、20周年宣言が言うように、地上の教会を、「キリストにおいて神ひとと共に住みたもう天国の型として存する」と表現することができます。この天国の型としての教会の実体が、最も鮮やかに現れるのは礼拝においてです。主の日の公的礼拝において、恵みの契約の仲保者キリストが聖霊において臨在され、そこでは神ひとと共に住みたもう現実がくっきりと姿をあらわします。そこには、確かに完全なものではないとしても、天国の現実が現れ出ているのであり、この意味において礼拝において天国の前味を味わうことにもなるのです。

以上のように20周年宣言は、教会の実質を問題にし、さらに教会の実質が集中して現れる主の日の公的礼拝を問題にします。また、ここで明らか

にされているような礼拝理解には、聖霊による生けるキリストの臨在が問題になっているのであり、「聖霊論的な思考」が力強く働いていると言えます。同時に礼拝を「天国の型」として表現していることから明らかなように“終末論的な思考”も顕著です。ここには20周年宣言の特質が明瞭に現れているといえるでしょう。

このような礼拝理解は、「予定についての信仰の宣言」（五：2）や「伝道の宣言」（四）などにも見られます。したがって、現在では、このような礼拝理解は当然視されるかも知れませんが、20周年宣言が出された頃には改革派教会において必ずしも常識にはなっていなかったことも覚えておく必要があるでしょう。このような礼拝理解は、新鮮なものであり、強いインパクトを持ち、礼拝の実体を新たな視点から反省させる力があつたのです。

3. 天国の型としての礼拝の現実化への道

しかし、次に問題になるのは、上に述べたような礼拝をどのようにして実現しうのかという点です。

その答えは、宣言の言葉を用いれば、「み言葉の朗読と説教とそれへの聴従において」です。宗教改革者が、とりわけカルヴァンが主張したように、「神の言葉が真実に語られ、聴かれ、聖礼典が正しく執行されているところに真の教会がある。」すなわち、そこには真のキリスト教会が存在するのであり、キリストが確かに臨在されるということです。ですから、改革派教会は、伝統的に、神の言葉を正しく語り、それに聴き従うこと、聖礼典を正しく執行することを真剣に求めてきたのです。

しかし、20周年宣言の意図する契約的意味における信仰的応答と責任の観点、あるいは聖霊が働かれ、聖霊に用いられる人間の側の奉仕とそのあり方という観点からすれば、「神の言葉が真実に語られ、聴き従われ、聖礼典が正しく執行される」とはどういうことなのか。この問題が、もっと具体的に、実践的に問われなければならないでしょう。

説教に関して言えば、「神の言葉が真実に語られ、聴き従われる」とはどういうことなのか、

説教者の孤独な作業によってだけでなく、会衆によっても、教会全体の課題として考えられなければならないはずだ。

説教者は、もちろん、聖書的説教とは何か、聖霊による生けるキリストが差し出されるような説教とは何かを、説教学的にも、実践的に真剣に追求しなければなりません。そのための学習や説教者相互の相互研修も必要とされます。20周年からは相当時間が経っていますが、説教者相互の説教修練の試みなどが現在ではかなり活発に見られるようになりました。これは、一つの“希望のしるし”です。

20周年以降、契約の子供たちの礼拝出席がずいぶん強調されるようになりました。そうであれば、説教者は、聴衆としての子供たちの問題を真剣に考えなければならないでしょう。現在では、主の日礼拝の中で契約の子供たちへの短い説教などが試みられているケースも多くなり、20周年当時と比べると大きく進歩してきていると思います。歓迎すべきことです。しかし、礼拝説教そのものも、聴衆としての子供たちに理解できるように、説教者はあらゆる工夫をすべきです。改革派教会の説教の難しさには尊重されるべき側面が含まれていますが、同時に説教が“聴かれ、聴従される”ためには、説教が“わかる”という点が反省されなければならないでしょう。

説教の問題は、説教者だけではなく、説教を聴く会衆の問題でもあります。説教が教会全体の課題である以上、説教をより良きものにするために、聴衆の責任と参与も問われなければなりません。説教の品定めをし、説教者に文句をいっておれば良いというような性質の問題ではありません。20周年宣言が「み言葉の朗読およびそれへの“聴従”」と述べているように、会衆の側でも説教への“聴従”が問題になるのです。神の言葉は語られるだけではなく、“聴かれ、服従される”ときに、はじめてキリストの支配は貫徹されるのであり、キリストの臨在はリアルなものとなります。説教に対する聴従とは何を意味するのかが理論的にも、実践的にも、具体的に検討されなければならないでしょう。

例えば、説教批判の問題はたえず教會的混乱の要因になっています。説教形成における会衆の参

与を考えると、説教批判のあり方も問題にすることになるでしょう。説教が、教会全体の課題である以上、説教者の職務への尊敬が堅持されつつ、同時に会衆が建設的に、共同的に参与できるような説教批判の場とそのあり方も考えられなければならないように私は思います。説教批判という言葉が誤解を招くのであれば、“教会の説教”をより良きものにするための共同作業の場の設定が必要とされていると言い換えることもできます。

さらに、礼典の問題があります。実は、礼典について、20周年宣言は直接的には言及していません。宣言執筆者の吉岡先生は、20周年宣言のこの「礼拝」の項で礼典に言及されていない事実に触れて、み言葉の説教と聴従の中に礼典の問題も含み込んで解釈して欲しいと願っておられます。しかし、やはり礼典については明記されるべきであったと思いますし、その点は少し残念です。20周年宣言は礼典について言及していませんが、説教だけではなく、礼典のあり方も問われることは自明のことです。

その場合に、礼典が正しく執行されるとはどのようなことなのかややはり問われることとなります。洗礼や聖餐の実践のあり方が追求されなければならないはずだ。特に聖餐式は、天国の型としての教会の姿が目に見える形で現れる場です。天国の前味を味わう最も具体的な場です。それだけに天国の祝宴の先取り、その前味を味わう場としての聖餐式の持ち方についてさらに工夫がなされるべきです。

いずれにしても、礼典の問題も、教師だけが考えるべき問題ではなく、まさに教会の問題であって、礼典にあずかる会衆のあり方も真剣に問題にされなければならないはずだ。

4. 20周年宣言の礼拝理解とその他の今後の課題

20周年宣言の今日的課題という点からすれば、礼拝との関係では上に述べたような説教や礼典の課題が問題になりますが、20周年宣言の意図である礼拝の実質化を考えるならば、なお他の多くの課題が考えられなければならないでしょう。それについて少し触れておくことにします。

20周年宣言が出された頃の改革派教会において

は、何人かの自覚ある教師たちは別にして、例えば、礼拝のリタジー、礼拝の順序や構造にそれほど深い関心はなかったように思います。改革派教会の伝統的リタジーについての研究もあまり進んでいなかったはずで、20周年宣言は、礼拝の内実を問題にし、礼拝そのものへの関心を喚起し、しかも実践的な視点を強く要求しましたから、その後の改革派教会の歩みにおいては飛躍的に礼拝についての研究が進んだと思います。大会的にも「憲法委員会第三分科会」が組織され、礼拝の問題を本格的に扱うようになり、現在も「式文」や「礼拝指針」の改訂への取り組みがなされています。2004年6月の大会役員修養会では、同委員会は『礼拝および教会活動の指針』のタイトルの下で、「礼拝指針」の第二次改正案委員会試案を提出しました。充実した内容で今後の成果が大いに期待されます。これは、20周年宣言の「礼拝」の項の今日的展開という意味でも評価すべきことだと思います。

20周年宣言以降の、特に顕著な変化は礼拝における賛美の問題です。これも改革派教会の礼拝のリタジーへの関心の深まりと一体的に関係することですが、特に詩篇歌への関心が高まったことを指摘することができます。

神学校の特別講義の中で鈴木雅明先生は、説教が宣言的な性格をもっているのに、賛美歌は情緒的なロマンティシズムの世界に没っていてよいのか、という問題提起をされました。先生自身も、必ずしも詩篇歌だけを歌えと主張しておられるわけではありませんでした。問題は、教会の賛美が、説教の宣言的な性格に対応する賛美となっているかどうか、という点です。近代では、例えば、シュライエルマッハーの説教観は、宗教的感激をいかに上手く表現して聴衆に伝え、聴衆を宗教的靈感に導くかというものでした。その種の説教観をもって説教をしているキリスト教の流れもあります。当然これには宗教感情を揺さぶる賛美歌が対応しますし、ふさわしいということになります。しかし、改革派教会の説教観は、シュライエルマッハーの説教観とは異なります。説教においては神の言葉が、まさに神の言葉として宣言的に語られます。そのとき、賛美歌だけは別枠で、ロマンティックな思いに満たされて情緒的に歌われる

ならば、説教の果たす役割は揺らいでしまうことになるでしょう。説教の宣言的性格に対応した賛美歌が歌われなければならないということです。改革派教会の説教と詩篇歌とはある意味で一体的な関係にあるのであり、少なくとも詩篇歌に関心を持ち、詩篇歌を歌うことに習熟する努力はすべきだと私は思います。

最近では、会堂建築に関しても、改革派教会の礼拝理解に対応した会堂建築が考えられるようになり、評価すべきことだと思います。これもまた、礼拝の充実との関係で見逃すことができない点です。

以上、20周年宣言の礼拝理解に基づいて、20周年以降に起こった変化をたどり、現在の課題をいくつか取上げてみました。

5. 「神中心的・礼拝的人生観」の主張

20周年宣言は、「礼拝」の項の中で、「わが教会の神中心的・礼拝的人生観は、主の日の礼拝の厳守において、最もあざやかに告白される」と主張しています。この主張は、別個に独立して取上げたいほど重要な問題です。しかし、20周年宣言は、「礼拝」の項目の下でこの問題をあつかっていますので、それに従ってこのところで扱っておきたいと思います。

言うまでもなく、「有神的人生観・世界観」の主張は、創立宣言の第一点の主張です。しかし、その主張を20周年宣言は、「神中心的・礼拝的人生観」というように言い換えました。このような言い換えの中に創立宣言とは一味違った20周年宣言の特徴が表れています。この点にも、20周年宣言が、“内実”あるいは“生命力”を問題にするという特徴が良く表れています。

創立宣言の「有神的世界観・人生観」という表現は、ある意味では第三者的に、いわばイデオロギーのように理解される可能性があります。単なる主義主張に終わる危険性があります。しかし、「神中心的礼拝的・人生観」と言い換えると、ただちに神との生命的な関係が問題になってきます。恵みの契約はキリストにあって神との交わりに生きることであり、契約の民の生活はその神との交わりの生活の全領域における展開、すなわち神礼拝の全面的な展開です。このような生き方が、有

神的人生観・世界観に生きることを実際には意味しています。ここでも20周年宣言は、やはり“実質”の側面から考えていることがわかります。

以上のような意味において、有神的世界観・人生観に生きるとは、神中心的・礼拝的人生観に生きるということです。従って、礼拝の厳守なしにそれは空文と言うことにもなります。ここでは、わたしたちの礼拝に対する関わり方が当然問われてくることになります。

また、礼拝そのものに関して言えば、礼拝が聖霊によるキリストの臨在が鮮やかに示される霊的生命に溢れた礼拝でなければ、神中心的・礼拝的人生観にも生きることはできないことを意味します。そのような礼拝の実質がなければ、生活の全領域において神礼拝の生き方を貫くエネルギーも

出てきません。いわば“ガス欠状態”になってしまふからです。この点を考えるとき、これまで考えてきた教会の生命としての礼拝、天国の型としての礼拝の実質化がどれほど大切な意味を持つかをあらためて理解していただけるでしょう。

20周年宣言の神中心的・礼拝的人生観については後ほどまた触れることになりますので、ここではこの主張の持っている根本的意味について確認しておくことにとどめます。結論的に言えば、20周年宣言が礼拝との関連で有神的人生観・世界観の問題に言及する意味を次のように要約できるでしょう。すなわち、“礼拝にこそ、創立宣言における有神的人生観・世界観の主張の具体的展開の実践的拠点がある。”ということを確認した点です。

日曜学校 2004年度カリキュラム (2005年1～3月分)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題 単 元 の 目 標	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
1月2日 新年	預言者イエス 聖書・教会・礼拝で語り続けておられるキリストを土台として生きよう	問25 マタイ7:24-29	ジュ39,44、ハイ31、大43、小24 ヤコブ1:22
		9日	大祭司イエス 主イエスは子どものために執り成し続けておられる。執り成しの恵みに立とう
16日	真の王イエス 十字架のキリストこそが勝利の王、王の王である。この主に従う喜びに生きよう	問27 ルカ19:28-40	ジュ37,42、ハイ31、大45、小26 マルコ10:45
		23日	恵みのみ 救いは徹底して神の恵み。小さな者・子どもに神の恵みが現れることを知ろう
30日	選びと有効召命 選びにより、子どもたち皆が神のもとに招かれている。恵みの神を知ろう	問29 ルカ18:18-30	ハイ21、大59、小20,29,31,85 ローマ10:12,13
		2月6日 (信教の自由)	キリストとの結合 聖霊によりキリストに結ばれ、キリストとの強い絆のうちに歩もう
13日 レント	罪の赦しと義認 神によって義とせられ、罪赦される喜び、打ち砕かれることの祝福に生きよう	問31 ルカ18:9-14	ウ小33、ハイ56 ローマ3:23,24
		20日 レント	神の子とされる 神の子とされる霊を受けている者として、神を「父よ」と呼ぶ祝福に生きよう
27日 レント	聖化の恵み 主イエスの洗足・十字架の恵みによって、まったく聖とされている祝福を喜ぼう	問32,33 ヨハネ13:1-11	ウ小35,36 ヨハネ13:1
		3月6日 レント	愛の歩み 御子イエスの姿に似せられて、感謝と喜びをもって互いに仕え合おう
13日 レント	キリストの苦難 へりくだって苦難を引き受けられたキリストを仰いで、自らの罪を知ろう	— ヨハネ18:1-11	子どもカテキズム27 ヨハネ18:9
		20日 受難週主日	十字架のキリスト 神の御心の成就であるキリストの十字架を仰いで、神の恵みに感謝しよう
27日 復活祭	復活のキリスト 復活の主イエスが弟子たちに御自身の姿をお示しくださった喜びを味わおう	— ヨハネ21:1-14	子どもカテキズム24 ヨハネ11:25

編集後記

●教理を平易に物語るには、信仰が必要と痛感しました（宮武輝彦）。●子どもたちに「ウケ」るようにもっていければとねらってみました（長田詠喜）。●神の恵みと感謝しつつも、大変なことという思いが消えないことも事実です。続けることの力のなさを痛感しています（多治見教会）。●イエスさまを信じて10年目のクリスマスを迎えます。あらためて恵みを覚えつつ記しました（石

原知弘）。●皆様のニーズにあわせて新しい試みも取り入れていきたいと願っています。ぜひお声をお寄せください（木下裕也）。●2001年に始まったこの営みもすでに四年目。継続は力なり。多くの教会・兄弟姉妹からご支援をいただくようになりました。「子どもたちに福音を！」と願ってなお励んで参ります（望月信）。

〈イラスト募集のお願い〉

前号より、イラストを掲載しています。今号には、日曜学校生徒の描いたイラストも用いられています。弊誌を用いておられる皆様の中にも、豊かな賜物をお持ちの方々がおられることと思います。イラストを募集いたしますので、ぜひお寄せいただければ感謝です。また、そのほかにも、日曜学校や分級のアイデア、漫画などの投稿も大歓迎ですので、よろしく願いたします。

〈口座番号変更のお知らせ〉

口座番号が変更されています。お手数ですが、ご確認の上、新しい振替口座、また新しい郵便振替用紙をお使いくださいますよう、お願いいたします。

Soli Deo Gloria!

☆ 本文執筆者一覧 ☆

聖書研究

安田恵嗣 勝田台教会牧師
弓矢健児 新座志木教会牧師
春名義行 津島教会牧師
辻幸宏 大垣伝道所協力牧師
相馬伸郎 名古屋岩の上伝道所宣教師

カテキズム研究

吉田隆 仙台教会牧師
木下裕也 豊明教会牧師
望月信 高蔵寺教会牧師

説教展開例

望月信 高蔵寺教会牧師
木下裕也 豊明教会牧師
三川栄二 稲毛海岸教会牧師
岩崎謙 神港教会牧師
相馬伸郎 名古屋岩の上伝道所宣教師
小野田雄二 上野緑ヶ丘教会牧師

分級展開例

幼稚科
宮武輝彦 芸陽教会牧師
小学科下級
長田詠喜 高松東教会牧師
小学科上級
多治見教会日曜学校教師会
中学科
石原知弘 北神戸キリスト伝道所宣教師
成人科
牧田吉和 神戸改革派神学校校長

表紙イラスト

山口英俊 豊明教会長老（日曜学校教師）

本文イラスト

名古屋岩の上教会日曜学校
山口英俊 豊明教会長老（日曜学校教師）

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上传道所宣教師
木下裕也	豊明教会牧師
辻幸宏	大垣伝道所協力牧師
春名義行	津島教会牧師
望月信	高蔵寺教会牧師

定期購読・バックナンバーの申し込み

春名義行 〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30 津島教会
Tel/Fax. 0567-26-4221

郵便振替口座 00890-2-148183 「伊藤治郎」

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2004年10・11・12月号 (季刊)

第15号

2004年8月15日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宣教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701

編集・印刷 株式会社あるむ
〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価 900円 (本体価格)
